
黄昏時の溜息

薄明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏時の溜息

【ZPDF】

Z0002R

【作者名】

薄明

【あらすじ】

金銭トラブルに巻き込まれ、困っているところを助けてくれたのは、街一番の金持ちで変人と噂される青年だった。だけど彼の行動は謎ばかり。その上、私の秘密をなぜか知ってるよつで……。ねえ、あなたの目的は何?甘い言葉も過ぎれば冷めてしまつて知つてる?

お題サイト capriccio様 (<http://noir.su> b : jp / cp /) より「譚詩曲 第一番」をお借りしました。

失敗した。

内心、大量の冷や汗をかきながら、けれど正面に向けた眼差しは決してゆるめることなく睨みつける。

散々街中を駆けずりまわったおかげで、ゆるく編み上げていた髪は見るも無残な状態だった。

冬も近づく寒空の下。まさかここまで汗をかくことになるとは。その上、日頃走ることとは無縁の生活を送っているため膝もすでに悲鳴を上げている。

背後は行き止まり。正面にはガラの悪い男が三人。最初から狙っていたように路地裏に追い込まれ、まさかその先が行き止まりとは知らず。

「どうして私が借りてもいいお金を払わなくちゃならないのよー。朝から何度もこの問答を繰り返したことか。

「もう諦めなつて。あの家を手放したつて、まだ借金は返しきれないんだよ」

三人の中で一番年配の男が呆れたような眼差しを向けてくる。あれだけ走り回つたにも関わらず、男が息も切らしていないことに頭のどこかで逃げ切れないか、と諦念が過る。だが、ここで諦めてしまったらそれこそ相手の思うつぼだ。

彼らが決して手荒なことをしないのは、コーフュニアを商品と思つてゐるからだろう。

まったく冗談じゃない。

家の一階を貸していた一家が、自分の知らないうちに家と土地の権利書を持ち出し、お金を借りていたなんて。

今思えば、路地裏に駆け込むことよりも、あの一家に家を貸したこと自体が敗因なのだろう。自らの迂闊さに思わず歯がみする。

取りあえずこの状態を何とかしなければならない。じりじりと焦りながら、咄嗟に思いついた言葉をよく考えもせぬ口にしてしまったのは、きっとこの現実を受け入れたくなかったからに違いない。

「だからってこんな嫁き遅れの……トウの立った女が身体を売つたつて、借金なんて返せないわよ！」

我ながらなんて情けない言いわけ。

コーフェミアは先月二十五になつたばかりだ。

二十歳前後で結婚するこのご時に、未だ独身なのだから嫁き遅れには違ひない。しかし肩身の狭い思いをしているわけではないので気にしていなかつたが。

正面にいる男はコーフェミアの台詞に一瞬鳩が豆鉄砲を食らつたよつの顔をしたが、肩をすくめると盛大な溜息を落とした。

「……ねえちゃん、それ、自分で言つて悲しくねえか？」

「う、うるさい！」

しみじみと言つ男の突つ込みに動搖を隠せず、口元もりつも反論する。気にしていないが、妙な同情は頭にくる。

お互ひ微妙な睨み合いのまま平行線をたどつていたものの、先程から視界の隅にちらちらと入る路地の一角が、実のところ気になつて仕方がなかつた。

取り立て屋たちのずつと背後。黒っぽいフロックコートを着た、まさに上流階級という様相をした男がじつとこちらを見ていたからだ。

壁に寄りかかり、こちらの成り行きを見ているその男は、二十代後半ぐらいだろうか。背は高い。髪は黒く、遠目で顔は良く見えないが、口元がゆるく弧を描いているように見える。

別に助けてくれとは言わないが、黙つてしかも面白そうにこちらを見ているのは、気分のいいものではない。

渋面を作ると、取り立て屋たちも自分たちから逸れた視線に気づいたのか、コーフェミアの見ている先を追つて男の存在に気づく。

「なんだ、にいちゃん。用がないならさつさと行きな」

感心なことに彼らも事を荒げるつもりはないようだつた。静かに追い払おうとしているのが窺えて、助けて欲しいような、巻き込まれて欲しくないような、どつちつかずの感情がせめぎ合ひつたが、男のとつた行動は予想外のものだつた。やつと氣づいてもられたことが嬉しかつたのか笑みを深めたのだ。

「いや、気にしないでくれ。珍しい光景を少しばかり見学していただけだ」

そう言つと壁から身を起こし、服についた埃を優雅にはたく。

「……」

「えつと……」

取り立て屋たちもユーフェニアも、男の発言に呆気に取られた。こういう場合、助けるのが紳士といつものではないだらうか。確かに助けてくれとは言わなかつたが、言わないと助けてくれないものなのだろうか。

啞然としていると、男はゆつたりと靴音を響かせて近づいてきた。「どうしたんだい？　さあ、続けてくれ」

ユーフェニアが口を挟む間もなく、男は取り立て屋との間に立ち、続きを促すように両手を広げた。

なに、この人。

取り立て屋たちもさすがに奇妙なものを見るような眼差しを向けている。

「見世物じゃないんだがな」

それには同感だつた。

「そうかい？　見世物じゃなければ何だつて言つんだらうね。女性をこのような路地裏に連れ込んで、普通じゃ考えられないだらう？」
穏やかな言い方に反して、取り立て屋たちに向けた眼差しは、先程とは打つて変わり、決して穏やかとは言い難いものだつた。

もしかして助けてくれようとしているのだろうか、と思わず淡い期待をしてしまう。何気を取り立て屋たちとの間に立つていても底づてくれている、と考えるのは都合が良過ぎだらうか。

だが、突然豹変した男の非難めいた台詞に、取り立て屋たちの方が氣色ばんだ。色めき立て一步出た彼らは、しかし手前にいた年配の男に制され踏み止まつた。一方、最初から話をしていた年配の男は、ちらりと男に視線を投げると、なんと彼を執り成し始めたのだ。

「そつは言つが、こつちも仕事なんだよ。そのねえちゃんがお金を返してくれないと困るんだよ」

「私はお金なんて借りてないわよ！」

折角助けてくれそうな人なのに誤解されると、すかさず反論する。事実、非難されてもそれは身に覚えのない借金なのだ。

確かに家を抵当に入れられたのは迂闊だつた。だが、身に覚えのない借金まで背負うほどコーヒーミアもお人好しではない。

「だが見るからにこの状況からすると、かなりの借金なんだろ？」「取り立て屋の説明から、くるりとこちらに向き直つた男は、すでに険しさを纏つていなかつた。あれは目の錯覚だつたのだろうかと思えるほど穏やかな眼差しを向けてくる。

だが今、何か聞き捨てならないことを言わなかつたか。

「待つてよ！ あなた、どちらの味方なの！？」

思わず怒鳴つてしまい、ハッと手で口を覆つた。助けてくれようとしている人にこの言い草はない。機嫌を損ねるわけにはいかないだろう。

男は慌て始めたこちらの様子など氣にも留めず首を傾げていたが、何を思ったのか、ふいに身をかがめるとコーヒーミアの顔を覗き込んだのだ。しかも無遠慮にしげしげと見つめてくる。

「……きみ、もしかしてコーヒーミア・エヴァーツ？」

「え？ ええ。そうよ」

あまりの近さに身を引きながら頷いた。

少なくとも彼とは初対面のはず。名前を知られているのは少し氣味が悪いが、会つたことがあつただろうかと思わず男の顔を凝視した。自然と目は男の印象的な瞳に寄せられて、その夜を湛えたよう

な深い色を頼りに記憶の底を引っくり返す。しかし見覚えはなかった。出会ったことがあるなら、きっと忘れるはずはない。

しかもこの現状をどうにかしてくれるといつなら、藁にも縋る気持ちで期待を込めて見つめてしまった。

その思いが伝わったのかどうか。男は身を起こすと、顎に手をあてて唸つていたが、それは一瞬の事ですぐに顔を上げると男たちを振り返つた。

「事情が変わった。きみは家に帰つていいといい。おまえたちは元締めのところに案内してくれるかい？ 彼女の借金について話し合おうじゃないか」

「は？ 代わりに払つてくれるつていうのか？」

取り立て屋が胡散臭げに鼻を鳴らす。

「場合によつてはね。といつことで案内してもりおか」

手早く話をまとめると、わざと身を翻し、路地から出て行く。ついでいる青年にユーフュニアは咄嗟に声をかけた。

確かに現状をどうにかして欲しいと思つたが、いくらなんでも見ず知らずの人に借金を返済させるつもりはない。

それを告げると青年は振り返つてニヤリと笑つた。

「どちらにしろ、きみの家を訪ねるつもりだったんだ。話は落ち着いてした方がいいからね。取りあえず、こちらは片付けてしまおつ」そう言って、取り立て屋たちを促し歩き出す。

最初はいきり立つていていた取り立て屋たちも、互いに顔を見合させて戸惑いを見せている。

だが、やはりといふか仲間を仕切つていた男だけは、両腕を組んで青年に声をかけた。

「そう言つて彼女を逃がして、おまえも俺たちを撒こうって魂胆がないとは言えないだろ？ だから俺は話がつくまで、いっちゃんを見張つておくが構わないよな？」

男の言葉に心臓がひやりとする。言ひ分は分かるが、家も知られているため逃げられるはずもないのに。

怖さの方が先に立ち、縋るよつに彼を見た。

だが彼は「抜け目がないな」とだけ呟くとあつさつと了承してしまった。

「いいだろつ。彼女の家で待機していくくれ」「わかつた。ところで、にいちゃん。あなたの名前は？」

問われ、再度青年は振り返った。

「そうか。まだ名乗つていなかつたな。ティーン・ラムレイだ」一瞬、先に行こうとしていた取り立て屋たちがピタリと足を止めた。

ユーフェミアも耳を疑つた。この街の者なら、その名前に誰もがすぐに一つの言葉を思い浮かべてしまう。

変人ラムレイ……。

密かに囁かれるそれが彼の異名だ。

では行こうかと、取り立て屋一人を促して青年は路地裏から姿を消した。

驚きのあまり息をすることを忘れていたユーフェミアだが、それは残つた男も同じだったようで、思わず互いに顔を見合わすと、止めていた息を深々と吐き出したのだった。

彼の名がこのバルフォアの街に知れ渡つたのは今から五年前。街一番の一等地にある、街一番のいわくつき物件であつたオールドリッジ邸の買い手となつたからだ。

オールドリッジ邸はティーン・ラムレイの手に渡るまで、持ち主を何度も変遷し、卑い者だと一日、もつて五日もすれば、どんな屈強な者も取るものもとりあえず逃げ出していくと言わってきた屋敷だ。

聞くところによると、逃げ出した者たちはみな責ざめながら、日暮れから明け方まで幽靈に追いかけ回されたと口を揃えて言つている。

つまり、知る人ぞ知る幽靈屋敷なのだ。

そのような噂のある屋敷を、次はどのようないふる人物が持ち主になるのかと街の住民たちは噂の種に……ある意味、楽しみにしていたのだが。

彼が屋敷に入つてから、数日。一向に出ていく気配はない。

十日経つても一ヶ月経つてもそれは変わりなく、それどころかパーティーでも開いているのか、敷地内からは煌々とした明りと楽曲、人のざわめきが聞こえてくる時もあるという。

そしてついに三ヶ月を迎える頃、バルフォアの住民は彼を、幽靈と暮らす変人だと言つよつになつたのだった。

取り立て屋で一人残つた男は、オーブリーと名乗つた。

付いて来る男を居心地悪く思いながら帰路につき、ユーフェニアが鍵を取り出し玄関を開けると、遠慮もせずに彼は中へ入つていく。抵当として差し押さえられているこの家の現在の所有者は、確かに彼らの元締めなのだが、勝手に上がり込まれたようで気分が悪い。

それに、この家が自分の家ではないことが、コーフュミアとしては実感がわからなかつた。

一階は昨日まで古着屋を営んでいたバック家の物がそのまま残つていた。だが、彼らは昨夜のうちに夜逃げをしてしまつたのだ。

朝起きた時、一階は静かだつた。すでに一家の姿はなく、訳が分からぬコーフュミアの元にオープリーたちがやつて来たのだ。このようなことになつて迷惑をかけられ腹は立つてゐるが、人の気配のない家はやはり寂しい。それに、一家がここに戻つてくることはもう一度とないのだろう。

どうしようもない現実に虚しさだけを覚え、一階を興味深げにうろついてゐるオープリーを放つておき、一階へと上がつた。

「ただいま」

誰もいらない空間に声をかけ、鍵を戸棚の所定場所に置く。まさか家を抵当にいれられたとは思いもよらなかつた。

だが言われてみれば、数日前に祖父が何かを言つてゐたことを思い出す。今思えば家と土地の権利書のことだったのだが、ここ数日、仕事が立て込んでいて氣にも留めていなかつた。それに昨夜は、前日から徹夜で仕事を片づけ、疲れきつて深く眠つてゐた為、一階の物音にも気づかなかつたのだ。

まだ安心はできないが、あの青年 ディーン・ラムレイはこの街で一、二を争うほどの金持ちだと言つてゐる。彼が一体どのような用件で自分を訪ねて來たのか知らないが、これ以上事態が悪くならぬよう祈るしかない。

夕闇の迫りくる窓辺に立ち、道行く人々を見下ろす。

この家はコーフュミアが祖父から受け継いだ唯一の財産だ。できることなら手放したくはない。それに。

窓に映つた室内を振り返り、先ほどまで誰もいなかつたその場所に立つ祖父に、ごめんなさいと呟く。

「もしかしたら家を手放すことになつてしまつかもしれない……」

今では絶対に祖父の温かい手を握ることはできないが、その笑顔

の温かさは生前と変わらない。

『ま、仕方ないの』

日が暮れる頃になると、祖父のナフムは現れる。

五年前、ナフムは確かに亡くなつた。他に家族のいないユーフェミアは一人、ここで暮らすことになつたのだが、しばらくして祖父が廊下に立つてゐることに気づいた。

だが幽霊というにはおぞましさがなく、生前の元気だった頃、そのものの祖父で、病氣だったことも亡くなつたことも、夢だったのではないかと思えてしまふほど変わりなく、だが透き通る身体は現実で、どうしたものかと思いながら数日を過ごしてゐたが、ある日、どうにも堪え切れなくなつて声をかけてしまつたのだ。

話してみるとナフムは自分が死んでいることに気づいていた。ただ、ユーフェミアに見えているとは思わなかつたようで、怖がらせてはならないと、これからもずっと見守つていくつもりだつたと話してくれた。

それからは日が暮れると、ナフムと過ごすことにしてゐる。一緒に夕食を取つたり、仕事を手伝つてもらつたりしてゐる。

ナフムはかつて大学の教授をしていた経歴もあり、ユーフェミアも子供の頃は彼に文字や勉強を教わつたのだ。おかげで女性としては珍しく読み書きができる、今では写字職人として一人で生活する分にはそこそこの収入も得てゐる。

「ねえ、もしも……家を手放すことになつたら、おじいちゃんはどうなるの?」

『ん? そうじやな。わしはここから動けんじやろつて』

分かりきついていた返事に、口を引き結ぶ。

今までどうにか一人でやつてこられたのも、夜になるとナフムが現れてくれたからだ。それもこれも自分のせいなのだが、これから本当に一人きりになるのかもしれないと思うと、胸が押し潰されそうになる。

『心配せんでも大丈夫じゃ。何となくそんな気がするわい』

撫でる感触はないが、ナフムが今、頭を撫でてくれているのが分かった。コーエミアの頭の位置に持ち上げられた手が、ゆっくりと動いている。

「おーい！ ねえちゃん！」

一階からオーブリーの呼ぶ声がして、ハツとする。

いい加減、ねえちゃんと呼ぶのは止めて欲しい。中年の弟を持った覚えはないのだ。

何か言い返そうかと思ったが、続けてディーン・ラムレイが来たことを告げられ思い止まる。

不安はあったが行かなければならぬ。今後の生活がかかっているのだ。

穏やかに笑むナフムに見送られて、コーエミアは一階へと向かつた。

「つまり、現在この家は貴方のものなのね？」

説明を受けながら、確認した。

ディーン・ラムレイの説明によると、コーエミアが払うべき借金は、払わなくともよくなつたらしい。元々借金はコーエミアがしたものではなく、保証人になつていたわけでもないので、それが幸いだつたと言われた。

だが、やはりこの家は抵当に入つていたようで、家と土地の権利書はすでに彼らの手に渡つていた。当然それは払わなければならなくて、彼がその場で支払つたと言つた。そして権利書は現在、彼の手の中にある。だから当然、家主はディーン・ラムレイということになる。

オーブリーはそこまで話を聞くと、用は済んだと判断したらしい。呆気ないほど簡単に立ち去つてくれた。

コーエミアたちは一階の客間に取りあえず落ち着き、話を続けているのだが。

「きみは、このままここで暮らしたい？」

「あたりまえです！」

もし出でいけと言われば出ていくしかなかつたが、選択の余地が残されていはるなら、もちろんこのまま住ませてほしい。ナフムとも離れる必要はなくなる。

「そうだね。私も別にこの家が欲しかつたわけじゃないからその点はかまわない」

さらりと言われたその言葉に、思わず目を見張る。

欲しくもないのに家を買う人の心理など分からぬ。助けてくれて文句を言うのも何だが、それだけお金が有り余つてはることを何気に自慢しているのだろうか。

「ありがとうございます」

引きつりそうになる頬を笑顔でどうにか誤魔化すと、彼の機嫌を損ねないよう一先ず礼を口にする。

しかしコーエミアには一つだけ懸念があつた。
それを察したのかどうか。彼は口を開いた。

「ただ――」

「きたつ、と思つた。

無料^{タダ}で美味しい話など、あるはずないのだ。

「何でしきう？ 家賃はきちんとお支払いしますけど」

差し当たつて先手を打つてみる。

家を買い戻すことも考えたが、それはどう考へてもコーエミアの現時点での収入では無理だつた。ならばせめて人道的に暮らしていける方法を選びたい。

彼はそれには答えず周囲を見渡すと、面白そうに口元を歪めた。

「ここは以前、店をやつていたのかい？」

「ええ。昨日までは古着屋でした」

目の前に座る男が着てはいる服よりも格段に質の落ちる服が、客間とはいへ其処此処に広げてあつた。

まだ積み上げられている服にも目を止め、コーエミアは首を横

に振る。LJのままLJの家に住むなり、店の品物も処分しなくてはならない。

「それなら私もLJに店を構えることにしてよ。そうだな。家賃はいらないから、さみはこれから開く店で店員をしてくれないか?」

「はい?」

それは交換条件というものだろうか。思わず聞き返す。

「うん。いい案だ」

よしひと書いて、彼は立ち上がった。ユーフュニアの返事も聞かず。

「詳細はまた後日にしよう。今日はもう遅いから失礼するよ」

「はい?」

すでに彼の中では決定事項となってしまったようだ。

釈然としないまま、それでも家を出なくともいいといつ安心感に、

びつと疲れが押し寄せてくる。

「ラムレイさん」

店の出入口でもある扉の前で、馬車に乗り込む青年に声をかけると、振り返った紺色の瞳がユーフュニアを映した。

「ティーンで結構。では、また。ユーフュニア」

お礼を口にする時間さえ与えられず、さつさと馬車の扉を閉めた青年を呆気に取られて見送る。

悪い人ではないのかもしれない。だが、何なのだろう。彼は周囲が見えていないのだろうか。その行動と思考に合わせようとするとかなり疲れる。

石畳を去つていく馬車を見送りながら、夜空を見上げて息を吐き出した。

まさかこれがユーフュニアの運命を変える出合つことなるとは、その時は思いもよらなかつた。

絶対にお客なんて来ないわ 。

その骨董品店は、開店日から雨が降っていた。

大々的な開店を呼びかけたわけでもなく、ひつそりと開店したのだが、店に並ぶ商品を見てユーフェミアが呟いたのもあながち間違いではない。

もともと古着屋であつた店内を改装し、残つていた古着や家具などはすべてティーンが処分してくれたが、それでも広いというほど広さはなく、壁紙も張替え、しつとりと落ち着いた雰囲気になりました。いく様を見ていると、思つた以上に素敵なお店で、こんな場所で働くのも悪くないかも、という気分になつていた。

しかし昨日から次々と運び込まれてくる商品にユーフェミアは目を疑つた。

骨董品店と聞いて、店内の広さと雰囲気から小物類、もしくはちよつとした家具なのだろうと思つていたし、ティーンからも外国の珍しいものと聞いていたので期待もしていた。確かに家具類もあつた。素敵な照明もあつて、値段を聞き、即座に断念したものもあつたのだ。

だが、店の奥まつた一角に置かれた商品に、有り得ないと呟やかずにはいられなかつた。

普通に見たら有り得ないことはないのだ。ソファにアンティーク人形が並べられ、見ている分には随分と可愛らしい。

だが、ユーフェミアには分かつてしまつたのだ。それから祖父のナフムと同じ気配がする 。

「嘘でしょう……」

やはり彼の幽霊にまつわる噂は本当だつたのかと、胸に密かに不安が生じたのは言つまでもない。

お客様が来ない理由は、実はもう一つある。

それも現実的な理由である。

単純に高価すぎるのだ。値段を聞くまでもなく、デザイントイにも庶民の家にそぐわない。

このバルフォアの街の住民なら、約一年分の稼ぎを注ぎ込んでも買える代物ではないだろう。

つまり開店休業状態だ。しかも柔らかな雨が降り続けている。客足は遠のく一方だ。

果たして、この街の住民でこの店の骨董品を買える者はいるのだろうか。いるとしても、きっとトイーンの同類だろう。買う必要はないが、買っておいてもいいか、という理由にもならないような理由で買い物ができる人種などそういう欲しくはない。

コーヒーミニアは毎過ぎには早々と見切りをつけ、部屋から本来の仕事道具を持つてきた。

客なんてどうせ来ないのだ。店番も、仕事をしながらやつて悪いことはないだろう。

近年、印刷という方法で紙に大量の文字を「写す」ことができるようになつたが、それでも流麗な写字を好む者もいる。コーヒーミニアの筆跡は割と評判が良く、指名で注文を受けこともある。そういう時は大抵、期限が切られる為かなり忙しくなる。無理な注文は断るようにしていたが、せつかく気に入つて注文をしてくれのだ。できるだけ請け負うよう努力はしているが、最近は時代の波が確実に押し寄せてきているのを感じる。いつか写本は廃れていくのだろうが、それが遠い未来なのか近い未来なのか想像はつかない。ただ、必要とされる限りコーヒーミニアはこの仕事を続けるつもりだった。

写本を作るのは殆どが上流階級で、金銭に余裕のある者ばかりだ。

印刷の技術が発達したからと言つても、やはり本は高価なものなので、庶民が手にできるような物ではない。

本はいくつかの工程を経て作られるのだが、ユーフェニアは決められた枠内に文章を書き記していく写字職人だ。その後、好みによつて金箔などの装飾が施され、綴じられ、一冊の本ができ上がる。だから写本といえども何人も職人の手を経るだけあって、その値段は庶民には馴染みのない可愛げのない金額となつてしまつのだ。仕事道具を抱え階段を降りながら、羽根ペンの先が少し痛んでいたことを思い出し、先にそちらの手入れをしようと決める。

綺麗な筆跡を作るには、やはり仕事道具の手入れも怠るわけにはいかないのだ。

「ナイフはどこだつたかしら？」

確かにどこかで見た覚えがあつたのだが、どこに収納したのだったかしらと記憶を頼りに、いたるところの引き出しを開けていく。壁に新たに設置した引き出し付きの戸棚を探していると、背後でコトリと音がした。

もしかしてお客さんが来たのかしら、と振り返る。

ディーンから店番をする上で言われた注意事項は一つのみ。その場で売るな、だ。

それを聞いた時は思わず笑つてしまつた。値段が分からない物を売れるはずがない。どの商品にも値段は表示されていないのだ。ただ、素人目でも高いことが分かるだけ。

つまりユーフェニアが店員としてする仕事は、客の求める商品と客の名前を聞くこと。それのみだ。田を改めてディーンが交渉にあたることだった。

楽な仕事だ。退屈なことを除けば。だがユーフェニアには本来の仕事がある。住処を得るために店番をし、食いつないでいくために写字職人として仕事をする。一石二鳥とはこいつことを言つのだろづ。

時間の有効活用。

時は金なり。

世の中にはいい言葉があるものだ。

「いらっしゃいませ……」

音がした方に笑顔で振り返って、思わず首を傾げた。声が尻すぼみになつたのも仕方がないだろつ。なぜなら、そこには誰もいなかつたのだ。が。

削る予定のペンを置いていた机の上には、探していたはずのナイフが置いてあつた。

「……」

ゴーフェミアは数度目を瞬き、うふふと笑う。

「嫌だわ。出しておいて忘れるなんて」

独り言が多くなりつつあることは気にしない。肌が粟立つているのも気のせいだらう。

考え方を変えればとても便利ではないか。そうに違いない。椅子に座つてペン先を削りながら、それにしても、と昨夕のことを見い出し、静まつていた怒りが再燃する。

昨日、朝一番にディーンは現れたのだが、馬車から下りてきた彼が腕に抱えていたものを見て思わず一歩下がつてしまつたのは仕方がないだらう。

濃灰色のフロックコートに鮮やか過ぎるそれは、ディーンの腕に收まり良く座つていた。

金色の髪に美しく澄み切つた空色の瞳。薄紅色のドレスを身につけ、にこやかにほほ笑む彼女。

「彼女はイヴアンジエリンだ」

思わず釘づけになつてしまつた視線の先に気づいたのだろう。簡単に紹介された後、差し出された彼女を恐る恐る抱きかかえると、適度に重みがあり、まるで本当の子供を抱えているような気分にな

る。

しかも本来あるべき体温はなく、それでもかすかに温かいと感じるのは、馬車の中ですっとディーンに抱えられていたからだろうか。彼の体温が移つたと考えた方が、この先無難に過ごせるに違いない。

「彼女もその商品なの？」

腕の中のアンティーク人形を見下ろし、思わず小声になる。彼女に聞かれるとあまり良くない気がしたのは直感だ。

「なぜそう思う？」

意外そうにこちらを見下ろし、それから視線を彼女に向ける。その眼差しは優しくて、思わずディーンから視線を外した。

見てはならないものを見た気がした。

「わざわざあなたが抱えてきたから、気に入っているのかと思つて」二十代後半の青年が人形を気に入っているという考えは、本来なら恐ろしく奇妙で奇抜な話だ。しかし個人の趣味は様々だ。もしかしたらそういう趣味を持つついてもおかしくはないかも知れない。実際、彼の視線は少し違和感がある。

視線の持つて行き場に困り、仕方なく腕の中の人形を見下ろしていると、彼は小さく笑つた。

「やはり女性の方が人形は似合つね」

「いえ、私が聞いているのはそんなことじやなくて」

ユーフェミアの脇を通り抜け、店の中へと歩いて行く店主を追いかける。開店を明日に控えた店の中には当然客は一人もいない。

「イヴアンジエリンは特別だ。彼女は売り物ではないが、彼女が選んだ者なら私は喜んで送り出そう」

店内を眺めながら、商品を一つ一つ確認しつつ彼は言つ。

「……まるで花嫁の父親みたいな言い方ね」

ぽつりと呟くと、ディーンは面白そうに口の端を持ち上げた。

「的を射た言い方だ」

ユーフェミアがイヴアンジエリンを渡すと、奥のソファに他の人形たちと共に丁寧に座らす。確かに周囲の人形たちとは違う存在感

がある。これほど精巧な人形は滅多にお目にかかる代物ではないだろうし、ティーンが特別だと言うのも分かる気がする。

しかし先ほどのティーンの言い方に引っかかりを覚える。

彼女が選ぶ、とは一体どういう意味だろう。

本当に生きているのだろうか。

まさかね、と思いながらその日の夕方。その意味を知ることとなつた。

太陽も西に傾き、ほんのりと残照に輝く空はすでに夜に近い。明日は開店日だといつに、その空模様から雨が降りそつだと予測をつける。

ディーンはイヴァンジョンを置くと、夕方にもう一度様子を見に来るとだけ言い残し、一度帰ってしまった。開店の準備についても、別にすることはもうないので来る必要はないのでは、と思つたのだが。

夕闇の中、店内を見渡し、取りあえず戸締りだけはしっかりと確認する。高価なものばかりで、泥棒に入られたりしないだろうかと新たな仕事に対するユーフェミアの不安はそれが全てだ。弁償などするようなことになれば、一生働いても返せないだろう。

そろそろナフムが現れる頃だと思い、ディーンが来るまで夕食の準備でもしていようと、一階に上がる階段へと向かっている時だった。

『ちよつとあなた!』

可愛らしい少女の声が空気を揺らした。最初は空耳かと思い、一階を見渡したがもちろん人のいる気配はない。

首を傾げながら階段に一步踏み出した時、再びその声は耳に届いた。

『あなたよつ、ユーフェミア!』

高く澄んだ声音は可愛らしくあつたが、そこに含まれるのは怒氣だ。

錯覚ではない。

振り返り、息と唾を飲み込む。

考えられるのは毎晩、ディーンが持ってきたイヴァンジョンと、いうアンティーク人形だ。他の人形たちからも幽かな気配を感じたが、彼女の存在感は他の比ではない。

薄闇の中、ソファに座る人形たちを前にすると、かなり不気味だった。独特の雰囲気に気圧されそうになる。イヴァンジエリンは特にだが、他の人形たちの出来もかなり精巧なのだ。

しかしユーフェミアはイヴァンジエリンだけに視線を注ぐ。見た目は人形そのものだ。昼間、抱えた時の感触からもそれは疑いようがなかつた。

『な、なにを見てらつしやるの？』

再び声がして、ユーフェミアは肩から力を抜いた。

「話す時に口が動くかと思ったのよ」

想像してみて欲しい。陶器の口が切れ目もなく動いたらどれほど恐ろしいか。生憎、彼女の口は動いていなかつたが。

『……わたくしが怖くないの？』

先ほどまでの怒氣がなりを潜め、意外そうな声が届いた。その質問には腰に手を当てて胸を張つた。

「昔から時々不思議なことは体験してたし、今は亡くなつた祖父と暮らしているもの。少々のことでは驚かないわ」

一階を指差し答えると、イヴァンジエリンも同意した。

『あの気配は、あなたのおじいさまでしたの』

「血はつながつてないけどね」

ナフムは昔、ユーフェミアの母の実家で世話になつていていたと聞いている。ただその後、母の実家は没落し、当時、婚約をしていた母のお腹にはすでにユーフェミアがいたと聞いたことがある。婚約は破棄され、途方に暮れる母をナフムは引き取り、お嬢様であつた母に庶民の生活を教えていたが、慣れない生活がたたり、結局ユーフェミアが十歳のころ他界してしまつた。ナフムはそれからもユーフェミアが一人でも暮らしていけるよう様々なことを教えてくれたが、死んでからも側にいてくれるのは、きっと心配しているからだろう。一瞬お互いの間に沈んだ空気が漂つ。しかしそれを壊したのは、イヴァンジエリンだつた。

『それは立ち入つたことを申しましたわ……つて、違いましたわ！

話をそらさないでください。』

「何かしら？」

言われてみれば、イヴァンジエリンがなぜ怒っているのかを聞く為にここに来たのだ。

コーフュニアはイヴァンジエリンをそつと持ち上げた。

『な、何をなさるのー？』

「あなた、自分で動けないんでしあう？ 上から見下されたのは嫌でしょから、ちょっとこっちに来てもらわわ」

有無を言わざず自分の所定場所になる机にイヴァンジエリンを座らすと、コーフュニアも側にあつた椅子に腰かけた。

その間も、彼女は何か喚いていたが取りあえず無視をする。

「さあ、どうぞ」

やつと落ち着いて正面を向くと、イヴァンジエリンの声は一際高くなつた。

『もつと丁寧に扱つて下さらないつ？ わたくし、纖細ですのよつ！』

「はいはい。で？』

所詮、表情のない人形だ。いや、あるにはあるのだが緩やかに口角が上がり、柔らかく笑んでいるのだ。声だけが怒つても、その声は可愛らしげ少女のもので、コーフュニアにとつて害はない。見ている分には本当に可愛らしいのだ、彼女は。

それにこうして話し相手をしているのも彼女に興味があるからだ。極めて冷静に促すと、一瞬彼女の高まつた怒りを感じたが、すぐにイヴァンジエリンは声高にまくし立て始めた。

『あなた、ディーン様に馴れ馴れしそりますわ。もつと離れて話しながら。それに聞きましたよ。あなたは雇われている身でしょう？ もつと立場をわきまえなさい！ それに名前も呼び捨てなんて失礼ですわ！』

意外にも彼女のような存在から、まともな言葉が返つてくるとは思わなかつた。だからつい感心してしまつたのだが、彼女が誤解し

て いる幾つかの点を先に訂正させてもらひ。

「雇われて いるのと は少しう うわね。立場云々はともかくとして、助けて もらつたこと に 関しては頭が上がらないわ。それと、呼び捨ての件 に ついては彼が それでいいと言つたのだけど?」

『ディーン様が? ……そ、そつ』

肯定の返事 が返つて きたが、すぐに、どうして、と 小さな 呟きが聞こえる。

戸惑いと共に少しだけ彼女の怒りが弱まつたような気がして、ユーフェミアはにんまりと笑つた。

彼女の台詞の裏を返せば、近づくなと いうことに違ひない。あまりにも直接的過ぎるイヴァンジエリンのディーンに 対する好意を微笑ましく思つと同時に、ディーンの彼女を見る眼差しを思い出す。もしかして、相思相愛だらうか。

だがユーフェミアの中に浮かぶ どちらかと いうと 正常な人間としての嫌悪に近い 感情は、すぐにそれを否定する。

確かにディーンは変わつて いるかも しれないが、娘を嫁に出す心境だと 言つて いた。出来ることなら、その言葉を信じたい。

とは言つものの、目の前で沈みがちな人形を見て、ついからかいたくなつてしまつたのは、彼女があまりにも愛らしかつたからだ。

「あなた、彼の事が好きなのね?」

『つ!』

言葉になら ない驚きが空氣を伝わる。

『な、なんて無礼なの! いきなり人の心に踏み込むなんて! 淑女としてあるまじき言動よ!』

果たして、人、な のかどうな のかはさておき、少なくとも彼女が今までど のよ うな所にいたのかだけは判明した。

彼女ほどの人形ならば、常に上流階級の家に置かれていただろ う。紳士淑女の生活を目の当たりにして いたのなら、今の台詞も納得だ。暗くなつた室内に、ユーフェミアは立ち上がる。

『な、なんですか?』

びくつく彼女を見下ろし、くすりと笑つてみせた。

途端、彼女の恐怖が伝わってきて、ユーフェミアは耐え切れなくなつて吹き出した。喋る人形に怖がられようとは思わなかつた。

「明かりを点けようと思つただけよ」

夕方に入ると言つたディーンは未だ来ない。予定が変わつたのかもしれないし、そうでないのなら来た時に室内に明かりが灯つていれば、遠慮なく入つて来ることができるだろつ。そう思つて、入口の扉だけは鍵をかけていないのだ。

ランプに火を灯し、机の側に持つてみると、ふわりと明るくなつた室内を見渡してからイヴァンジエリンを見つめる。

まさに陶器のような肌に空色をした瞳。金の髪はゆるく巻かれている。薄紅色のドレスは上質の布地でつくれられ、ふんだんにレースが使つてある。顔立ちも美しく、優しい眼差しをしている。女の子なら一目で彼女の事を気に入るだろつ。事実、ユーフェミアも子供だつたなら、きっと欲しくてたまらない。

しかしディーンは彼女を売りものではないと言つた。もしかして彼もイヴァンジエリンと話すことが出来るのだろつか。噂で言われているように、彼が変人と呼ばれるようになつた経緯を信じるなら、有り得ないことではなのかもしれない。

そうすると、一体どうこいつもりで彼女をここに持つてきたのだろうか。

ユーフェミアの特殊な感覚は、気づいた時にはすでにあつたものだ。しかしそれは人より鋭い程度で、頻繁に不思議な出来事に出会うわけでもなかつた。だから死んだナフムが当初気づいていないと思つたのも無理はない。

だがこの五年。幽霊となつたナフムと暮らすよつになつてから、見える頻度が上がつたよつな気がする。特に夜は絶対に出歩けない。それは防犯面だけのことを言つてゐるのではない。今でも時々思い出しては、身の毛がよだつよつな経験をしたことがあるからだ。

『ちょっと、ユーフェミア。ディーン様がいらつしゃつたよつよ。

出迎えなさい』

イヴアンジエリンから『ディーンのことをせひ少し探したかったのだが、時間切れのようだ。表に馬車の止まつた音がした。

それにしても。

なぜ彼女に命令されなければならないのだろう。

釈然としないまま、ランプをもつて扉へと向かった。

『な、なななぜ……、ビックリつたりですの！？ ディーン様つ！』

ディーンが彼女と話せるのかどうかはすぐに知れた。

劈くよつな悲鳴が響き渡る。

机の上にはシンバルを持つた猿のぬいぐるみ。気配はイヴアンジエリンと同等のもの。

つまり。

『よう！ あんたがユーフォニアか？』

力チャラとシンバルを鳴らし、楽しげな声を上げる。所詮おもちゃのシンバルだから大きな音は鳴らないが。

「彼はリックだ」

馬車から下りたディーンが手に持つていたものに嫌な予感はしていたが、当たつて欲しくない予感ほど当たるもので……。

紹介をしてくれるのは有り難かったが、ちらりとイヴアンジエリンを見ると、どうやらかなりの衝撃を受けているらしい。言葉もなく震えているように思えるのは気のせいだろうか。

「ええと……ディーン。ちよつと、いいかしら？」

机から離れ、彼らに話が聞こえない場所までディーンを引っ張つていく。その僅かな間に、彼らの会話から彼らの仲がビックリのものかを察するには十分だった。

『やつと静かに過ごせると思つていきましたのに！』

『つるせえな。こつちだつて清々してたんだぜ？ やつと小姑がい

なくなつたと思つてな

『なんですつて！？ 誰が小姑なのですつ？』

『ああ、ホントにうるせえ』

辟易したリックの聲音とイヴァンジエリンの怒りに、知らず眉間に皺が寄る。

彼らから十分離れて、素直に後ろをついてきたディーンを振り返り、思わず睨んでしまつたのも仕方がないだろつ。

イヴァンジエリンではないが、コーヒーミアも先ほど彼女がした問いと同じことを店主に投げかける。

「一体、どうこうつもり？」

「何がかな？」

涼しげなその顔からコーヒーミアの質問の意味を知つていて、あえて誤魔化しているのは目に見えている。

先ほどのイヴァンジエリンの言葉から、すでに彼にも人形たちの声が聞こえているのは分かつていいのだ。しかも勝手にシンバルを鳴らす猿を見て説明もなしとは、考えられることは一つだ。

「あなたにも彼女たちの声が聞こえているんでしょう？」

あえて、あなたにも、の部分を強調してみた。

だが、こちらを見た紺色の瞳は興味深げに見返すだけだつた。

「さてね。そう言つときみには聞こえるというのかい？」

質問に質問で返すディーンに、大人げなくもカツとする。

しらを切るつもりなら、コーヒーミアも出来るだけ隠そうと思つていたこの感覚のことを話すつもりはなかつた。言いかけてしまつたが、そういうつもりならこちらだつてしらばつくれてやる。

「……さあ？ どうかしら？」

「先ほど、あなたにも と聞こえたのは私の聞き間違いかな？」
しつかり聞いているあたりに憎さを覚える。

「そうね。きっと聞き間違いで、私が聞いたのもきっと近所の子供の声だつたのでしょ？」

先程からのらりくらりとかわされ、イライラする。

両腕を組んで睨んでやると、ディーンは肩をすくめて苦笑した。

「機嫌を損ねてしまつたかな。それに、きみの感覚が鋭いことはもう知つてるよ。もしかするとイヴァンジエリンやリックの声も聞こえるかもと思つていたんだが……どうやら当たりだつたようだね」知つていて、あえて自ら話させようという魂胆に、コーフュニアは身体中の血が煮え滾るのが分かつた。親しくもない他人に、自分の弱点となるかもしれないことを告白しろと言つのか！

「あなた、一体どういうつもりなのよ」

「どういつもりもこいつもりもないな。ただ骨董品店を開いただけだ。それに きみにも見えないものはあるようだし」「

意味深な言葉を口にすると、コーフュニアの背後に視線を送る。その視線の意味に気づき、ぞわりと冷たい何かが背筋を上つていつた。

背後を振り向く勇気はなかつた。思わず一步前に出かけ、田の前に忌々しい男がいたことを思い出し、何とか踏み止まる。

「おや、残念」

何が残念なものかと、勇氣を出して一步下がる。田の前の男より、背後の何かの方がまだましだ。

今更ながら、彼の心証はコーフュニアの中で最低なものになつつあつた。

「背後の彼も含めてだが、ここにいるものたちは決して悪意はない。きみを傷つけるようなことはしないだろ」

どうやらディーンはコーフュニアを上回る感覚を持つていて、ひみつだ。

「だが悪意がないというのは納得いかない。いや悪意はないかもしないが、敵意はあるように感じられる。特にあの薄紅色のドレスを着た人形から。

「雨が降ってきたみたいだね。リックも連れてきたことだし、きみの機嫌がこれ以上悪くならないうちに私は退散することしよう」耳を澄ますとかすかな雨音が聞こえる。

ディーンはイヴァンジョンやリックにあまり喧嘩をしないよう

注意だけすると、入口に向かつた。

ユーフニアは腕を組んだまま、それをだだ田で追うことしかしなかつた。

大体、謎ばかりなのよ。

削り終わったペン先に満足し、刃に付着した汚れを拭き取つてナイフを折りたたむと、今度こそ何処に片付けたのかをきちんと記憶し、出た塵を集めて屑入に捨てた。

昨日のことを思い出すと仕事をする気も失せてしまい、仕方なく椅子の背もたれに寄りかかった。

雨足がひどくなつたのか、窓から見える通りは灰色に煙つてゐる。もともと通りの石畳も灰色で、街全体が薄闇に閉ざされたようだつた。

イヴァンジエリンやリックは、ナフムと同様に日が暮れてからではないと話せないことは昨夜のうちに確認済だ。ただ、ユーフェニアには見えない「彼」についてはナイフの一件から察するに、日の出日の入りは関係ないようだ。確かに、ナイフを投げて寄こさないところを見ると、悪意があるようには思えないが。

それにしても、と机に頬杖をつく。

「どうして私を知つっていたのかしら」

取り立て屋たちに追われて路地裏で助けてもらつた時、じつと顔を見つめて尋ねてきたのだ。そこまで特徴的な顔をしているとは思えないが、あえて言うなら母譲りの緑の瞳が珍しいのだろうか。バルフォアの街でも、きっと数えるほどしかいないだろう。

頬に手を当て、首を傾げる。しかし緑の瞳であるからと言つてコーエミアだと限定してしまつには安直過ぎる気がする。やはり顔に特徴でもあるのだろうか。

ふと、商品の中に鏡台があつたことを思い出し、椅子から立ち上がりつた。

異国情緒たっぷりのそれは、厚みのある板の表面を花や鳥の形に

彫った中に、真珠のような光沢のある貝片を彫った形に合わせて埋め込まれていた。表面は平らに磨いて特殊な加工が施してあるらしい。木自体は黒く艶があり、白い貝と黒い木の相反する色合いが何とも美しく、当然、値段もそれなりのものだろ。それが蓋になっており裏面に鏡が貼り付けてあって、上に開いて使用するようになつてている。

木の表面を爪で傷つけなつゝ氣をつけながら蓋を持ち上げ、ユーフェミアは鏡を覗き込んだ。

「つ！」

思わず叫びそうになり、なんとか息を飲み込む。視線を下げ、とにかく鏡を視界に入れないようにした。

今、見てはならないものを見なかつただろつか。

背後に、何かがいた。あれがティーンの言つ「彼」だろつか。悪意はないと言つたが、あれでは怖すぎる。見えなくて良かつたというか見たたくない。

背後にいたそれはまだ若い青年で、金色の髪は零が滴るほど濡れて顔の上半分は隠れ、水を吸つた服もぐしょぐしょだつた。しかもなぜか泥まみれで、まるで馬車に水を跳ねられたような有様だ。ゆつくりと視線を逸らせたまま鏡を閉じ、気づかないフリをする。見えなかつた。見なかつた。見ていない。

偶然、鏡を通したから見えてしまつただけかもしれないし、骨董品の鏡には何か不思議なことが起こつてもおかしくなさそうだ。

ゆつくりと息を吸い、勇気をふりしぼつて振り返る。

「ほら、誰もいない つて、あなた誰！？」

髪から水を滴らせ、床に水たまりを作りつづあるその青年を見て、思わずあとずさる。

だが、すぐに分かる。彼は生きている人間だ。生ものだ。間違いない。

それが分かつた途端、強気になれた。そしてあまりのひどい格好に思わず顔を顰める。泥まみれで店内に入つてくるなど非常識だ。

「あの」

「ちょっと、あなた！ そんな恰好でお店に入つてこないで！」

用件を聞くよりも、まず先に彼の身を何とかしなければならない。たとえ客だらうと商品を汚されでは堪らない。すでに彼が立つてゐる場所は泥水まみれで、その後片付けも早急にしなければならない。

内心舌打ちしながら扉を開ける。

雨はやはりひどくなつてゐる。まさかとは思ひもの、どう考へてもこの中を歩いて来たとしか思えない。

青年を振り返ると、少し慌てたように店の奥にあとずさりしている。

「あの、僕は」

「追い出したりしないわよ。もつゝ、あなたが歩き回ると床が汚れるじゃない。取りあえず、こっちに来て上着を脱いで！」

店の奥はイヴアンジェリンや他の人形たちがいる。そんなところに泥水が撥ねようものなら……考えただけで頭が痛い。

開店日早々、なんてついてない。

黙つて見つめていると、青年は渋々入口まで戻つて来た。上質な布地であつただろうスーツは水気を含んでヨレヨレになり、生地には小さな砂が入りこんでいる。

勿体ない。

内心浮かんだ言葉を口にしないよつ唇を引き結び、戸惑いながらもたもたと上着を脱ぐ青年を手伝う。その下のベストにまで雨が滲んでいるのを見て、取りあえずその場で待てと告げる。

一階へと駆け上がり、髪を拭く為の布と必要と思えるものを抱えて階段を降りると、階段下に移動してきた青年がいて、ゴーフュニアは目を吊り上げた。

「あの」

「だから、あの場所から動かないで」

机に荷物を置き、布を頭からかけてやる。

「……それで、あなたはどちら様かしら？」

自分のことぐらい自分でやつてもらい、持つて下りてきた雑巾と

バケツで床にできた水たまりを拭いていく。

「僕はロジヤーといいます。あの ディーン様の秘書をしています」

「？」

布の向こうからくぐもった声が聞こえる。

「そう。それで、ロジヤーさんは何をしていらっしゃったのかしら？」

雇い主の名に胸に黒いものが込み上げ、ついロジヤーと名乗った青年にあたつてしまい、手を止めて彼を見上げた。

「ごめんなさい。こんな言い方失礼だったわね」

「いえ。ディーン様はよく誤解される方ですから」

「どうやら向こうのことによくあるらしい。」

その落ち着いた聲音に、このような一方的な感情に気を悪くしなかつた青年が氣の毒になつてしまつた。つまり慣れているのだ。

そんなロジヤーに同情すると同時に好感も覚える。昨日から、まともな会話の出来ない人や人形、ぬいぐるみとしか話していなかつた為、普通の会話が出来るなら、どれほどずぶ濡れだろうが歓迎だつた。

「それで、用件は何かしら？」

すっかり気分を良くし、床を綺麗に拭き終わつてバケツを持つて立ち上がると、ロジヤーはそうでしたと言つて、髪を拭つていた布から顔を出した。

その容貌に思わず目を見張る。

先ほどまで滴が垂れるほど濡れていた為、拭かれた髪はぼさぼさではあつたが、それが彼の印象を悪くすることはなかつた。むしろ無防備で庇護欲を誘うには十分な容色だつた。ロジヤーの穏やかな性格を表しているのか、女性的ともいえる美しさはその澄みきつた瞳にも現れている。あまり認めたくはないが、ディーンもどちらかと言えば美形の部類に入るのだろう。だが彼の場合どこから見ても男性的で庇護欲など微塵も感じない。むしろ押ししが強すぎて人の意見など聞く耳を持たない態度には反発を覚えるだけだ。

開いた口が塞がらない体験を、こんなに短い期間に一度もすると
は……。

ちなみに一度田は路地裏で助けてくれた人物がバルフォアの有名
人の名を告げた時だ。

「ユーフェミアさん？」

「あ、ええと、それで用件は？」

きめが細かい肌をまじまじと見て、若い……、と内心羨ましく思
いながら問う。

「実は……」

ロジャーが口を開きかけたその時、濡れた上着の水気を叩くため
に開けていた扉から、黒い大きな影が入ってきて視界の隅をかすめ
た。思わず悲鳴を上げると、金髪の青年を腕に抱え込んでいた。本
来なら逆の行動を取るべきなのだろうが、なぜか頼りなげなロジャ
ーの风情に、母性本能が疼いたのだろう。

持っていたバケツがひっくり返る音がする。それと同時にロジャー
ーの慌てた声も。

だが……。

金色の濡れた頭を抱えていると、聞き覚えのある声が耳に届く。
「いつまで絆つても迎えに来ないから何かあつたのかと心配してい
たんだが……むしろ私は邪魔者だつたかな？」

こちらもずぶ濡れ状態で扉から悠然と入ってきたティーンを見て、
安堵すると同時に彼の足もとに新たにできた水たまりに目を見張つ
た。

「今、床を拭いたばかりなのに！」
バケツをひっくり返した責任も、この際押しつけてやる！

事情を聞くと、馬車が故障したらしい。

御者が何とか修理を試みているが、雨も本格的になつており作業
は思う様に進まないとのことだった。

昔、祖父が使っていた傘があつたので出してくると、ロジヤーは濡れた上着を着て雨の中、馬車に戻つて行つてしまつた。

あの時、ひつくり返したバケツの水は見事ロジヤーの足にかかり、必死に謝るコーフュニアに大げさなほど手を振つて気にしないで下さいと言つてくれた。本当にいい人なのだと思つ。

靴から不思議な音を立てながら店から出ていこうとしていたロジヤーは、馬車が直つたら先に屋敷に戻つて仕事を片付けるようティーンに言い渡されていた。

「あなたはどうするつもりなのよ？」

当然、聞いてもおかしくない質問だらう。馬車を返してどうするつもりなのか。

嫌な予感に、自然と眉間に皺が寄る。

「本当なら客先に出向く予定があつたが……」この格好では無理だね。仕方ないから予定を変更するしかないな

聞きながら、先ほどのロジヤーと同様に扉の側でコートを脱がせ、水気を飛ばす。干すにしても、さすがに滴が垂れるまま室内に持ち込むと後が大変だ。そう言えば、まだ床も拭かないといけない。

余計な仕事が増えたことに溜息をつきつつ、ティーンの返答に胡乱な視線を投げつける。

「……予定変更って？」

「まさか追い返すつもりじゃないよね？」

そのまさかです、とは言えないまま無言でいると、濡れた髪をかき上げながらこちらに意味ありげな視線を向けてくる。

「先ほど、ロジヤーにはいたく積極的だと思ったのだけど? 何をどう見てそういう考え方になるのか理解不能だ。何か勘違いをしてるでしょう」

「私は積極的な女性は嫌いではないよ」

一步近づくティーンに、素知らぬ顔をして一步下がる。

「生憎、私は興味がないの」

「それは私に対するの言葉かな? それとも恋愛に対する?」

その質問に視線を上げる。

これ以上、無駄な会話をする気はない。ふと胸に過った想いとともに、せつせつと打ち切るためにもはつきりと告げる。

「どうりも」

鬱陶しいとばかりに、ある程度水気を切っていたコートをディーンに渡し、机の上にロジャーの為に持つてきていた布を持って戻る。「そうはつきり言わると傷つくな。これでも女性には評判がいい方なんだけどね」

少なくともバルフォアの街では女性からも噂通りの評判しか聞いたことがない。

布を渡し、代わりに再び濡れたコートを受け取つて、階段脇にある扉へと向かう。そこは地下室への扉で、干し場は地下にあるのだ。「だったら私なんかを相手にするより、他の女性でも口説きなさいよ。その方が余程建設的ね」

「なるほど。きみは建設的ではなく、現実的なだけなのか」

その言葉に含まれた棘に気づき、思わず足を止めた。頭の中で反芻したディーンの言葉に、ゆっくりと振り返る。

「……何が言いたいのかしら？」

「コートから落ちる滴が床に新たな水たまりを作りつつあったが、彼の口ぶりはどこか引っかかる。現実的で何が悪いとこいつのか。

ディーンは髪から滴が落ちるに任せ、振り返ったコーフュミアに得意気な笑みを浮かべた。

「こう言つては何だけど、きみと同年代の女性はすでに家庭を持つている者がほとんどだろう？ そう言つた女性はある意味建設的と言えるね。きちんと自分の将来を見据えて、身の丈に合つた相手を選んでいるからね」

「それが何？」

コーフュミアも家庭を持つことを全く考えなかつたわけではない。

それこそ年頃には、真剣に考え、悩んだこともあつたのだ。

きつとこの後に続くのは、今の生き方を否定する言葉だらうと予

測はついた。だがあえて、ディーンとの会話を打ち切らなかつたのは、どうして現実的だといけないのか、彼の見解を参考程度に聞いてみようと思ったからだ。

「きみを現実的だと言つたのは、今を一人で生きていくためのことしか考えていない。恋愛やその他の楽しみも知らないともしないで、常に目の前の利益を追うことしか見ていないだらう?」

「それの何が悪いっていつの?」

女一人で生きていくには、まだまだ余裕などない。女だからだと軽んじる者の方が遙かに多いのだ。そして泣く目に会うのもいつも女ばかり。

「悪いとは言つていないよ。ただ、人生もっと楽しんだ方がいいと言つているんだよ」

その言葉で、ようやく彼が本来言いたかったことを理解し、思わずフツと鼻で笑つてしまつた。

「要するに」

向けた眼差しが侮蔑を含んだものになつてしまつたのは仕方ないだろ?。

「あなたと恋愛じつ」をするべきだと言いたいのかしり?」

「まあ、そうなるかな」

今までの言葉の応酬も、結果的にはこの男を喜ばせただけなのか。ユーフェミアが足を止めてしまつた時点で、どうして得意気に微笑んだのかやつと分かつた。

「却下よ。あなたも早く髪拭いた方がいいわ」

言い置くと、今度こそくるりと背を向け、足を止めるとなく地下への扉を真っ直ぐに目指した。

通りの向かいにあるコーフェミアの幼なじみの家は、どういうわけか仕立屋だ。

夜逃げしたバツク家に一階を貸す時も、商売敵である古着屋だと言つたにも関わらず、反対するどころかいい競争相手だと快諾してくれたほど彼ら一家は気前がいい。

「なんだか面白いことになつてゐるじゃない？」

ケイトはコーフェミアが渡したディーンの服を採寸しながら、ニヤニヤ笑つてゐる。

「一トを地下に干して戻つてきたあと気づいたのだが、男物の服などコーフェミアは当然持つていない。ナフムの物もほとんど処分してしまつていたのだが、幸いにも数着ある。が、どう見てもサイズ的に違ひすぎる。だからと言つて濡れたままの服を着せておくわけにはいかないだろ？」

入れたくはなかつたが仕方なく、コーフェミアの生活空間である二階へと案内し、暖炉に火を入れ取りあえず毛布を渡す。

「服はどうするかと問うと、仕立屋で標準の体形に合わせて用意している簡易的な注文品で手直しをあまり必要としない。服を買つてきてくれと、それは全くもつて不承不承といった感じで言ってくれたのだ。贅沢を言うなと言いたかつたが、やはり彼は特注品にしか手を通さない人種なのかと、どこかで納得もしていた。簡易的な品物とはいえ手足の長さに丈を合わせる必要はある。コーフェミアが採寸出来れば良かつたのだが、生憎専門外だ。仕方なく着ていた服を持っていくしかなく、脱がして現在に至る……。今、彼は暖炉の前で「彼」とチエスをしているはずだ。

商品の中にチエス盤があり、驚いたことに「彼」は一階にも移動可能らしく、ディーンは「彼」を相手にまつたりと過ごしていふといふわけだ。

まつたくじちらは雨の中、どれほど被害を被つて居のやう。開店早々、毎過ぎには店を閉め、ユーフュニアはケイトを相手に愚痴つていた。

採寸が済んだケイトは針子たちに指示を出すために一度離れたが、すぐに戻ってきた。

それほど手間はかからないようなので、そのまま待たせてもらつことにした。

「面白いことなんてないわよ。なんだか最近ついてないなあ……」待つて居る間、ケイトの娘で五ヶ月になるリリーを抱いてあやす。仕立屋の跡取り娘だつたケイトは、十歳も年上の旦那さんが見習いとしてケイトの家に修業に来ていた頃から、見ているこぢらが引いてしまうほど熱烈に追いかけまわし、落とした旦那さんをどのよくな方法でか婿養子に入れることに成功したのだ。現在一人娘にも恵まれて、これでもかと言つほど幸せを全身から醸し出している。

一方、ユーフュニアは最近疲れているのか、時々その輝きが目に痛い。だが、澄んだ瞳で見上げてくる赤ん坊は別だ。見てるだけで癒され、ちょっと高めの体温がまた心地いい。何を思ったのか、ほにやりと笑う顔には思わずつられてこぢらも笑顔になる。

「やだつ、かわいすぎるー」

「そうでしょ、そうでしょ。かわいいでしょ？ だから早くユーフュアも結婚しなつて」

幼なじみの親馬鹿ぶりには目を瞑り、後半部分に顔を上げる。

「いやよ。結婚はしない

昔から言い続けている言葉を口にすると、困ったよつてケイトはため息を吐く。

「まだそんな」と言つてゐる。それとも噂通り、このままティーン・ラムレイの愛人になつちゃうの？」

幼なじみの爆弾発言に、思わず目を剥いた。

「は？ 愛人？ 何それつ！？」

寝耳に水とはまさにこのことを言つのだろう。一体何がどうなつ

てそんな話が出てきたのか。

吃驚してケイトをまじまじと見る。

「やだ、知らなかつたの？ うちに来るお密さんもかなり噂してゐるんだけだなあ。まあ……私はユーファから事情を聞いてたから分かつてゐつもりだけど……。だつて彼、最近よく来てたじやない、開店準備で。あの人はそれなりに地位もある人でしょ？ それにあの容姿！ 女なら誰でもうつとりつてところじやない？」

染まつた頬を隠すように手を当て、思い描いているのが視線が空中で止まっている。一児の母だというのにその顔はまるで夢見る少女だ。奥にいる旦那さんの視線が痛い。

「どこが！？」

思わず全力で否定すると、冷めた瞳で見返された。

「ユーファってば旦が悪い？ 顔はいいと思うわよ

「……まあ、悪いとは思わないけど」

ケイトの反論に押されるように渋々認めると、彼女はにんまりと笑つた。一方、旦那さんはあきれたように首を横に振つて、そんな顔で見ないで欲しい。

「ほら。そう言つことね。年頃 は過ぎてるけど、いい歳の娘のところに訪ねてくる地位も見た目もいい青年。出資した自分の店を愛人に任すつてよくある話じやない？ 噂つてすぐに伝まるものよ」どこか納得できないまま、やはり納得できない肩書に首を傾げる。

「でも、なんで愛人？」

不思議に思つて呟く。

ディーンは確か独身だつたはず。愛人とは既婚者に使われる言葉ではなかつただろうか。

「さあ、その方が設定面白いから？」

「深く考えていない様子でケイトは愛娘の頬をつづいている。なにが設定上よ、とあきれていると、チラリとこちらを見上げてきたケイトが身を乗り出してニヤリと笑つた。その瞳は楽しげに輝いている。

「で、本当のところどうなのよ?」

噂の真相を確かめていることほぐれにわかった。

「馬鹿言わないで」

否定の言葉を口にすると、ケイトは頭を軽く横にふりながら、「よねえ……」

と、どこか諦めたように同意した。それを見て、コーフェニアはリリーに話しかけた。

「困ったお母さんだねえ」

「困つてるのはコーファでしょ? 愛人なんて噂が立つたら本当に嫁にいけないわよ」

心配してくれているのは有り難いが、それに関しても別段気にしない。嫁に行く気などせらうらないのだ。といつよ、むしろこの噂は利用できる。

「いかないから別に構わないわ。それに放つておけばそのうち消えるわよ」

噂なんて何日で消えるのだつたかしらと呟く。

もうひ、と怒り気味に頬を膨らますケイトに、むすがりはじめたリリーを慌てて渡す。

そうこつしているうちに、針子さんたちの腕の良さなのか、一刻も経たないうちに服は仕立て上がっていた。

出来上がった服一式を、少しの間だからと皺になるのも構わずに、濡れないように別の布で包んでもらい、土砂降りの雨の中を通りを突つ切り、我が家に駆け込む。

肩が濡れて服の色は変わってしまったが、取りあえず胸に抱えていた包みは無事のようだ。

あとは皺にならないうちに早くティーンに渡して、着替えてもらわなければ落ち着かない。

居間に入ると、毛布にくるまつたティーンは一人楽しげにチェス

を打つていた。

それは不気味な光景に思えたが、「彼」がいると知つていればそれほどおかしなものには見えない。やはり、ディーンが変人の異名を持つているのも、その感覚のせいなのか。この光景など特に事情を知らない者が見たら、明らかに気味の悪い人に見えてしまう。それはヨーフェミアにも言えることで、この目に関しては細心の注意を払うようにしていた。

「着替えはここに置いておくわよ」

包みから取り出して、ソファの上に皺にならないよう置いていると、ふと近くに気配を感じて振り仰ぐ。

「なに?」

毛布にくるまつたディーンが側に立っていて、その視線はヨーフェミアの頭に向かっている。

「座つて」

「え?」

毛布から手を出してソファを指差すが、彼の意図が何なのか分からず怪訝な顔をすると、有無を言わさず腕を取られ、座らされる。「ちょっと、何なのよ?」

強引な扱いに文句を言おうとしたが、すぐに背後に回った彼が、結い上げていた髪を解きはじめてギョッとする。

「何するの!」

「悪かった。きみをこの雨の中に外出させるなんて配慮に欠けていた」

ゆるゆると解かれていく髪は濡れているため、ともすると指に引っかかる可能性もあるはずなのに、その手つきはさぞこまでも優しく丁寧だった。

髪から伝う滴が頬を流れれる。

予め用意していたのか、布で包むように水気を取るディーンになされるがまま、無言で床を見つめる。

背中が強張るほど神経が髪に向かっている。

別に謝つて欲しいわけではない。彼が横柄な人間であることは知つてゐる。むしろそのままそこにいて、普通のことを口にしないでほしい。でないと自分がとても酷い人間に思える。家のことにしても助けてもらひながら、意識的に線を引いて出来るだけ関わり合いにならないようにしているのに……。

いたたまれなくなつて目を閉じる。

そしてゆつくりと息を吐くと、目を開けた。

「もういいわ。あとは自分でするから、あなたも着替えて」立ち上がろうとしたが、しかしそれは叶わなかつた。軽く肩を抑えられ押し戻される。

「前から思つていただけど、きみの髪は蜂蜜色だね。母親も同じ髪色だつた？」

それは不意打ちだつた。

びくりと身体が震える。肩に置かれたままの手は、きつとそれに気づいたに違いない。

母のクリスティアナは見事な金色のロジヤーと同じ色の髪だつた。少し色の抜けたとも言えるようなコーフュニアの髪色とは明らかに違つ。それはつまり。

『誰じや、おまえさんは?』

突如思考を遮る声に、ハッと顔を上げた。

今日は一日中雨が降つていて、あまりにも暗くて日没の時刻だと気づかなかつた。

ナフムがもの珍しそうにこちらを見つめている。そして、肩に乗つたディーンの手の存在に気づいたのか、つかつかとやつてくるとパシリとその手を叩くふりをした。

『気安くよそさまの娘に手を触れるんじゃないわい! まったく、今時の若いもんは……』

ディーンにもナフムが覗えているらしく、肩にかかつてゐたかすかな重みが消えた。その隙を見逃さず、ソファから立ち上がる。

『おじいちゃん。彼も見える人だから、適当に相手してあげて』

私は夕飯の支度をしてくるわ」

背後にいるディーンを振り返らず、コーエンニアは逃げるよつこ居間を後にした。二人の間に流れる氣まずい雰囲気など氣づく余裕もなかつた。

居間から出た扉の前で、コーエンニアは身を竦めるよつて腕を抱えた。そして下ろした髪を手に取つて眺める。

もしかして彼は知つているのだろうか。コーエンニアが確信を持つないまま恐れてい、口に出すこともできない秘密を。

どうして知つているの。

夕飯を作るのは言つたものの、ここ数日シチューを温め直しては食べるという生活を送っていたので、実際のところ準備などない。しかし薄暗くなりつつある台所で、じつとまな板を眺めながら考えていた。

落ち着いて考えれば別におかしなことを聞かれたわけではない。それに蜂蜜色の髪などどこにでもある色だ。いや、蜂蜜色という綺麗な表現はおこがましい。単なる金髪でも色が抜けたような中途半端な髪色なのだから。

カタリと音がした。

ハツとして振り返ると、ティーンが台所の入口に立っていた。着替えは済んだようで、さすがにいつもの正装とまではいかなかつたが、それなりに見られる姿になっていた。

「私もあるのかな？」

気がつけば火にかけていた鍋の中味はふつふつと煮立つている。部屋の中はすでにシチューの香りが充満していた。

「……あなたの口に呑うものなど、ここにはないわ」

不意に、先程肩に置かれた手の感触を思い出し、顔をそらす。決して力を込めて押さえられたわけではなかつたが、逆らえない何かがあの場にはあつた。それがひどく恐怖を煽る。

さつさと帰つてもらつた方がいい。それなくとも気分が悪い。あのことを考え出すと心の中はいつも燐り、暗澹となる。

だがティーンは遠慮もなく台所に入つてくると、鍋の中を見下ろして首を傾げた。

「今日は開店日だというのに、お祝いはしないのかい？」

言われ、口を閉ざす。

考えてもみなかつた。もしかして、その為に彼は留まつていたのだろうか。確かに馬車の故障は急なことだつたかもしれないが、どちらにしても来る予定だつたと？

途端、いつも通りの食卓が恥ずかしくなる。いい歳をして、気が回らないにも程がある。

だが、口から出る言葉はどこまでも可愛げがなく。

「だ、だつて、あの店はあなたのお店よ。私は別に関係ないし……」「それを言われると身も蓋もないが、少なくともきみも開店を樂しみにしていたと思っていたのは私の勘違いかな？」

それには、もう口を開くことはできなかつた。

確かに楽しみにしていた。だが……。

胃の中で消化不良をおこしているような、胸の上に重い石が乗つているような、そんな心地がして氣分が悪い。ぐるぐる、むかむかする。風邪のひき始めのようだ、体温まで下がつた氣がして指先を動かすことさえ億劫だつた。

だが、行きつゝといひまで行くと、普ツリと何かが切れたような浮上してきた。

考へても仕方がないことは、今は考へない。それにいつこう時は、全く違う何かをするに限る。

どうにでもなれ、といつ氣分で正面から「ティーンを見据えた。完全に塞ぐ氣分が晴れたわけではなかつたが。

「分かつたわ。今からご馳走を作つてやるひじやない。そのかわり、あなたも手伝いなさい。店主！」

そう指を突き付けて、宣言した。

とは言つたものの、ユーフュニアが実際にしたことと言えば、野菜を千切つて皿に盛つたサラダぐらいで、後は食卓について台所で無駄なく動くディーンを目で追つていた。

その手際は誰と比べるまでもなく実際に見事なもので、手伝えと

言つたものの手持無沙汰になつたのはコーフュニアの方だった。

僅かな食材でいかにご馳走を作れるのか、という技を目の前で繰り広げられ、少なくとも敗北感を味わつていた。

小麦粉は常備してあるのでバターと混ぜてパイ生地を作り、生地を寝かしている間にスープを作つてていく。出来たパイ生地には先程まで温めていたシチューを包み、こんがり焼き上げれば、その香ばしい匂いに胃袋がグツとつかまれる。

パンにオリーブオイルとガーリックを混ぜたものを塗つて焼き上げれば、さらに食欲をそそり、完全に白旗を上げるしかない。

「あなたの職業は何だったかしら?」

少なくとも料理人ではなかつたはず。

お金持ちであるため、料理人ぐらい雇つているはずだ。それとも給金をケチつて毎日料理しているのだろうか。

食卓の上に並べられていく料理を睨んで、半ば不貞腐れているとナフムがやってきた。

『ほほう、これはこれは』

その口調は褒めているとしか聞こえない。

「……おじいちゃん」

苦虫を噛み潰したような声で訴えると、ナフムは優しく笑み、手をコーフュニアの頭へと乗せる。そして相反する眼差しをティーンに向けた。

『こんなものでわしやコーフュニアを手なずけようつたつてそりはいかんぞ!』

「おや、駄目ですか?」

しつと答えるティーンに、さすがにコーフュニアも黙つているわけにはいかなかつた。

「ちょっとばっかし料理が上手だからって、何だつて言つのよ。見た目じやなくて、要は味でしきつた」

言いながら、立ち上つてくる香りに、お腹が鳴りそうになり、慌てて押さえる。

ディーンが向けてきた眼差しも、ビームでも余裕で余計に腹立たしい。

絶対に味も保証付きだとこいつは、作る過程を見ていたら分かる。

食卓に用意された席はきちんと三人分。言わなくてもナフムの席も準備され、コーヒーミアは思わず沈黙する。

毎晩、夕食はナフムと取つており、きちんと皿を用意するようにしていた。実際にナフムが食べることはできないが、一人の食事は美味しくない。雰囲気だけでも一人で食事をした気分を味わいたかった。ちなみに、ナフムの分は翌日の皿に食べるようになっていたが。ナフムも用意された席に、当然のような顔をして着く。

「こんなことで懐柔されるほどコーヒーミアもナフムも甘くはない。

「せめてお酒があつたらもう少し雰囲気が出るんだけじね」

「食事を進めながら、ディーンが呟く。

綺麗な食べ方。

ぽんやりと眺めながら思う。

ナイフやフォークの使い方も、おそらくマナー通りなのだろう。庶民から見ればそれが正しいのかどうかは分からぬが、控え目に言つても美しい所作だと思う。

「お酒なら料理酒があるわよ」

コーヒーミアは飲もうとは思わないが、多分料理酒でも飲めなくはないだろう。一応気を利かせて言つたつもりだったが、ディーンは苦笑しながら辞退の言葉を口にした。

「いや、いいよ」

その言葉を最後に、静寂が落ちる。

ナフムは食事を始めてから、じつとディーンを見て、何かを考え込んでいる。首を傾げているといふを見ると、何かを思い出そうとしているようだ。

考えの邪魔をするのも悪いし、コーフュニアもディーンを相手に話すこともなく、田の前の料理を攻略する。

思った通り味はいい。シチューも昨日とは味付けが変わっている。あのわずかな間に何か細工をしているようには見えなかつたのだが。眉間に皺を寄せると、田の前から楽しげな声が降つてきた。

「今、何を考えているか当ててみようか?」

「何よ、突然」

眉間に皺を寄せたまま見上げると、余裕ぶつた表情で見下ろしてくれる。

「シチューの味が違う。何をしたの、つてね」

「そ、それは、今食べてるから……」

当てるのとは違うだろ?。単に推測しただけだ。

ムツとして黙ると、ディーンが自分の眉間に指で叩いた。

「それもあるけど、ここに皺が寄つてゐる。きみは私にヘンな対抗心を持つてゐるから分かりやすいね」

対抗心というよりはむしろ敵対心だ。しかもそう簡単に分析されではたまらない。まだ会つてからそんなに日数は経つていないので。一体何が分かると言つのだろう。

それに。

ふと思いつ出す。

取り立て屋に追われていたあの田。コーフュニアのことを知つて

いるような口ぶりだつた。

今まで聞く機会はなかつたが、今が丁度いい機会なのかもしれない。

い。

ナイフとフォークを一度皿に置くと、正面から黒髪の青年を見た。やはり、あの日まで会つたことはないはずだ。認めたくはないが、彼の夜のような紺色の瞳は印象的だ。たとえ忘れていても、見れば必ず思い出すだろう。

じつと見つめていると、ディーンは珍しく柔らかな笑みを浮かべた。それはとても魅力的に見えるはずなのに、やはり心の底が冷え

ていぐ。

「どうかしたのかい？」

ナイフとフォークを同じように皿に置いたティーンは、食卓に肘をついて、その手の上に顎を乗せた。完全にくつろいだ姿勢で、じつとこちらを見る瞳が、話を促している気がする。

その余裕のある態度に確信する。

彼はやはり何かを知っている。コーヒーミニアの知らない何かを。何を聞かれても答えるだけの 躱すだけの準備があるのでだろう。

だが、彼が正直に話してくれるとは思えなかつた。いつも肝心なことはぐらかすばかりで、こちらの苛立ちが募つていぐばかりだ。だから慎重に聞かなければ、また誤魔化されてしまう。

どう攻めていいやらつかと考へ、取りあえず無難な質問をすることにした。

「あの日……あなたに助けてもらつた日、あなたは私を訪ねるつむりだつたと言つたわ。どうして私を知つていたの？」

「これはあの日の出来事でつやむやになつていていた事だ。今更言い逃れのできる話ではない。

「ああ、そのことか。……そういえば、忘れていたな」「忘れる程度のことだつたの？」

その程度の用事で、コーヒーミニアの家を買い戻してくれたというのだろうか。それでは割が合わないのではないかだろうか。

訝しんで見つめると、彼は一つ溜息を落とした。

「どうしてきみはそう私に突っかかるかな。これでも結構きみを氣に入つてゐるし、仲良くしていきたいと思つていてるんだけどね」

表情を曇らせて聲音を落とすそのわざとらしい態度に、刺々しい眼差しを向ける。

「話をそらさないで」

同情を買おうつたつて、そつぱいかない。

突つぱねると、ティーンはやれやれといつもの調子に戻つて肩をすくめた。

「忘れる程度、とこうわけでもなによ」

「じゃあ、どうじてそんなにどうでもこことのよひにまつわるよ」

「別に急ぎではないから」

ゆつたりと告げられた言葉に、またしても話の論点がずれていることに気づく。

食卓の下で手をぎゅっと握り締め、湧き上がつてくる苛立ちをどうにか押さえこみ話を修正する。

「何の用があったの？」

どうしても詰問調になる口調に、彼はコーフュニアの感情を読み取つたのか、今度はすんなりと答えを口にした。

「きみに仕事の依頼をするつもりだつたんだ」

「仕事？」

一瞬、骨董品店の店員のことが頭を過つたが、それは行き掛かり上なつただけで順番が違つと首を振る。どう考へても写字職人としての仕事の方だ。

「きみの筆跡ては、きみが思つてているよつかなり有名だよ。だからね、ある人への贈答品プレゼントにと思つてね」

意外な返答に、田を瞬く。それで彼が自分を知つていたのか。納得できないこともない。しかし、それだともう一つの疑問に答えが出来ない。

おそらくディーンは嘘をつこつていながら、まだ本当のことを語つていない。

氣を緩めないまま、冷めた眼差しを向ける。

「そう。それで私を知つていたのね。でもそうすると、どうして私の感覺のことまで知つていいのかしら？」

昨日からずっと不思議に思つていた。コーフュニアのこの感覺は亡くなつた母と、ナフムしか知らないことだ。しかも、昔はいこまで感度が鋭くなかった。

警戒も露わにじつと見つめていると、ディーンは再び溜息を零した。

「さみはこの街で、死者と関わりを持ったことが全くないと聞こ切れるのかい？」

回りくどくその言い方に、おれまつかけっていた苛立ちが再び膨れ上がる。

彼は答えを知つてこむべせに、ビーハしてそのような質問をするのか。

激高しそうになる感情を抑えると、自然と声が震える。

「……冗談じやないわ。どうしてすき好んで彼らと関わりを持たなければならぬのよ」

身にまとう雰囲気を怪しこと思いつつも、彼らがそのような者だと気づかずには話した事はある。周囲に誰もいなくて、気づいた時の恐怖を思い出し、思わず腕をさする。

イヴァンジエリンやリックとは明らかに性質が違う。もつと陰湿で未知のものだ。正体が分からぬものほど恐ろしこものはない。だから「彼」も実のところ恐ろしい。

震える唇が言葉を紡げずにはいふと、ティーンがニヤリと笑つた。

「つまり、彼らに聞いたんだよ

「彼……？」

まさか、といつ思ひで見つめると、彼はわずかに身を乗り出してきた。

「蛇の道は蛇つてね」

「あなた　彼らに近づいて平氣なの？」

恐る恐る尋ねると、ティーンは食卓から腕を下ろし、椅子の背もたれにすがつた。

「子供の頃からある感覚だからね。割と惡意のあるものとやうでないものの区別はつくかな」

「……そう

言われてみれば、彼は幽靈屋敷と言われる家に住んでいるのだ。本当に幽靈が出るのか興味はあるが、彼が住んでいるぐらいだ。たとえ出了としても今の話しからすると惡意のあるものではないのだ

るつ。

だが、ここ数年、感覚の鋭くなつたコーフェミアには恐怖の方がはるかに勝つている。

側にいるナフムにしても、ずっと暮らしてきた家族だからこそ怖くないのだ。当時、怖さよりも寂しさの方が勝つていたから、受け入れられたところもある。

イヴァンジエリンやリックもまだい。彼らは喋るだけで何も出来ない。多分、人形に取りついてしまった何かなのだろう。しかも見た目が彼らの恐ろしさを半減させている。

どこでコーフェミアの話を聞いたのか、もう少し詳しく問い合わせようとした時、ふとナフムが動いた。

『……思い出したぞ』

今までずっと考え込んでいたナフムが、顔を上げてティーンを見た。

だが、一度ちらつとこちらに視線を送ると、わずかにためらいを見せる。

「どうしたの、おじいちゃん？」

ナフムは逡巡した後、再びティーンを見た。眉間に皺が寄つて、それでもう一度氣づかう様にこちらに視線を送つてから口を開いた。

『……どこかで聞いた事のある名前やどちらと思つておつたわい。

……ラムレイは、この国 フェアクロウに領地を持つ貴族。……

おまえさん、ラムレイ家の者か？』

その言葉に、コーフェミアはナフムに向けていた笑みを消した。貴族。

「……どうしたこと？」

口から出た声はどこまでも低く抑揚がなかつた。

商売で財を成したとばかり思つていたが、実は違つていたのか。ナフムがどうしてこちらを気遣う様子を見せたのか、分かつた。コーフェミアは自らの生い立ちから、どうしても貴族というもの

が

好きにはなれなかつた。

「そう怖い顔をしないで欲しいな。別に隠していた訳じゃない」
吐き気がしそうなほど膨れ上がる不快感を必死で押し留めている
と、ディーンは未だ余裕のある態度を見せるかのように足を組みか
えた。その行動だけでコーフェミアの心が拒否反応を示す。
そのことに気づいたのがどうか。

ディーンは息を落とすようにして微かに笑うと、視線をナフムに
移動させた。

「確かに貴方の言つ 子爵の位は持つていますよ。ですが、貴族
と言つても全ての貴族が恵まれているわけじゃない」

バルフォアは自治権が与えられている為、領主ではなく市民によ
つて街が動く。だが、街から一步でも出ると、そこはレイヴンズク
ロフト侯爵の領地だ。しかし侯爵の采配がいいのか、その地は豊か
で、貴族というのは皆そうなのだろうと多くの者は思つている。
だから、この街一番の金持ちだと言われている男の口から出た言
葉を、素直に信じる気にはなれなかつた。

ナフムも何か思うところがあつたようで、しばらくは黙つていた
が、ふいに立ち上がるとディーンを見下ろした。

『じゃが……。いや、何を言おうとおまえさんが貴族であることに
変わりはないわい』

最後は切り捨てるように言つ放つと、空氣に溶けるようにすりつ
と姿を消した。

珍しく怒つているナフムを見たおかげか、少しだけコーフェミア
は冷静になる。嫌悪感は拭えないが、言いたいことがあるなら聞い
てやろうと視線を向ける。

しかし口はききたくなかった。

黙つているとディーンは参つたなと呟いた。

「先程も言つたけど、別に隠していた訳じゃない。領地は本当に貧

しくて、領民からの労力だけではとてもじゃないが維持が難しい。だから他からの収入を求めて商売を始めたんだ」

「……」

「王都では拠点とする地を確保するにも場所代が高い。だからバルフォアを拠点とすることにしたんだ。ここは王都にもほどよく近いしね」

「……」

「偶然、商売が当たった私は運が良かつたんだが。おかげで何か先祖から受け継いできた領地を守ることが出来ているからね」

「……」

「 もうなんとか言つて欲しいな」

困ったように眉尻を下げるディーンに、わざとくじく深々と息を吐き出して見せた。

それは嘘ではないかもしれない。

だが頭の奥で警鐘が鳴っている。信用してはならないと。「だったら、どうしてこの家を買つたりしたの」

今のは真実だとすると、そのようなお金などないはずだ。

その質問にわずかに顎を見開いたディーンは、きみを侮っていたよ、と呴いて、降参と言つように両手を上げた。そしてやつと本音を口にする。

「下心が全く無かつたわけじゃな」

「それはどういう」

意味と尋ねようとして、彼の瞳が不敵に輝いていることに気づく。

「きみの筆跡はきみが思つていてるよりも有名だ」

だから、コーフュニアを知つていたと言つた。それは分かる。だが、なぜここで彼は余裕を取り戻しているのか。

「それがどうだつていうの？」

見えない話に知らずすらに口調が強くなる。

「きみの筆跡を売るつもりだと言つたら？」

「売る？」

「つまり、私と専属の契約をしてもらおうと思つてね。きみに来る仕事はすべて私を通すことになる。家を買つたのは先行投資だ。まさか……嫌とは言わないよね？」

嫣然と、勝ち誇つたように笑むティーンを穴があくほど見つめた。言わない、のではなく、言えない、の間違いだ。

これはどう考へても一種の強迫だらう。

だが、コーフュニアの心に生まれた感情は、憤りではなかつた。そんなに世の中上手くいくはずないと思つていたが、結果的に自身を助けたのが自らの筆跡だつたとは。偶然ティーンの目に止まつただけなのかもしぬないが、この家で今も生活出来てゐるのはこの筆跡あつてのこと。自分自身の力だつたのか。

なるほど、と思つ。

ここまで潔く下心があると言われたら妙に納得してしまつ。胸の中の闇が晴れていくようだ。

コーフュニアはふつと肩から力を抜くと、ティーンを見た。この男の人間性はかなり問題あると思つが、商売に関しての手腕は右に出るものはいないと聞いたことがある。ならば、彼の下で働くのも悪くないのかもしぬれない。

「わかつたわ。あなたと契約する」

その夜色の瞳をしつかりと見つめると、コーフュニアははつきりと告げた。

食器の片付けを済ますと、一階にいるティーンを放つておくわけにもいかないだらうと勝手に理由付け、ランプを手に取る。すでに夜の帳は下りてゐる。

足元に注意して階段を下りながら、考へに耽る。

契約のことは後日、詳しく述べることになり、勢いで了承したのは早計だつたかと反省する。ナフムと相談してからでも遅くはなかつたのでは、と思ったがあとの祭りだ。

それにしても、と小さく呟く。

デイーンは最初から迎えの時刻を決めていたらしい、やはり開店祝いに来るつもりだったのだ。

食事が終わり、片付けまで手伝ってくれようとするデイーンをさすがに台所から追い出した。ただでさえ、料理では負けた気分でいるのに、このようなところまで手伝われたくない。丁重に断ると、一階にいると告げて引き下がってくれた。

日も暮れたので、イヴァンジエリンやリックも話し出す頃であつたし、別に放つておいても問題なかつたのかもしれないが、日頃、彼らがどのような会話をしているのか興味があつたのも事実だ。

一階の奥のソファが置かれた場所に、明かりが灯っていた。

たまに力チャヤツという音が聞こえるのはリックだろう。それに対して、一トイヴァンジエリンの苛立つた声が聞こえる。

「迎えはまだなの？」

ランプの明かりと足音で気付いたのだろう。デイーンはソファの背にもたれ掛かっていた身体を起こす。

『ちょっと、ユーフェミア。デイーン様を追い払うようなことを言うのは止めてください？』

すかさず飛んでくる敵意に、近くのテーブルにランプを置くと、腰に手を当て、上から彼女を見下ろした。

「あのね、一人暮らしの女性の家に夜遅くまでいる男性の方がどうかしていると思わないの？」

『それは……そうですけど、でも！』

彼女としては少しでも長く一緒にいたいのだろうが、ユーフェミアの体裁も少しは考えて欲しい。ただでさえ、愛人という妙な尊が立ち始めているのだ。気にはしていないが。

わざとあきれた眼差しを向け、彼女の矜持を揺さぶつてみる。

「淑女的にどうなの、そのあたりは」

『……』

完全な無言が返ってきて、心中で勝利を噛みしめる。やみつきになりそうな満足感に浸つていると、リックがカチャカチャとシンバルを鳴らした。

『おお！ すげえな、おまえ！ イヴァンジョンをやり込めるなんて、ただ者じゃねえな！』

日頃は逆にやり込められているのだろう。リックの素直な賞賛の声に、ユーフェミアは少しだけ得意気に胸を反らし、今まで黙つていたディーンが面白くなさそうに口元を歪めた。

「きみは私には反発するくせに、彼らとは上手くやつてるんだね」拗ねているとも取れる発言に、ユーフェミアは真顔で応える。彼のご機嫌を取るつもりは毛頭ない。

「だつてあなたとの会話は遠回りすぎで、はつきり言つて疲れるのよ。その点、イヴァンジョンもリックも嘘はつかないし」

きっと、そのもつて回つた受け答えが、上流階級の会話なのだろう。本心をやんわりと誤魔化すような話し方は庶民のユーフェミアには無理だ。向かない。疲れる。

「私は嘘をついていいけどね」

「でも、まだ何か隠してるとしよう」

ジッと見つめて言つと、その紺色の瞳がスッと細くなる。口元もゆるく弧を描く。

長い脚を組んでソファに座るその姿さえ、分かつてしまえば確かに貴族的だ。仕事で何人か貴族を客にしたことがあるが、身に纏う雰囲気が皆似通っている。

『ちよつと、何見つめあつているのよー』

『おまえ、もう少し黙つとけよー いいところで邪魔すんじゃねえつて』

何を勘違いしているのか、イヴァンジョンとリックが騒ぎ立てはじめる。それと同時に、表に馬車が止まった気配を感じ、ユーフェミアは言い合いを始めた二人を放つておくと、ランプを持って扉

へと向かつた。

「ああ！ ジュリア！ ここにいたんだね！」

馬車から下りてきたロジャーを店内に案内したところ、「ティーンの横にいるイヴァンジエリンに目を見張るや否や、彼はすぐに彼女の元に駆けつけた。

途端、イヴァンジエリンから悲鳴が上がる。

聞き覚えのない名前に首を傾げてティーンを見ると、彼は肩をすくめてイヴァンジエリンに視線を送る。どうやらジユリアと言つのはイヴァンジエリンのことらしい。

『嫌つたら嫌ですの！ ティーン様！ この人、どこかにやつてちようだい！ コーフェミア！ お願いだからロジャーをわたくしから遠ざけて下さらない！？』

半狂乱状態のイヴァンジエリンに、コーフェミアは目を丸くする。一体何事なのだろう。彼女がリックとは違う意味でロジャーが苦手であることは今の台詞から分かったが、ここまで取り乱すとは。当然、彼女の声はロジャーに聞こえていいようで、彼は恭しくその小さな手を取る。途端、響く悲鳴。

いくら精巧に出来ていても、イヴァンジエリンは人形だ。もしも彼女が実際に生きている人間ならば、かなり絵になる姿だが、同じくそれを見て離し立てるリックを見下ろし小さく呟く。

「ロジャーって実は変態……」

『まあ、否定はしないぞ』

力チャットと鳴るシンバルに合わせたように、ソファから立ち上がったティーンがコーフェミアの隣に立った。

そして砂を噛んだような顔をしているコーフェミアに苦笑しながら説明する。

「ジユリアは実際にいる女性だよ。ロジャーが想いを寄せる相手というか、その彼女にイヴァンジエリンがとてもよく似ていてね。ま

あ……なかなか会うことの出来ない女性だから」

つまり身分違いか、もしくは相手の女性は既婚者か。

イヴアンジエリンを代用にして報われない恋心を向けても、彼女にとつては迷惑でしかなく、しかも人形だ。やはりどちらにしても報われないのであれば、憐れとしか言いようがない。

見た目も良く、性格も良さそうな人だと思ったのだが、なるほど。残念な人だつたとは。

「ロジャー。もう帰るよ」

身を翻してさつと扉に向かうティーンに、ロジャーは泣く泣く立ち上がる。

「ああ、ジユリア。また来ます」

『もう来ないで!』

甲高い悲鳴が、コーフュニアの耳に突き刺さる。

「コーフュニアさん。どうか彼女を売らないで下さいね」

憔悴しきつた子犬のような眼差しに、悪いと思いながらも乾いた笑みを向ける。

「え、ええ。大丈夫だと思つわよ。ティーンも売り物ではないって言つてたし」

「はい。では失礼します」

ペコリと頭を下げてティーンを追うロジャーの後を、呆れながらも、見送るために一歩遅れてついて行つた。

外はすっかり雨が上がつていた。

ティーンはまだ馬車に乗つておらず、外に出てきたコーフュニアに夕食の礼を告げてきた。

「今日は一緒に開店を祝つてくれてありがと」

あれが祝う雰囲気だつたのかと言えば異存はあるが、ここは大人として反論するべき場所ではないだろつ。わざわざ礼儀として言つているのだから、素直に返すべきだ。

だが内容的には不本意だつた。ひどく敗北感を感じるのはなぜだ
ら？

だから視線が合わせられない。あせつての方を見ながら口調も無
愛想になる。

「別に、私が料理したわけでもないし、ほんとあなたが準備した
ことじゃない」

「それでも、しようと聞いてくれたのはきみだらうへ。
どうやっても言こ返されてしまうことに、コーフュニアは口を閉
めます。

だから深々と息を吐き出すと、正面からトaineを見上げた。今
回ばかりは負けを認めるしかない。

「ええ、そうよ。これからそ開店を一緒に祝つてくれてありがとうございます。
料理も、とても美味しかったわ」

半ば投げやりに告げると、トaineは満足そうに頷いた。
言わされた形になつてしまつたが、今お礼を言つておかないとい
きつと後々まで後味の悪い思いをするになつただらう。このよ
うな失態を次回は犯さないようになつとい、と思つてみると、ふと
視界が陰る。

何、と思うのと、視界から影が遠ざかっていくのは同時だつた。
頬に触れた柔らかく温かい感触に、思わず手を当てる。

「どういたしまして」

たとえそれが挨拶だらうと、コーフュニアは目を丸くする。
この人は今、何をしたのだらう。

「おやすみ。コーフュニア」

そう言つて、馬車に乗り込んだトaineを見送り、しづらぐの間、
立ちつくしていた。

が。

向かいの家の一階にいる人影を見て、ハツとする。

ケイトがリリーを抱いたまま、にんまりと笑っていた……。

思い出の中の人は、すでに色褪せて。

ディーンと専属の契約を交わすことになり、取りあえず現在引き受けている仕事を片付けなければならなくなつた。

連日連夜、仕事を片付けつつ、筆跡に間違いがないかをナフムと二人で読み合わせて校正作業をしていく。

だから自ずと夜中にその作業を行うことになつてしまつたが、枚数が嵩張ると明け方近くまでかかることがある。

文章の抜けがないかを確認するには、読み上げることで見つけることが出来るが、綴りの間違いはやはり一文字ずつ調べなければならぬ。だからユーフュミアの作業はそれ以降も続く。

だが静まり返つた夜は、目で文字を追いながら、ふと心の中が虚ろになることがある。手も止まつてしまい、意識はとろりとしたものに包まれ、夢と現実の狭間をさまよつ。そしていつもたどり着くのは、ディーンと出会つたあの日なのだ。

彼のことを考えると心の中はざわつき、常に不安がつきまとう。もちろん、恋情とかそういう感情からではない。そんなものがあれば、今すぐ川に流して来ても全く惜しくはない。

強いて言うなら、強い警戒心。

普通に考えれば、面倒見のいい人に見える。

家を失いそうになつたユーフュミアの借金を肩代わりし、家賃の代わりに楽な労働の提供と、仕事を認める契約までしてくれている。その契約が本当にディーンに有利に働くもののかどうか、その後我に返つて、自分の筆跡に対してそこまで自惚れてはいけないと考え直したが、すでにナフムが亡くなつて五年。女性が後ろ盾もなく一人で暮らしていくには確かに現実は厳しい。

だから、愛人と言う尊を利用してようと思つていた。あえて否定も

せず、肯定もせず、ただやり過ぎす。

今までならば近所の人たちも、みな口を揃えて早く結婚しろと言つていたが、噂のおかげなのか誰も何も言わなくなつた。愛人という立場が決して褒められるものではないことぐらい知つていて。だが相手はバルフォアで一、二を争う金持ち、ディーン・ラムレイだ。むしろ羨望や妬み交じりの視線を向けられることが最近では多くなつていて。

この生活を守つていく決心をしたからには、それも甘んじて受け入れる覚悟はしていた。

だが、心のどこかで常に何かを見落としているような不安もあつたのだと思う。

それはあの日　　開店日に、ディーンの身分を聞いた時から、心の奥底でじわりと何かが湧き出し、次第にそれは広がつていった。ただの商人にしては、その身を包む雰囲気が明らかに違う。爵位をもつ貴族だと聞いて、納得せざるを得なかつた。そして、どうしてもつと早くに気づかなかつたのだろうと後悔もした。

一方、もしも気づいていたら、どうしていただろうとも考える。だが、結局は自らの考えを否定するしかなかつた。

この家がディーンの手に渡つた時、家を出ることを選んでいたとしても、きっと彼は契約の話を持ち出し、全く係わりのない生活にはなつていなかつたと思う。

つまり、それが不安の元なのだ。

ディーンと出会つたことで、否が応でも彼が自分の生活に関わつてきている。軋み始めている。それが怖い。

ただ普通の人生を歩みたい。それが自らの願いで、亡くなつた母の願いでもあつたというのに。

ユーフェミアは疲れて熱をもつた目を閉じ、眉間に指で揉んだ。少し痛いが気持ちいい。

凝つた肩を叩きながら、椅子から立ち上がる。

窓の外を見ると、空は白み始めていた。夜明けまでにはもう少し

時間があるだろ？

ゴーフュニアは静かに決心すると、彼らと話をするために一階に足を向けた。

『あら……まだ仕事をしてらっしゃったの？ 睡眠不足はお肌の大敵ですかよ？ ただでさえ、いい歳なのですから気をつけなさい』『気づかってくれつつも、ちゃんとその中に棘を含ませることを忘れない人形に気のない返事をして、彼女の座るソファに腰を下ろした。その態度に、イヴァンジエリンの感情の揺れが伝わってくる。文句の一つでも言つてくるかと思つたが、彼女は口を閉ざしたままだつた。

代わりに、カチャッと小さな音を立てて、リックが己の存在を主張する。

『お？ 珍しいな、こんな時間に』
一人を近づけると喧嘩をするかな、と思つたが、かまわずにリックを手に取ると膝の上に置いた。

『おいおい、どうしたんだ？ そんな神妙な顔をして』

『そうですわよ。いつもの元気はどうしたのです？ 眠いのなら休んだ方が良くなつてよ？』

珍しく意気投合を見せる一人に苦笑する。

彼らと知り合つて、まだわずかな期間しか経つていないが、こうして話することは嫌いではない。むしろ気に入つていた。彼らの目的を見て見ぬ振りをして、この曖昧な時間を楽しんでおけばいいのかもしれない。

だから、本当は話すべきではないのだろ？

彼らはティーンと話しをすることが出来る。ということは、今から話すこの不安は筒抜けになる可能性が高い。

だが、このままではティーンの思惑がどこにあるのか分からぬ。自らの秘密を打ち明けたなら、わずかでも代わりに何かを教えてく

れるだろうか。

馬鹿な事をしている自覚は十分にあった。

「少しだけ、私のことを話してもいい?」

多分、彼はこの秘密さえ知っているような予感がする。もしかしたら目の前の二人も何か知っているかも知れない。

だが、もう何もせずにじつとしていることは出来なかつた。だからと言って、彼に直接何かを問う勇気はない。彼らがそういうものであるからこそ、打ち明けられることだつてある。

彼らに否定の言葉はなかつた。

ユーフェミアはソファにもたれ掛かると、天井を見つめながら口を開いた。

ユーフェミアの母親は、エヴァンス伯爵の娘だつた。

つまり、貴族だつた。

過去形であるのは、すでにエヴァンス家自体がなくなつてしまつてゐるからだ。

過去の詳細なことは分からぬ。ただ、王都にある屋敷にも領地にもいられない事態になつたと聞いた。

家族は離散し、行く当てのなくなつたクリスティアナを、当時王都にある大学で教授として勤めていたナフムが引き取つたという。すでにこの時、クリスティアナはユーフェミアを身ごもつていた。

ナフムはかつて、クリスティアナの父であるエヴァンス伯爵に世話になつたことがあり、その縁で大学の教授になれたという恩がある。しかも、クリスティアナを幼いころから知るナフムには、彼女に勉強を教えていたこともあり、まるで我が子のような親しみを感じていた。

一方、クリスティアナの婚約者であったダルトン男爵は、身重のクリスティアナに手を差し伸べるどころか、関わりを否定し、さつさと他の女性と結婚してしまつた。

当初お腹の子供の父親は多くの者がダルトン男爵だと思い、クリスティアナに哀憐の眼差しを向け、中には援助を申し出してくれる者もいたが、生まれた子供を見て、それが見当違いであることを知った。

コーフェミアは瞳こそクリスティアナと同じ色だったが、髪色は母親とも、父親と言われていたダルトン男爵とも違つ色。

つまり、彼女は婚約者を裏切り、他の男性と親密な関係になつたことになる。

世間では不義を働いた女性に風当たりは強い。

コーフェミアがまだ幼かつた頃、どういう理由なのか母親の知り合いである貴族に何度も会つたことがある。その度に向けられる視線は、蔑み以外の何ものでもなく、それ以来貴族に対して苦手意識が植え付けられたと言つてもいい。

そのような扱いにも、クリスティアナは笑つて耐えていたとナフムは教えてくれた。それはつまり、コーフェミアはきちんと望まれて生まれた証拠であり、愛されていたということだ。だから胸を張つて生きていいと。

もちろん本人のクリスティアナからも、たくさん愛情をもらつた記憶はある。

父親のいないコーフェミアは近所の子供たちから苛められたことも多々あった。泣く泣く帰つたコーフェミアに、やられたらやり返しなさいと、一緒に仕返しをしに行つて、本当にやり返してしまつたこともある。

子供の喧嘩に口出しするものじゃないと、後々ナフムに叱られたいたクリスティアナの姿が今でも思い出せる。心配してこつそりと扉の影から覗いていると、こちらを見て悪戯っぽく笑つてみせ、それを持たナフムに見つかつて叱られていた。

それは思い返せば本当に平凡で、どこにでもある小さな幸せだったのだろう。

差し伸べた手を握り返してくれる手も、抱きしめてくれる腕も、

類に落とされるキスも、何もかも、行動の一つ一つ全てに愛情が溢れ、思い出す日々全てが明るい日差しの中についた。

思い出の中の、彼女の愛情を疑つた日などなかつた。

しかし、そのような生活も長くは続かなかつた。

実際には慣れない生活にクリスティアナの身体の方が先に悲鳴を上げてしまつたのだ。

床から出られなくなつたクリスティアナは、よくコーフェニアに言つていた。

「コーファ……。決して高望みをしてはいけないわ。今ある生活を守りなさい。そうすればきっと、あなたは幸せな一生を送れるわ」何かを思い出しているのか、そう言つた彼女の笑みはいつも泣き笑いのようだつた。それは、まるでクリスティアナが高望みをしてしまつたかのように聞こえ、コーフェニアは幼いながらも頷くことしか出来なかつた。

まして日に日に弱つしていく彼女に何が言えよう。聞くことなど出来はない。

結局、クリスティアナの口から父親に関する言葉を聞き出せることがなく、彼女は永遠の眠りについた。

『それはつまり……あなたのおじい様もご存知ないの？』

話を聞き終わったイヴァンジルが躊躇いがちに声をかけてきた。

リックに至っては無言だ。彼はこのよつに重い話は苦手なのだろう。それはそれで構わない。

「分からないわ」

『分からないって……。聞いたことはないの？』

呆れた声音に、どう答えていいものかと悩む。

だが、意外にもリックから真剣な雰囲気を感じ、手の中のぬいぐるみを見下ろした。

『怖いのか？』

それは限りなく、胸に抱く感情に近い。

「……そう、怖いわ。でも……」

『もしかして知りたくなかつたりするのかしら？』

相反する感情は、長年の付き合いだ。

知りたい。でも知りたくない。

クリスティアナの言うように、静かに平凡に暮らすのが一番なのかもしれない。何も求めず、今の生活のまま。

だが、すでにこの生活に軋みが出始めているとすると、それを正すことはもう出来ないのかもしれない。

だから……。

ユーフェミアはぐつと顔を上げた。

ここからが本題だ。

「……ディーンは、どうしてあなたたちをここに連れて来たのかしら？」

売物でもない人形を置く意味は、果たしてあるのだろうか。

もしもユーフェミアにこの感覚がないのであれば、最適な監視役

ではないだらうか。現にあつたとしても、監視はされているのだろう。

「これは直感だが、この監視と自分の生い立ち つまり、父親のことが関わっているような気がするのだ。」

そう思つてしまつのも、ディーンに髪色を指摘された時、彼はあって母親と同じ色かと聞いたからだ。つまりコーヒーミアには母親しかいないということを知つてゐる。ならば、クリスティアナの髪色も知つてもおかしくない。それなのに、わざわざ聞いてきた意味は、ユーフェミアが父親を知つてゐるかどうかの確認だつたのではないだらうか。

『もしかして、ディーン様を疑つていらつしやるの?』

恐々とした声がユーフェミアの耳に届く。

それと同時にハツと息を飲む音が手の中から聞こえた。

『あいつが父親か!?』

イヴァンジエリンに反して、リックの短絡的思考に思わず目をむく。

「『それはない!』『

はからずもイヴァンジエリンと声が重なる。

『チツ、『冗談だよ』

あの驚きから、かなりの本気が窺えたが、取りあえず手の中のぬいぐるみは取り合わないことに決め、イヴァンジエリンに向き直る。「教えて欲しいの。ディーンが何を知つてゐるのか。あなたたちに何を聞いてゐるのか……」

今、自分は彼の掌の上にいるような気がする。すべての運命は彼が握つてゐる。

『……もし、それを知つていたとして、どうしてあなたに教えなくてはなりませんの?』

『イヴァンジエリン!』

『教える義理などありませんわ』

素つ気ないにも程がある。

仕方なく手の中のぬいぐるみを見下ろす。

「リック」

『お、俺は知らねえ』

動搖にまみれた口調が何を示しているか。

思わずぎゅっと手に力を込める。

『おい！　あいつのことなんかより！　父親の手がかりとかねえのかよ！？』

苦し紛れの言い逃れにしては、先程の冗談を入れても、本音を吐いてくれたような気がする。リックの放った二つの台詞。つまり、彼らはコーフェミアの父親が誰かを知らない。

ディーンもそうだとは言い切れないが、やはり何か目的があつて自分の側にいるような気がする。それは、彼が貴族だと知つてしまつたから過敏に反応しているだけかもしない。だが、イヴァンジエリンやリックをわざわざ監視役に置いているぐらいだ。間違いはないはず。

手から力を抜くと、わざとらしく咳払いをするリックを見下ろす。返事の代わりに額にかかる前髪をつまむ。

「手がかりは　この髪色と……」

自らの掌を見つめる。

もしかしたら、過去に一度だけ、会つたことがあるかもしない。それが父親だと断言できないのは、クリスティアナがそう言わなかつたことと、ナフムがその人と激しく言い争つていたからだ。

それが同日の出来事であつたか記憶は定かではない。なぜなら、コーフェミアは当時まだ三歳かそこらだったのだ。

だから記憶の中のその人物の顔も、歳も何もかも記憶の彼方に行つてしまつたのは仕方ないだろ？。

唯一、髪の色が一緒だと話した記憶はある。

抱き上げられた腕は力強く、いつもより目線が高かつた。地面に下ろされ、もつと抱っこをしてほしくて見上げた先にあつた指の先を握ると、とても温かかったことを覚えている。大きな手

のひらが自分の手を握り返してくれたことも嬉しくて、その瞬間、その人のことが好きになつた。だが、それ以来会うこともなく、顔も名前も記憶から薄らいでいった。

『それじゃ、手がかりがないのと一緒にだな』

『そうかしら？ 言い争つていたのなら、やつぱりおじい様に聞けばそれが誰なのかはつきりするでしょうし、一番早いのではないのかしら？』

イヴァンジエリンの言つていることはきっと正しい。それが出来れば、今までこれほど悩んだりしていない。

『どうして聞けないの？』

もつともな質問に、ユーフェミアはもう一度曖昧な笑みを向けた。「やつぱり……怖いのよ。答えを知つた先に、自分がどうしたいのか分からぬのよ」

このままの生活を望むなら、知らなくてもいい問題だと思つ。それならば、知つてしまつたらどうなるのか。自分は何かを望んでしまふのだろうか。

それに今まで聞かなかつたことを突然ナフムに聞くようなことをしたら、この生活に不満があると思つてしまつかもしれない。決してこの生活が嫌なわけじゃない。

実は父親かもしれない人の手がかりはもう一つある。

クリスティアナの取つた行動だ。

その人の帰り際に、スカートをつまみ、まるでお姫様のようなお辞儀をしたのだ。

初めて見る母のその行動に一瞬にして目は惹きつけられた。あの頃は無邪気にも、ねだつてお辞儀の仕方も教えてもらつたほどだ。だが大人になつてからよく考えてみると、庶民へと身を落としたクリスティアナが取る行動ではない。

いつもユーフェミアを蔑んだ眼差しで見ていた貴族たちに、彼女は一度としてそのようなお辞儀をしたことはなかつた。ということは、ユーフェミアに対しての不快感を示さなかつた相手に対して礼

儀を取つたのか、それ以外に考えられることは、全てにおいて優先すべきほど高い身分の持ち主か。

『あなたつて意外と臆病者ですわね』

『どこか嘲笑の混ざつた聲音に、意識が引き戻される。視線をイヴァンジエリンに向けると、実際には見下ろしているはずなのに、なぜだか見下されているような気がした。表情を動かせないはずの彼女が、どこかあきれているように見える。』

『知りたいと言いながら尻込みしてる。それは単に逃げてるだけでしょう。自分のことを知ろうともしないで、ディーン様のことを知りたいなんて百年早いですわ』

突き放す口調は、どこまでも容赦ない。

言葉が出なかつた。

確かに、彼女の言つように躊躇いはある。これは、逃げているのだろうか。

果然と彼女を見つめていると、ふわりと彼女の雰囲気が変わるのが目に見えた。甘く、柔らかい、少女のようなものに。

『わたくしはディーン様を信用していますわ』

声を落としたイヴァンジエリンが囁くように言った。

『わたくしは動けないからディーン様の行動の全てを知つてているわけではありませんわ。でも、あの人の周りにいる人は誰も、彼のことを悪く言わない』

手の中のリックも反論をしないところを見ると、同じ考え方なのだろう。

悪い人ではないと思つていいのだろうか。彼が何を考えているのか分からぬ。ただ、自分が望んでいることは一つだ。それを守ることが出来るなら、彼を信用してもいいのかもしれない。平凡な人生が送れるなら、利用しようとしていないなら 貴族の前に引き出さないなら……。

窓から白い光が差し込んで来る。

夜が明ける。

眩しさに目を閉じ、これだけは彼らに伝える。

「私は、あの人のすべてを信用したわけではないけど、これでもあなたたちは信用しているのよ……」

明けた一日の始まりに、返事はなかった。

そのまま寝入ってしまい、このままでは風邪をひくと思いながらも、重い瞼は開いてくれない。

ゆるく、髪が梳かれる。

温かい指先が、額に触れる。

記憶の底をたどる様に、あの日のままのあの人が現れる。

「エド……」

どこか戸惑ったように笑う人。

向けられた空色の瞳は春の晴れ間のように温かくて、その手が離れていかないよう手を伸ばす。

母も祖父もいなくなつた。そのような温かい眼差しを向けてくれる人は、もう、貴方しかいないのに……。父親だと思つているのは自分の願いかもしれないけど。

だけど、手は空を切る。

望むものは昔から決して手に入らない。手に入ったと思っても、それは決して長続きしない。

今あるものだけでも守りたい。もう、大切な人を作りたくない。

だから、一人で生きていく……。

翌日。

店番の合間に睡魔と闘いながら、作戦を練つてみた。
確かに、イヴアンジエリンの言つたことも一理ある。だが、よく
考えてみると、それとこれとは話が違うような気がしてならない。
彼女の言い分は、なぜかユーフェニアを好敵手ライバル視した牽制のように
聞こえたからだ。そのような感情はまったく持ち合わせてなどいな
いのに。

本当にいい迷惑だ。

「こやかに、優しく、ねだるよつて。

「ねえ、イヴアンジエリン」

彼女のいるソファに、昨夜と同じようにリックを膝に乗せて座る
と、二人はあきらかに狼狽した様子を見せる。

『な、何を企んでいらっしゃるの?』

『おい、気持ちわりいぞ。そんな猫なで声』

リックに最後まで言わさず、手にキュッと力を込めると、彼は息
を詰めるように言葉を止めた。

イヴアンジエリンからも、微かに息を飲む音が聞こえる。

「そんなに警戒しなくとも、あなたに聞いてみたいことがあったの
よ」

声を出さずに笑うと、一拍後、彼女は慎重に口を開く。

『 どのようなことですの?』

注意深くこちらを窺う様子に、今度はニヤリと笑う。

脳間に散々考えた。

「こちらがティーンの思惑を知りうと躍起になってしまったから、
彼らも反対に口を閉ざしたのだ。要は、自分から話させねばいい。」

「私は『ディーンのビジがいいのかさっぱり分からんだけど、どこがいいわけ?』

常々、謎ではあったのだ。イヴァンジエリンにしろ、幼なじみのケイトにしろ、男は顔が良ければそれでいいのだろうか。

『……あなた　わたくしに喧嘩を売りにいらしたの?』

イヴァンジエリンにしては珍しく、滅多に聞けないほど低い声音に、そこに彼女の怒りを感じる。

失敗したかしらと、慌てて、だが慎重に、今度は言葉を選んだ。
「悪い人じやないってあなたが言つたんでしょう?　だつたら、あなたが思うディーンの良さ……いえ、魅力を教えてよ」

自分で言つておきながら、肌が粟立ちそうになつた。何を言つているのだと思いつつ、自らの発言を我慢しきれなくなりそうになり、思わず両手でギュッとリックを握り締めると、手の中からは、ぐええという声にならない音が漏れる。

こちらの気も知らず、イヴァンジエリンは一瞬無言になつた。

またもや失敗したか、と氣を揉んだのと、彼女が呟いたのはほぼ同時だつた。

『み、りょく……』

うつとりと、それは溜息交じりのなにものでもなかつた。
かかつた、と内心ヨーフュニアはほくそ笑む。

が　その後、すぐに後悔した。

『今頃そのようなことを言い出すなんて、あなたもまだまだですね。ディーン様の魅力を理解できないなんて、女としてどうかしているとしか思えませんわ。でも、どうしてもおっしゃるなら教えて差し上げないこともありますわ。もちろん、あなたが理解できるとは到底思えませんけど。大体、あの紺色の瞳に見つめられて心を動かされないなんて……。ああ、思い出しただけで心が震えて、胸が痛くなってしまいますのに。でも、ディーン様にそう言つと必ず仰つて下さるのよ。会えない時間があるからこそ、会えた時間が最上に思えるのだと。全くその通りですわ。女性にはとても紳士的で、

かといつて男性とも機知に富んだ会話をなさるのよ。その上』

最初こそ、人形相手に語る『ティーンの言葉に彼も実は変態なのだろうか、とか、ではロジャーはどうなのよ、と心中で突っ込んでいたが、つらつらと語られる話に耳を傾けていると、次第に瞼が重くなってきた。

興味のない話といつのは最上の子守唄だわ、と何気に思いながら、ふと手の中のぬいぐるみを見下ろした。

珍しくシンバルも鳴らさず沈黙を守つている。

どうしたのだろうと、小声で話しかけてみるつこでこ、この演説がどこまで続くのか聞いてみる。

「ねえ、リック。いつまで続くの？」

『つ おまえな！ 一番聞いやいけないことを聞いといで、それはないだろ！？』

「……ああ、やつぱりそうなんだ……」

なんとなくそつではないかなと思つていた。

ぼんやりと、まずつたなあ、と頭の片隅で考える。

『どうしてくれんんだよつ。このままだと朝まで喋り続けるぞ！』
その言葉に、乾いた笑みをリックに向け、すぐに心は決まった。リックをソファに下ろす。

『おい？』

彼の頭をポンポンと叩いて、にっこりと笑う。

「あと、お願ひね。昨日も徹夜だつたじゃない？ 今日はもう休むわ」

『わ』

『おいつー。』

「じゃ、おやすみ」

リックの非難は取りあえず棚に上げておく。

未だ延々と話し続けるイヴアンジーリンは、ゴーフルニアが立ち上がつたことにさえ気づいていない。

一度、階段の下で振り返る。

まだ彼女は薄ら寒い言葉を喋り続けている。

うん、やっぱり。

欠伸を噛み締め決心する。

彼のことは自分で調べよ。一つ勉強になつたと頷き、階段を上

つた。

やられたらやり返す それが母の教え。

今現在、ディーンについて分かつてゐることは、名前と住んでいる場所、社会的地位ぐらいだろう。つまりバルフォアの街の一住民として聞き及んでいることぐらいしか分かつていないので。

イヴァンジエリンから聞いた話によると、彼の周囲にいる人はきっと近い人だと思うのだが、彼のことを悪く言う人はいらないらしい。逆を言えば、彼を知らないから悪く言うのだと言われているようなものだ、自分のように。

ぼんやりと考えながら、クライトンの街を歩く。

クライトンはバルフォアから馬車で一時間ほどの場所にあるフュアクロウの王都だ。

依頼されていた原稿の納品にやつてきたのだが、これが個人で引き受けた最後の仕事だった。

バルフォアからは乗合馬車を利用して来たのだが、郊外に向かうには街中を突つ切る必要がある。こちらもそのまま馬車を利用する手もあつたのだが、通りに並ぶ店を眺めながら歩くのも実は楽しみにしてきたのだ。仕事代が入つたら帰りに何か買って帰ろうかな、と目星をつけるためでもある。

バルフォアも商業で賑わいを見せる街ではあるが、やはり王都となると並外れた違いを見せつけられる。まず街の作りからして違う。道幅も馬車が余裕でそれ違えるほど広く、人通りも多い。一つの店の規模も違う。建物もほとんどが四階以上あり、ここに暮らす人たちの格好もどこかお洒落で洗練されたものに見えてしまう。

コーエミアもクライトンに来る時は客先に赴くこともあり、服装にはかなり気を使つてゐるつもりだがやはりどこか違うのだ。今は冬場で、コートを着てゐるおかげで多少の誤魔化しがきくから助

かっているが。

歩きながら通りに立ち並ぶ店の飾り窓を見やり、そこに[引ひつた自分の姿にうんざりする。

「コートを新調したのは遠い昔、ナフムが生きていた頃の話だ。それでも流行りのない型と色なので流行遅れには見えないが、一言で言えば地味なのだ。今更新しいコートを買うだけの余裕もなく、取りあえず着つぶす気ではいる。たとえ買ったとしても、お洒落をして行く場所も予定もないのだから必要ないだろう。

それでも街行く同年代の女性たちを見ると、気分が沈んでしまう。ただでさえ薄曇りの冴えない天気が続く冬場なのだ。綺麗な色味の服を着た女性たちが、色とりどりの花を通りに咲かせている様は見た目にも美しく、やはり羨ましく思ってしまう。いくら気にしないようにしていても、その中に混ざれない自分が何だかすごく惨めで、この場から逃げ出したくなってしまうほどに。

気を取り直してせめて手袋だけでも新調して帰ろうつかな、と道の端を歩きながら顔を上げた時、見たことのある顔を前方に見つけ思わず立ち止まっていた。

どうしてこんなところで会つのだろつ、と自らの不運さを嘆きたくなる。しかし、すぐに黒髪の青年が一人ではなく、女性と連れ立つていることに気づいた。

女性はまだ若く、年のこころは二十歳前後ぐらいだろうか。上品な色合いの薄紅色のコートを着ている。

しかしその人物の顔を見て、コーフェニアは思わず息を飲んでいた。

「イヴアンジエリン……？」

腕に抱えられるサイズの人形ではなく、彼女は等身大の人間として歩いていた。

陶器のような白い肌と、うつすらと赤く染まる頬。空色の瞳と薄紅の唇。生きているのが不思議なほど整った顔立ちは、まさに人形のようだ。どこからどう見てもイヴアンジエリンにしか見えない。

いや、あえて言つなら髪色が金髪ではなく赤みがかつた金髪だ。
それを結い上げているのだから、イヴアンジエリンに似ていると思つたのは錯覚だろうか。

だが、似すぎていい。

驚きのあまり声も出せずにじつと見つめていると、聞き覚えのある声が耳に届き我に返つた。

「コーフェミアじゃないか。どうしたんだい、こんなところで「視線を一度彼の方に向けたが、自然と目は彼の方に行つてしまふ。

赤みがかつた金髪の彼女は、ディーンの台詞に澄んだ空色の瞳をこちらに向けると、パッと顔を輝かせた。

「貴女がコーフェミア様ですのねつ。こんなところでお会いできるなんて！」

いつもはかすかな微笑みを湛えているだけのその顔が、くるりと表情を変える様には驚きを隠せない。コーフェミアが戸惑いを隠せずにいると、ディーンは苦笑しながら紹介をしてくれた。

「彼女は、ジュリア　だ」

どこか引っかかりを覚えるような言い方に首を傾げる。だが、すぐにはその名が、ロジャーがイヴァンジエリンを想い人の代わりに呼んでいた名だと思い当たり納得する。

「あなたが……」

「ジュリアと申します。コーフェミア様」

礼儀正しく几帳面にも礼を取る彼女に、コーフェミアも慌てて頭を下げる。

どこからどう見ても彼女は上流階級だ。着ているものも、その身から放たれる雰囲気も明らかに違う。

ロジャーが恋に落ちるのも納得だ。同性のコーフェミアから見ても可愛い人だと思えてしまうのだから。その微笑みは、老若男女を問わず心が蕩かされてしまうだろう。

なんて可愛いらしいの、とぼんやりしていると、現実に引き戻す

ようには彼女の隣で咳払いをし、「己の存在を主張している男がいたことを思い出す。

「相変わらず、きみは酷いな。挨拶を返してくれないどころか、私のことを視界にも入れてくれないなんて」

「……あなたね。何言つてるのよ」

げんなりとしつつも、視線を移動させる。彼を見る目がどうしても険を含んでしまう。

この二人がどういう関係にしろ、彼女の前で誤解を生むような発言は控えて欲しかった。不用意な発言でこちらにとばっちりが来るのは「めんだ。

ちらりとジュリアの様子を窺うと、彼女は微笑ましいものでも見るように小さく笑うだけで、気分を害した様子はなかつた。

「仲がよろしいのですね」

話し方もイヴアン・ジエリンと似ているとこり、声に含まれる強さが違う。

イヴアン・ジエリンは澄ましたところがあるが、ジュリアは嫌味もなく親しみを込めた温かみを感じる。

その態度にちらりとティーンを見る。

以前、彼は女性に好評だと言つていたが、それは男女関係のことではないのだろうか。あの話の展開からすると、恋愛を遊びのように言つていたからそういう意味だとばかり思つていたのだが。

ジュリアには相手にもされていない様子に内心ほくそ笑む。

だが、ふと飾り窓に映つた自分の姿が視界の端に入り、そうではないと気づく。

ジュリアが相手にしていないのは自分の方なのかもしれない。彼女は上流階級で、多分貴族だ。冴えない色味の地味な女など、ティーンが相手にするはずがないと考えていてもおかしくはない。

彼女から見下げられているような感じは受けないが、そう考えてしまう自分がいて情けない。その事実に一度気づいてしまうと、場違いな態度を取つているのではないだろうかと心細くなる。

周囲を見渡すと、明らかに一級品を身につけた男女と対等に話している自分は異質ではないだろうか。通り過ぎる人々の目を引いているような気がする。

「ところでコーフェミア様。今からビーチに行かれる」予定があるのですか？」

不毛なことをぐだぐだと考えていると、いつの間にか隣に来ていたジュリアに腕を取られる。ふわりと女性らしい甘い香りが鼻腔をくすぐり、思わずロジャーにも勿体ない、と思ってしまった。

コーフェミアは不相応な呼び方に眉尻を下げて見せる。

「あの。その様付けは止めもらつてもいいですか？」

「ご迷惑でしたか？」

「いえ、何だか慣れなくて。呼び捨てか、もしくは……コーファと呼んでいただいた方が落ち着くというか……」

「まあ！ ではコーファ姉さまとお呼びしても！？」

予想外の反応と、期待を込めた瞳で見つめられ、どうして否と言えようか。

先程まで考えていた彼女が自分を相手にしていない、という考えが恥ずかしくなる。真剣に自分の言葉を受け取ってくれている相手に対し、あまりにも失礼だつたかもしれない。

一方、出会つたばかりだと言うのに、ここまで親しみを込めてくれることを疑問に思う。名前を知っていたということは、ディーンが何かを彼女に話したことぐらい想像つくが、一体、何を吹き込んだのやら。

取りあえず、コーフェミアに拒否権はない。

「……お好きなように呼んで下さい」

上流階級の人間と会う機会がそう何度もあるわけではないだろう。半ば押され気味に諦め半分で頷くと、彼女はふわりと花が綻ぶような笑みを浮かべた。

「ではわたくしのこともジュリアと呼び捨てで。それと敬語も必要ありませんわ」

わたくしの方が年下ですし、と続ける彼女にコーフェニアも同じ言葉を返す。

職人であるコーフェニアは労働者階級だ。本来なら接点のない階級で、まして一生のうち世間話をする機会など無いに等しい。コーフェニアの方から率先して彼らと付き合おうといふ気はないので、この場限りの出会いということになる。それならば、と思って口にした言葉にも関わらず、彼女の方は嬉しそうに頬を染めた。

女性としての見本が目の前にある、と思いつつ、この後の予定を聞かれていたことを思い出し、手に持っていた封筒を見せる。

「今から届け物をしに行かなければならないのよ」

「……そうなのですか……それは、とても残念ですわ……。せつかくだから一緒にお買い物でも、と思つてましたのに……」

心から残念そうに、だけど諦めきれない、という素振りでなおもコーフェニアの「コートの袖を握りしめるジュリアに困惑いつつも曖昧に返事を濁す。

上流階級の人間と買い物など冗談ではない。

何か一品買うにしても、数日かけて働いた仕事代が、あつという間に無くなってしまうだろう。ましてやどのような店に入ると言うのだろう。ジュリアやディーンのように見るからに高級品を身に付けている者と、自分のような身なりの者では、貴族の子女が外出の際に付くという付添人にさえ見えないだろう。果たして店に入れてもらえるかどうか。そこから問題だ。

いや、そこまで酷い格好をしているつもりもないのだが。

先方に連絡しておいた約束の時刻も迫っている。

曖昧に返事をしたことで、さすがにジュリアも引き下がつてくれた。

しかし。

「いつかコーファ姉さまのところに遊びに行つてもいいですか？」
思いがけない提案に驚きつつも、これはきっと社交辞令だと思い、頷き返す。まさかバルフォアまで来るはずはない。

だが、今まで黙っていた田の前の男が珍しく渋い顔をした。

「ジユリア　。それは　」

「口出しは無用です。　……」

一瞬、一人は視線を合わし、気まずそつに口ひもると、ギリギリなくこちらを見た。

何だろう、この雰囲気。

なぜか一人の邪魔をしている空気がそこはかとなく漂う。ユーフエミアは触れてはならない何かを感じて、それじゃ、と片手を上げた。

「時間がないので、『めんなさい』

何故だかいたまれなくなる。

彼らの間に流れるのは、秘密を共有する空気だ。もちろん、その秘密に触れたいとは思わない。だが、疎外感を全く感じないかと言えば嘘になる。

足早に一人と別れ、人ごみに紛れた後、別に関係ないし、と小さく呟いた声は、側を通った馬車の車輪が軋む音にかき消された。

仕事代も無事に手に入り、行きがけに日星をつけておいた手袋を買えると思うと、郊外の道を歩く足取りも軽くなる。

この辺りはまだ高級住宅街で人通りも少なく、たまにすれ違う人は散歩でもしているのだろうか。皆ゆつたりと歩いている。

冬も始まつたばかりで色づいた葉も散りゆく季節。

鉄柵の間から見えるどこの屋敷の庭も掃除が大変なのだろう。使用者たちは箒を手に、忙しく落ち葉を掃き集めている。しかし掃いた端から葉が落ちてくるのだ。終わりの見えない作業に、広い庭があるのも考え方のだと横目で眺めつつ通り過ぎる。

そんなことを思いながら歩調を速める。

帰りも乗合馬車を利用するつもりだが、日が暮れる前にはバルフオアに着きたかった。冬場は一段と日没が早いので、自ずと人ならざる者が動き出す時刻も早くなる。彼らとの邂逅を可能な限り避けるならば、買い物する時間を絞るしかないだろう。

馬車の出発の時刻まで時間に余裕があつたら、仕事用の新しいインク壺も見てみようかな、などと考えていると、通りを一台の馬車が追い越して行つた。

馬車などどれも似たようなものだ。

頭では分かつていいものの、微かに見えた御者の姿が今ではすっかり顔馴染みになつてしまつたりオンに似ていたような気がして、それだけで眉間に皺が寄つてしまつ。

もうこれは条件反射だ。

初老に差しかかつたばかりのリオンとは決して仲が悪いわけではない。顔を合わせれば挨拶もするし、世間話しにも花を咲かせるほどの仲だ。ただ、どうしてもリオンの顔を見ると、彼に附隨する人物を思い出してしまい、いつだつたかその話題が上つた時には頭を下げずにはいられなかつた。

つまり、リオンの姿を見れば、ディーンがいる確率は十割なのだ。ゆつくりと速度を落として止まつた馬車に、自然とゴーフュミアの足も止まる。

馬車の扉が開く前に、御者台から挨拶代わりに帽子を振る手が見えて、びりして肩を落とさずにいられようか。それはリオンがいつもゴーフュミアにしている挨拶だった。

扉が開くと予想通りの人物が姿を現す。

ゴーフュミアは一拍置いて表情を改めると、諦めて歩み寄つた。「ちょうど良かつた。もうバルフォアに帰つてしまつたかと思つていたんだよ」

馬車から下りたディーンは、そのまま扉を片手で押さえるとこちらに手を差し伸べてきた。

手袋をはめたその手を見て、その意味を計りかねる。だが取りあえずその手は見なかつた事して、開け放たれた馬車の中に視線を送つた。

乗合馬車とは違い、見るからにクッショーンのきいた座り心地の良さそうな椅子だった。きっと振動も少なく、長時間乗つっていても腰が痛くなることはないだろう。

だが、もしかしたらそこにいるかもしれないと思つていた人物の姿はなく、少しだけ気が抜けてしまつた。

「ジュリアは一緒じゃないの？」

尋ねると、彼は肩を竦めた。

「彼女は家の者が迎えに来てね。あれからすぐに別れたんだ」

「そう……」

気のない返事をしつつ、自分に向けられた手にやつと視線を戻す。

どういう経緯で一人が街中を歩いていたのか知る由もなかつたが、単なる知り合いにしてもディーンの彼女に対する態度は淡白だ。二人の関係を色々と想像していたのだが、どうやら恋人という立場ではないらしい。確かにジュリアもディーンに対して冷静すぎるほど素つ気なかつたような気もする。

しかし……。

いつまでも手を取らないでいると、ティーンは苦笑しつつも近づき、背中を軽く押すようにして馬車へと促してきた。

「送つていこう。ついでだから」

田の前に開いた空間を眺めて、しばし考えた。

乗合馬車もタダではない。片道分の料金も馬鹿にならないことを考へると、ここは素直に送つてもらつた方がいいのかもしれない。だが、片道一時間の道のりをこの男と同じ空間に、しかも一人きりでいることに我慢できるかどうか自信がなかつた。

精神的な安らぎをお金で買えるのだとしたら、馬車代も安いものかもしねり。

一人で納得すると、隣に立つ男を見上げる。

「せつかくだけど、買い物をしようと思つてゐから」

背中に回され腕を軽く押しやつて、断りの言葉をやんわりと舌に乗せる。

決して嘘は言つていないし、手袋が欲しいのも本當だ。

断る理由が苦痛だからでは、さすがに失礼だとこいつはべりこくーフェミアにも分かつてゐる。

本当なら送つてもらつその時間が、彼の思惑を探ろうとしているコーフェミアにとって、絶好の機会であることも承知してゐる。だが、移動する馬車内で彼の口車に乗つておかしな話になつた時、口では勝てる気がしないし逃げ場もない。もっと慎重に場所も選ばなければならぬような気がする。

今回はその機会を見送るだけだ。イヴァンジエリンが言つようこそ、元の馬車へと決して臆病風に吹かれたわけではない。

さつさと挨拶をしてこの場から離れようと考へてゐると、まるでその考え方を見透かしたように腕を捕まれた。

「それなら私も付き合おう」

何かを企んでいるような笑顔を向けられ、コーフェミアがわずかにひるんだその隙に強引に馬車に押し上げられていた。

「え、ちょっと、ディーン！？」

「座つて」

狭い馬車の中で中腰のまま振り返ると、ディーンも戸口に足をかけ乗り込もうとしていた。完全に逃れることは無理だと見て取ると、仕方なく進行方向に背を向けて座る。

椅子は思つていた以上にクッショングがきいていて、座り心地は想像以上だった。これだと本当に馬車に乗つている気がしないかもしない。やはり乗合馬車とは大違ひだ。

扉が閉まると、ゆっくりと動き出す。

斜向かいに座つたディーンを見ると、満足そうな笑みを浮かべている。

逆にコーフュニアは渋面を作ると、苦々しく言い放つた。

「相変わらず、強引ね」

「強引ぐらいじゃないと、きみは相手にしてくれないだろ？」「ぬけぬけと言つてのける田の前の男に、返せるものは溜息ぐらいしかない。」

彼の言い分からしてみても、素氣無くされてゐる自覚はあるのだ

う。それならいつそのこと、放つておいてくれればいいのに。

口には出さないが、胸中で呴かずにはいられない。

視線を田の前の男から窓に向か、流れる景色を見つめる。いつなつてしまつては仕方がない。

「ところで何を買うつもりなんだい？」

笑顔で尋ねてくるディーンに、もはや逆らつ氣力はなかつた。

クラiftonの中央通りで馬車から下つたものの、コーフュニアはすでに帰つたくてしうがなかつた。

「ねえ、ディーン。無理だから、絶対に。買い物はもういいから帰りまよ！」

斜め前を歩くディーンの背中に小声で声をかける。

彼が入ろうとしている店はすぐ目の前だ。

つい先程、馬車から「ディーンの手を借りて下り、彼の視線が向いた先の店の看板を見て、コーヒーミアは青くなつた。

王室御用達……。

一介の庶民が常識的に考えて一生、縁のある店ではない。店員だって見るからに貧乏そうな人間を相手にするはずはない。上流階級を相手にする店は、決まって客の足元を見るのだ。見下されるのはごめんだつた。惨めな気分になると分かつていてるのに、店に入りたくないなどない。

「ディーンっ……」

なんとか呼び止めようと声を上げかけたが、ディーンが扉に手を伸ばすより先に内側から扉が開いた。

店から出でてきたのは穏やかな雰囲気を湛えた白髪の初老の男性だつた。にこやかにディーンを出迎え、その背後にもう一人、こちらは三十代ぐらいの凜とした女性が姿を現す。

「これは、ラムレイ様。わざわざ足をお運びいただきなくとも、連絡を下さればこちらからお伺い致しましたのに」

「いや、急に思い立つたからね」

ディーンと懇意なのが、一通り挨拶を交わすと白髪の男性はコーヒーミアに視線を移動させ、穏やかな眼差しのまま軽く礼をした。彼の背後に控えている女性も、どうぞ、と笑顔で店の中へと促す。

「コーヒーミア、入るっ」

振り返つてこちらを向いたディーンに、道の真ん中に突つ立つていたコーヒーミアは、ためらいがちに小さな声で無理だと告げる。この際、泣きごとだらうがなんだらうが無理なものは無理なのだ。見下されなかつたことはさておき、要は先立つものの問題だ。仕事代が入つたからと言つて、全額を手袋にさく予定はない。今後の生活費もかかっているし、何より仕事代を注ぎ込んで買えるかどうか……。

「心配は無用だよ。この店に連れて來たのは私だから責任は持つよ

確かにディーンなら手持ちは大丈夫だらうが、足りなかつたからと言つて借りるのもどうかと思う。

「それは駄目。借りるつもりはないわ」

「お金なんてこりごりだ。取り立て屋たちに追い立てられたことが脳裏に甦り、気分が滅入りそうになる。しかしディーンはおかしなものでも見る目でこちらを見返しだけだつた。

「貸すつもりはないんだが……まあ、取りあえず見るだけでもいいんじやないか?」

先程から黙つてこちらのやり取りを見ながら、開けた扉を押されていた初老の男性は、ためらうコーヒーミニアに頷いて見せる。

扉の側いた女性店員に視線を向けると、彼女も笑顔で一つ頷いた。

「……見るだけぐらいなら」

そこまで言われて渋るほど大人げない態度もどうかと思い、内心絶対に買わないと心に決める。

ディーンや店員に促されるように一歩を踏み出し、結局店内へと足を踏み入れた。

何かが激しく間違つてゐる、と鏡を前にしたコーヒーミニアは疲れきつた自らの顔を見つめた。

身体に巻き付けられた布地はどう見てもドレス用のものだ。冬の普段着用の布地ですよ、と言われ、あつといふ間に身体に沿つよつ、まるで本当にドレスを着てゐるかのよつに巻き付けられる。

翡翠色の布地に幅広のレースを要所につけられ、これは絶対に普段着では着られないと確信する。

出迎えてくれた女性店員に、布をあててみるのは無料なんですか
ら、と力説され、言いなりのまま、すでに両手では足りないほど
回数は布を巻き付けられている。

手袋を見るはずだつたのに、なぜ服をあつらえるような状態になつてゐるのだろう。しかも奥から他の店員が帽子まで持つてきて頭

にのせている。

ディーンは白髪の男性となにやら話しながら、時々こちらを見ては、それは駄目だ、とか、色違いはないのか、と口を出してくる。

一体、何を考えているのか。

女性店員の口調や態度から察するに、別に売りつけようとしているわけではないようなのでまだ安心できるが、ディーンのために着飾らされているような気がして納得がいかない。

いい加減ぐつたりとしてきたところで、ディーンが更に奥から違う布を運んできた店員を止めてくれなければ、逃げ出していたかもしない。

「何なのよ、一体……」

よたよたと近寄ると、白髪の男性が椅子を用意してくれたので、礼を言つて腰かける。

文句をこぼしながら、このようなことの原因となつた男を見上げた。しかしディーンは、先程コーヒーミアが身につけた布を見ながら、彼がいいと言つたものばかりの布を見て女性店員と何かを話していた。

ほんやりとそれを見ながら、もしかして、と考える。

あの布は誰かに贈る予定なのかもしれない。その誰かがちょうど自分と同じような身体的特徴の為に代わりに付き合されたのかも、と。

全く、いい迷惑だ。

「お疲れになりましたか？」

白髪の男性が紅茶の入ったカップを側のテーブルに置いてくれた。

「少し……」

本音は大いに疲れたのだが、彼に文句を言つても仕方がない。

苦笑混じりに誤魔化すと、ところで、と男性は軽く咳払いをした。勧められるままにカップに手を伸ばしかけていたコーヒーミアは、何だろう、と男性を見上げる。

「つかぬことをお伺い致しますが、ここ一、二年の間に極度にお痩せになつたりとか……その、体形が変わられたことなどございませんか?」

おかしなことを聞くな、と思いつつも、いいえ、と答える。

「ここ一、二年、服も新調していない。去年の冬服がきつてもなくゆるくもないところをみると、体形は変わっていないのだろう。自らの身体を見下ろしながら、もしかして今着ている服のサイズが合つていらないのだろうかと不安になる。そんなユーフェニアに男性は安心したようにほほと息をついた。

「さようでござりますか。では、大丈夫でしょう?」

何が大丈夫なのだ、と首を傾げていると、ティーンがやつとこちらを向いた。

「では手袋だけ持つて帰る手配をしてくれ」

「かしこまりました」

軽く頭を下げた男性は、ユーフェニアにも田だけで礼をすると仕事に戻つていった。

逆に近づいてくるティーンに呆れた眼差しを送る。

「まったく、誰のものを見立てたのか知らないけど、そういうつもりなら最初に言って欲しいわ」

カップの中から立ち上る湯気に息を吹きかけながら、一応文句を言ってみる。自分ではないが、やはり綺麗な布地を見るのは実のところ楽しかったのだ。

「ん? あれはきみのだけど?」

さも当然のように言われて、一瞬時が止まる。次の瞬間、口に含もうとしていた紅茶を吹き出しそうになってしまった。

「な、何言つてるの? 待つてよ。どうして私がドレスを買う必要があるのよ。私が見に来たのは手袋よ? あなた、一体何着頼んだの!? つて言つたか、そんなお金ないわつ。払えない!」

一応声は押さえたつもりだったが、気が動転しているため次第に大きくなつていぐ。それと同時に血の気が引き、かすかに身体が震

える。

布のあの手触り。あれはユーフェニニアが普段着にしている布地ではない。薄くて光沢があり、しかも織り目自体に模様が施されるものもあった。きっとユーフェニニアの想像することができないような金額に違いない。

店に入る前、借金するつもりはない、とはつきり言つたつもりだつたのに。

ディーンはちらりと背後を振り返ると、女性店員が重ねている布地を見る。

「取りあえず三着だつたかな？　もちろん、まだ後で追加する予定だけど。お金のことは心配しなくていいよ。きみに頼みたい仕事が出来たから、きつちり働いて返してもらつつもりだし、そのことにについては帰りの馬車の中で話そうと思つてたんだよ」

「待つてよ！　仕事つて、引き受けること前提なの！？」

「引き受けてくれないと困るな。つて言つたか、もう引き受けてしまつたし？」

「いっそ清々しいほゞの口ぶりで言つてのけたディーンに、ユーフェニニアは開いた口が塞がらなかつた。

思えば、家の件にしてもそうだつた。当人には相談もなく決めて、あとで否と言えなくする。先行投資と言えば聞こえはいいが、一種の騙しうちだ。

「ああ、ついでに採寸もしておくれかい？　バルフォアの仕立屋の奥さんに、一応きみの採寸表をもらつてきておいたんだけど……」

その言葉に、いつぞや一階の窓でほくそ笑んでいたケイトの顔が脳裏にちらつく。

「彼女のことだ。きっと嬉々としてディーンに教えたに違いない。がつくりと肩から力を抜くと、力なく首を横に振つた。どうしてこんなことになってしまったのか。

あとは彼と関わるよになつた自らの不運を呪つ」としか出来なかつた。

いつも必要なことは言ってくれないのね。

結局その後、仕立て上げる予定のドレスにバックや靴を合わせ、その他の小物類も揃えて店を出た時には、周囲はすっかり夜の気配が満ちていた。

では、今は用が昇り、青白い光を地上に落としている。凍てつくといつほどの寒さではないが、吐く息がかすかに視界を曇らせる。

あれから更に生地を選び、やはり採寸をしておいたりという段になると、田の色を変えた店員たちに着せ替え人形よりしきいよつて弄ばれることとなつた。

Nº 44

もはや最後の方には抵抗する気も起きず、どうせ勘定にするべてローン持ちならば好きにしてくれと諦めの境地に至つた。これだけの買い物が、仕事どどのような関わりがあるのか考えただけでも恐ろしい。一体、どんな仕事をさせようとしているのか。

王宮へと続く中央通りには等間隔にガス灯が灯り、人通りもほどんどない。周囲を見渡すとちらほらとそれらしき気配を感じて、ユーフェミアはリオンの回してきた馬車に早々と乗り込んだ。今更乗合馬車で帰ろうなどとはもちろん思わない。

進行方向を背にして座ると、昼間とは違つて隣にティーンが腰を下ろしてきた。一人が並んで座つても余裕はあるのだが、向かい合わせの席は荷物が置いてあるわけでもなく空席だ。訝しむようにして隣を見ると、ティーンは肩をすくめて「彼」の存在を口にした。

「隣り合つなら女性の方がいいだろ?」

「どこまで本気なのか。

あいにくコーフニニアには「彼」を見ることは出来ない。だからディーンが本当の事を言っているのかどうかも分からない。たまに気配を感じる」とはあるのだが、いくら田を凝らしてもやはり見えないのだ。

「彼」について「ディーンから聞いた話によれば、いる時もあればいない時もあるらしい。昼夜関係なく現れ、場所にこだわることもなくコーフニニアの側ならこうしてクライントンにまで付いてくる。決して書をなすものではなく、普通の靈と少し違い、ただ側にいるというのだ。

ディーンは気にする必要はないと言つたが、そう言つた彼自身がいつもして避ける態度を取つているとやはり気になってしまつ。

それにどうして見ることが出来ないのだろうか。感覚は昔に比べると強くなつていてるといつうのに。

眉間に皺を寄せて「彼」がいるだらう場所をじっと見つめていると、隣から小さな笑い声が降つてくる。

「睨まないでくれ、つて言つてこるけど?」

「……別に、睨んでなんか……」

このまま「彼」について考えても何がが分かるわけでもない。詳しいことはディーンも話さないし、彼らと関わることがいいことだとはコーフニニア自身思つていない。

取りあえず当面の問題を片付ける事が先だらうと、気を取り直して、それよりも、と先程ディーンが店内で話しかけたことを口にする。

「あれはどつこつ」となの? 仕事つて言つていたけど何をやるつもり?」

勝手に仕事を引き受けたことについては、本来コーフニニアの知つたことではない。

ディーンと交わした契約にしても、主に筆跡に係わることについてだ。当然、今までの写字の仕事から、ディーンの仕事関係で筆跡を必要とする書類の作成も含まれている。だが、それのどこにどうレ

スを身に付ける項目があつただろうか。

雇い主である以上、多少のことなら目を瞑る覚悟もしていたのだが、この度、桁違いな金額が動いたことについてゴーフェニアは納得していない。

先程の店で用意された布地は、極上の手触りのものばかりだ。繊細で緻密な模様に編み上げられたレースは、一体いくらするのだろう。レースに憧れない女性はいないと言われているが、もちろんゴーフェニアも例外ではない。あまりの素晴らしい出来栄えに、あの瞬間目も心も奪われたが、実際に似合つ似合わないは、また別の話なのだ。

隣に座つた男は、視線を正面に向けると珍しく困つたように息を吐き出した。その紺色の瞳は周囲に同化し、完全に夜の色を湛えている。

「仕事つていうか……まあ、きみにとつては仕事だと考えた方が納得できると思ったからそう言つただけなんだが……。昼間に会つたジユリアのことは覚えているかい？」

「ええ、イヴァンジエリンに似た彼女ね」

確認すると、ディーンは一つ頷く。

「彼女からの招待で、きみを是非に、と言われたんだよ」

「……招待？」

あまり面白くない方向に話が進みそうで、自然と声が落ちた。おそらくジユリアは貴族だ。ディーンの話しぶりからすると、同じ貴族でもかなり気を使う相手だということが窺える。ゴーフェニアが貴族と関わりを持ちたくないことは、彼自身が身をもつて知つているはずだ。だからあえて仕事だと言つたのだろうか。

いつもの軽さがなりを潜めている態度に、取りあえず耳を傾ける。

「彼女は時々コックス地区にあるベレスフォード邸で過ごすのだが

「ああ、ベレスフォード邸というのはね、王弟殿下にあたるフラムステイード公爵の別邸になるんだ。だけど、旅行好きな公爵は滅多にその屋敷に帰つてくることがなくてね。ジユリアは公爵に縁の

ある人だから、時々息抜きにベレスフォード邸を借りてているんだよ

最初こそあまりにも雲の上の人との話に息を止めてしまったが、

ディーンの説明に、知らず力の入っていた身体から力を抜いた。

もしも王弟殿下に会わなければならないなら、断固拒否しようと

思っていたのだが、どうやらその心配はなさそうだ。いや、ただの

庶民が会えるはずはないのだが。

「彼女はなかなか外出のままならない身でね。ベレスフォード邸で過ごす時だけが唯一の自由な時間と言つてもいい。だからその時間を、是非きみと過ごしたいそなんだ」

つまり、ジュリアがその屋敷で過ごす数日間、彼女の相手をする仕事、ということなのだろう。

聞いただけではそれほど難しいことのようには思えない。確かに相手が貴族の令嬢ならば気を使うだろう。しかしジュリアに関して言えば、わずかな時間しか話さなかつたのではつきりとは言えないが、彼女の人間性にそれほど問題があつたようには思えない。

それにコックス地区と言えば、バルフォアとクラiftonを結んだ街道から少し東に向かった場所だ。ほぼクラiftonの外れと言える。それほど遠出にならない距離に安堵する。

しかし、公爵家の別邸とは……。

コーフェミアは思わず呻いた。

思つていた以上に、話は想像を上回つていた。

だがふとディーンの説明に矛盾を感じ、首を傾げた。

「でも、今日は」

街中で彼女を見たが、それはどういうことだろうか。

思わず口を挟むと、彼は困ったように笑つた。

「……それ以外は大抵、監視の目をかいくぐつて抜け出しているらしいね」

監視と言つ不穏な言葉とは裏腹に、昼間に出来つたジュリアは至つて普通の様子だった。落ち着き、逃げ隠れする様子もなく、ある意味彼女の容貌は人目を引いていたようにも思える。

あれが逃げ出した後の態度なのだろうか。

疑問ばかりが募つっていく。

ディーンの話からすると、かなり不自由な生活を強いられている気がするのだが。

「抜け出すつて、閉じ込められているとかじゃないのよね？」

「それはないが……なんて言つたらしいのかな。……常に誰かが側にいて、安全の為に行動が制限されているんだよ」

普通の貴族の令嬢というのは、そう言つものなのだろうか。

あまりにも違う生活環境に、思考が追いつかない。

「なんだか王女様みたいね」

まるで物語の中の話のようだ。非現実的過ぎる。

「……………」

ディーンも同調したものの、それでもまだどこか歯切れが悪い。

彼の整つた横顔を眺めながら、これはまだ何かある、と束の間口を閉ざした。

互いの間に落ちた沈黙は、馬車の車輪や馬の蹄の音でかき消される。

視線を窓に向けると、月明かりで微かに外の景色が見えた。

しばらくして、ディーンが諦めたように口を開く。

「実はいくつか問題があるんだ」

視線を正面に向けたままの彼は、珍しく言い淀んでいる。そんなに言ひづらうことなのだろうかと黙つてその続きを待つていると、ようやく夜色の瞳がこちらを向いた。

「おそらく、彼女の兄もやつてくるだろう」

それがどのように問題があるのか、コーエフミアには分からぬ。首を傾げると、ディーンは自嘲気味に小さく笑つた。

「会えば分かる。ただ……、私やジュリアを恨まないでくれたらありがたいな」

「なによ、それ……。さっぱり分からぬじゃない」

恨む前からすでに胡散臭い男を見やる。

ユーフェミアが軽口をたたいた為か、ディーンのまとう空気が柔らかくなつたような気がした。面白いものでも見るような田でこちらを見ている。

和らいだ空氣に、ならばついでとばかりに不満を口にする。

「それに、どうしてドレスをあんなに沢山買つ必要があるのか分からないわ。公爵様の御屋敷つて言つていたけど、格式ばつた場所だから？」

そのような場所に招待されること自体場違いだらう。出来ることなら辞退したい。

ディーンは悪戯っぽく笑うと、しつと言つてのけた。

「いや、今日はきみに不快な思いをさせてしまつたから、そのお詫びだと思つてくれないかな」

「お詫び？」

不快な思いならいつもしているが、なぜ今日に限るのだろうか。何事があつただろうか、とドレスを買つよりも前の出来事を思い浮かべる。

だが、これと言つて何かされたような記憶はない。

「……何かあつたかしら？」

首を傾げながら呟く。別にとぼけたつもりはなかつた。

ディーンはユーフェミアの態度に、盛大な溜息をついた。

「私がきみ以外の女性と連れ立つっていたのは事実だ。きみが怒つているのも無理もない。だけど彼女とは何でもないんだ。信じてくれないかな」

まるで浮氣をした男が必死に恋人、もしくは奥さんに釈明している台詞に聞こえるのは気のせいだろうか。

その上、わずかに身を乗り出すようにして、自らの潔白を切々と訴えかけているつもりのようだ。

信じるも何も、別にどうでもいいのだが。

「はいはい」

なげやりな返事に、切なげな表情をされた。どこまで本気なのか

しら、と呆れてしまつ。

「もう、いいわよ」

どうだつて、と続く言葉は飲み込んでおく。

これ以上、馬鹿げた会話につき合いたくない。

しかし。

「では、私の為に着飾つてくれるんだね？」

「は？」

耳に飛び込んできた単語に、ゴーフュニアは思わず目を開く。今の会話からどうしてそうなるのだろう。

馬鹿なことを、と呟みつゝしたが、声は口から出なかつた。薄闇の中、視界がディーンの手を捉えると、顔のすぐ前をかすめるようにして長い指先が、ゴーフュニアのほつれて落ちていた前髪をすくい取つた。横に滑らすようにして耳にかけると、今度は頬をかすめるようにゆっくりと離れていく。

一連の動作に、思わず息を止める。

「私も行くし……心配するほどのことはないかもしれないけどね」いつもより低く聞こえる声が、ゴーフュニアに不確かな感情を呼び起こす。

もしかして、本気で心配してくれているのだろうか。

「……さつぱり分からないわ」

思わず呟いた言葉を、苦情と聞きとつたのかどうか。どうやら彼の耳にはその言葉の意味が届かなかつたようで素通りされた。

「とにかく、きみは私の相手だけをしてくれていたらいいよ」臆することもなれば、それが当然という態度で口元をゆるめる。それはいつものことながら、うんざりするほど甘さを含んでいる。前言撤回だ。心配などやはり思い違いだつたようだ。

外の気温と同じほど冷ややかな眼差しと口調をまとつて、容赦なく突き放す。

「ジュリアからの招待なんでしょう？　どうしてあなたの相手をしなければならないの。それは失礼でしょう？」

たとえ何か問題があろうとも、こちらが出来る限り礼儀に則った態度を取つていれば、重大な問題が起ることは思えない。確かに貴族は苦手だが、招待主はジュリアだ。その兄に対しても、全く知らぬ存ぜぬで過ごすわけにはいかないだろう。

そう思つての発言だったのに、ティーンは心底傷ついたような顔をした。

「分かっているのかい？ ジュリアの招待とは言つても、遠まわしに彼女の兄 アシュレイにきみを紹介しているようなものなんだよ？ こんな役回りをする羽目になつた私をきみは少しも憐れんでくれないのかい？ しかも、きみが私以外の男をその瞳にうつすとと思うと、とても穏やかではいられないよ。もしもきみが彼に恋心でも抱くようなことがあつたら、私はきっと死んでも死にきれない」芝居がかつた大袈裟な台詞まわしに、逆に心の底が冷えていく。果たして、こんな嘘くさい台詞に騙される女性がいるのだろうか。だが、もしかしたらいるかもしれないと思うと、それはそれで止めを刺しておくる必要があるかもしれない。

「どうでもいいけど、死んまで私の前に出てこないでよね
死者になつた彼とまで関わるのはごめんだ。

冷たく言い放つたその一言に、ティーンは一瞬目を瞬いた。だが、苦笑すると軽く頭を横に振り、それからじばらくは口を開いたままだつた。

07・眼に掛け雁字擗めに束縛してある 後編（前書き）

ティーン視点です。

窓から入ってきた月の光を受け、鈍く輝く蜂蜜色の頭が不安定にくらくらと揺れていのを視界の端に止め、どうやら眠りの淵をさまよっているらしいと気づいた。

頭を引き寄せ肩にのせると、最初こそムツとしていたが、じばらくすると眠りが深くなつたのか穏やかな表情になる。

馬車の微かな振動が眠りを誘つたのだろう。

無防備にも寝顔をさらす彼女に、かすかな苦みが込み上げる。

確かにこんな時間まで連れまわしたのは自分なのだが。

二人の間にわずかにできた空間に、力なく落とされたユーフェニアの手を取ると、薄闇の中、指の一本一本を確かめるよつにたどつていいく。

身の回りのことを全て一人でこなしているため手は酷く荒れてしまっている。これではいくら着飾つたとしても彼女の身元を暴いてしまつだらう。仕事柄、指にできたタコは皮膚を固くし、本来なら細く美しい指であるにもかかわらず余計な装飾としてその見た目の邪魔をしている。爪も長くない。生活感に溢れた指先は、乾燥で皮が剥けて痛々しいほどだ。

自分の知っている人物とよく似ていながら全く違うその姿に、デ

ィーンは冷えたその指先を温めるように両手で包み込んだ。

それでも、ユーフェニアの幸せはそこにあるのだろう。

ふと先程立ち寄った店の店員たちの態度を思い出し、苦笑が漏れ

た。

なぜあれほどユーフェニアに親身だったのか。彼女は全く理解していらない。

当然、子爵^{自分}という後ろ盾があつたのも確かだ。だが、彼女が布を身に当たった時、今まで想像すらしなかつた姿が見えた気がしたのだ。日頃、その仕事を専門としている店員たちは言うまでもなかつた

のだろう。彼らが目の色を変えるほど、コーヒーミアは雰囲気を持つている。貴族よりも貴族らしく、ジュリアとはまた違った意味で存在感を放っている。

日頃からあまり着飾ることをしない彼女は、周囲に溶け込むように一見したところ田立たない。だがおそらく、彼女のもつている本来の美しさに一度気づくと、その透き通った輝きから目が離せられなくなってしまう。それは貴族社会に潜む穢れを知らないからこそ、その無垢な輝きなのかもしれないが。

そう考えて、苦笑する。

今から自分たちのすることは、コーヒーミアからその輝きを奪つてしまうことになるのかもしれない。

ジュリアとの計画をアシュレイに嗅ぎつけられたことは予定外だったが、彼女にとつてそれが吉と出るか凶と出るかは分からぬ。できることなら彼女ともう少し信頼関係を築いておきたかったのだが、このままだと彼女は逃げ出してしまうかもしれない。

それを、惜しい、と自分に思わせるほど、コーヒーミアの価値は稀少だ。彼女がもつと欲深い人間なら、もっと早い段階で目的を打ち明けることもためらわなかつただろう。

彼女はごくごく庶民的な小さな幸せしか望んでいない。それを思うと何も知らない彼女を巻き込むことが、彼女が本心から望むべきことではないかもしれない、何度も計画の白紙を考えそろになってしまったが。

思わず握っていた手に力がこもつてしまい、コーヒーミアが小さく呻いて眉根を寄せた。

目が覚めるだろうか、としばらく様子を窺つたが起きる気配はない。

頭を引き寄せた時、先程耳にかけた髪が落ちてしまったのだろう。額にかかっている長めの前髪を指でくい取る。柔らかい、絹糸のような髪だ。ほんの少し癖はあるが、それがコーヒーミアの雰囲気を随分柔らかくしている。

日頃の彼女は、年頃の女性が一人で暮らしている為か人一倍警戒心が強い。それが悪いとは思わないが、ただ、冷たい印象を与えるのだ。その上わざと人を寄せ付けないようにしているように見える。こうして寝顔を観察していると、決して彼女の顔 자체がきついわけではないのに。

眠っているのをいいことに、いつもは絶対に触れることのできない頬に手を伸ばす。甲で軽く撫でると、寄っていた眉根がゆるみ、肩にかかった重みで、身体の力が完全に抜けたことが分かった。その上呼吸も深くなり、再び深い眠りに落ちたようだった。

普段とはあまりにも違う様子に軽く目を瞠る。

この危機感の無さはどういうことだらうか。

日頃はあれほど警戒心が強いくせに、不用心にも程があるだらう。だが、考え方を変えると、多少なりとも信頼してもらつていると取れなくもない。もしくは、全く意識されていないか……。

自らの考えに、軽く失笑する。

断然後者だな、と一人納得をする。

決して自分は悲観的な方ではない。

意識されていないというのも、男として、という意味ではない。

コーヒーミアの中では、彼女は労働者階級、ディーンは上流階級という位置づけが明確に成されている。二つの階級は決して交わることはない、彼女は微塵も疑つていないので。

確かにこのままでは交わることは無いのかもしれない。だが、変えることができるのを彼女は気づいているのだろうか。

頬に這わせていた手の親指でゆっくりと彼女の唇をなぞると、まるで誘うように固く閉じていた唇が微かに開く。

どこまでも隙だらけなコーヒーミアに、軽い苛立ちを覚える。

ディーンはそれを、無防備な彼女が悪いのだと決めつける。

コーヒーミアの運命は、すでに動きはじめてしまった。いくら彼女が普通の暮らしを望んでも、もう彼女の望むように生きられない可能性の方が高い。今更どう足搔こうと、彼女自身に止めるることは

できないのだ。

ディーンもこの期に及んで彼女を憐むようなことはしない。そのような資格がないことぐらい承知の上だ。なぜなら自分もコーヒーミアの運命を動かす側の人間だからだ。

頬に添えていた手を滑らして顎を持ち上げると、軽く身を屈める。薔薇色の唇からこぼれ落ちる息は甘く、どこまでも自分を誘ひ。引き寄せられるように唇を重ねようとした時、足に軽い衝撃を受け、何かが転がったような音が聞こえた。視線だけ動かすと、足元には先程買い求めた手袋が袋のまま転がっていた。

まつたく。

小さく息を吐き出す。

すっかり忘れていた存在に、やむを得ず彼女から手を放す。正面に視線を向けると、空色の瞳と視線が合つた。

「……あなたのことをすっかり忘れていましたよ」

コーヒーミアには「彼」と説明をしている男は、小さく鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

滅多に話すことはないが、「彼」が何気に彼女を守つていては知っていた。彼女の周囲に集る害虫を、いつやつて追い払つようにな。

「わかっていますよ。彼女の了解がなければ手を出すなと言いたいのでしょうか？」

返事はなかつたが、文句もなかつたので間違ひではないようだ。やれやれ、と息をはぐ。

たとえ「彼」がいくら邪魔をしようとも、コーヒーミアのこの先の道は決まつている。そうなるように仕組まれているとも知らずに、彼女はこの手を取らざるを得なくなる。そして彼女も自らそれを望むだろう。それが彼女の最善の道なのだから。

ディーンは薄く笑うと、コーヒーミアの手に血の手を絡ませるよう握り直した。

『何ですって！？ ディーン様と泊りがけで旅行！？ 空気さえ切り裂くような悲鳴混じりの声に、コーヒーミニアは咄嗟に耳を覆つた。

夜半。

一階のソファでいつものように膝にリックをのせて話していたのだが。

少なくとも旅行なんて言葉、使ってはいない。そのような楽しげなものではないのだから。

もしかして彼女に話したこと自体間違いだったのかも、と軽く後悔する。しかしあとの祭りだ。

実際、ジュリアの招待で家を数日間留守にする事実は変わらない。店にある骨董品は、値段は分からぬがかなり高価なものに違いないく、もしも何かあつたならば、と考えただけでも血の気が引いていく。

店の前の通りは昼間であれば行き交う人も多いのでおかしな事をする輩はいないだろう。念のためケイトにも気にかけてもらうようお願いしているのだが、やはり夜は人目も少なくなるのだ。無難に彼らに頼むしかないとthoughtのだが……まあ、動けないのだから何も出来ないかもしれないが。

耳を塞ぐ為にリックから手を離してしたせいで膝の上から転がり落ちた彼はそれでも口笛を吹いてみせた。

『やるじゃねえか！』

「あ、あのね、そうじゃなくて……」

呆れ半分、恐れ半分に耳から手を外し、リックを拾い上げる。

イヴァン・ジェリン
人形には恐ろしくて視線を向けることはできない。だから手の中のリックを見つめていたのだが、彼女の方から怨みがこめられた歯ぎしりの音が聞こえてくるのは気のせいだろうか。

ぞわりと肌が粟立つ。

呪いの人形だと言つても過言ではないだろ？

『 そうじやないのでしたら、何だつて言つのですつー？』

金切り声を上げる彼女に、リックがこええ、と小さく呟くのが聞こえ、咄嗟にぬいぐるみの口を手で覆つ。今、そんなことを言つたら火に油を注ぐだけだ。

「だからね、ある貴族の令嬢に招待されて、彼女の相手をしに行くのよ」

本音はユーフェミアだつて行きたくないのだ。だが仕事なのだから仕方ないではないか。そのところを分かつて欲しいのだが、無情にもイヴァンジエリンは更に激怒する。

『 貴族の令嬢ですつて！？ まさかディーン様を狙う女狐ではなくて！？』

「あのね、招待されたのは私だから」

どうしてそう言つ話になるのだろうと呆れていると、逆に彼女は鼻でせせら笑つた。

『 あなたは本当に愚か者ですわ。将を射んと欲すればまず馬から、という言葉があるでしょ？』

イヴァンジエリン側の耳だけを押さえながら、それでいくと自分が馬になるのか、と何気にも思つ。

フツと笑みを浮かべ、取りあえず彼女の怒りを押さえることを考える。

どうして、いつも彼女に對しては悪戯心が沸き起つてゐるのか不思議なのだが。

「ねえ、もしその貴族の令嬢が本当に女狐だつたらどうするのよ？」
ニヤリと笑いながらちらりと横目で窺うと、微笑みを浮かべたジユリアによく似た 彼女が息をのんだ気配が伝わってきた。

『ディーン様が、そのような女狐に騙されるはずは.....』

「分からぬわよ？ ディーンも男なんだから、女の私から見ても、

可愛いつ、て思える女性から言に寄られたら悪い気はしないんじやない?』

コーエミアの言葉に、イヴァンジョンは黙り込んでしまった。あえてあなたに似た女性よ、とは言つてやらない。無暗に喜ばすようなことしたら最後、また延々とティーンの話をされそうだ。

彼女の身体から発する気配は未だ変わらず、何かを考えているのだけは窺える。

取りあえず大人しくなつたことをよしとしつつ、リックの口から手を除けた。

要は、二人のうちのどちらかに留守番の話が伝わればいいのだ。確かにリックでは心許ないが、言わないよりはマシだらう。ぬいぐるみを見下ろすと、コーエミアが口を開くより先に彼が話し出した。

『おいおい、大人げないな』

どうやら馬扱いされたことに対する意趣返しと思つたのだらう。中らすいえども遠からずだが、呆れた聲音に手の中を見下ろす。大人げないのはお互い様だ。

「年齢だけなら彼女の方が上でしょ? 」

いつだつたか聞いたことがある。

実際にいくつなのかは知らないが、五十年ぐらい前にこの街で
つた事件のことを^{リアルタイム}実時間で知つてているのだから違わないだらう。そういうリックも大して変わりはないはずだ。

『コーエミア』

と、そこにわずかに震えるような声が耳に届き、リックとの会話を遮られる。

これは相当怒つてゐるな、と思いつつ、無言で彼女の次の言葉を待つ。

『わたくしもその貴族のところに連れて行つて下さい』

珍しく謙虚な口調で、だが明らかに不本意そうな気配が全身を覆つていた。

「ええつ？」

『おい？』

戸惑つたリックの声に、我に返る。

まさかそう来るのは思わなかつたが、さすがにそれは無理だらう。ただでさえ、ティーンがあつらえたドレスが先日、山ほど届いたばかりだ。荷づくりも大変だと言つのに彼女を連れていく余裕はない。それに。

知らず口元が歪む。完全に心の中で楽しんでいた。

「ロジヤーも一緒だけどいいの？」

告げた言葉に、彼女は小さな悲鳴を上げて言葉を失つた。

「あれ？ イヴァンジェリン？」

様子を窺つよに名を呼んでみたが、返事はない。

どうやら完全に意氣消沈してしまつたらしい。彼女を覆つっていたピッピリした空気が完全に霧散してしまつていい。

さらに何度も呼びかけたが返事はない。

ちょっと調子に乗り過ぎてしまつたらしい。

表情が見えない分、手加減が難しい。

どうやらイヴァンジェリンの珍しいお願ひは、彼女にとつて本当に最後の希望だつたようだ。そこまでティーンに入れ込むなんて、ある意味奇特な人形だ。

可哀想なことをしたかしら、と多少の罪悪感を覚えていふといふに、手の中から溜息混じりの声が届く。

『おまえつて恐ろしい女……』

「ん？ 何か言つた、リック？」

口元だけで笑つてやり、手に少しだけ力を込めてみる。

こんな時だけ仲がいいのはずる。

リックは乾いた笑みをこぼし、殊勝な口調で言い切つた。

『……留守番の役目は受けたぜ』

つべこべ言わずに最初からそつとつておけばいいのだ。

聞いてない。

どうして一人の名前を聞いた時に思いつかなかつたのだろうとあまりの迂闊さに地団太を踏みたかつた。

とにかくこの場から逃げ出したい、というのがユーフェニアの本音だ。

まるで王女様みたいね、と言つた自らの言葉が頭の奥で反響している。もう少し真剣に考えていればこのような事態に直面しなくても済んだかもしねない。

知つていたら……当然仮病を使ってでも断つたに決まつている。

クライトンの外れに建つベレスフォード邸は、遠田からでもその大きさは見て取れた。

邸は、ゆるく弧を描いたギボン川からわずかに内側に入ったならかな丘の上にあつた。岸辺から邸まで敷き詰められた芝生は冬場でも枯れないのだろう。この灰色の景色の中、緑が一際目を引いている。

馬車には当然ディーンとユーフェニア、そしてゆるみきつた顔を隠そうともしないロジャーが乗つっていた。

この度の招待の話を聞いたロジャーは、今回の主賓がユーフェニアだと知ると、朝一番に骨董品店にやつて来るやいなや、土下座せんばかりの勢いで連れて行つてくれと頼み込んできたのだ。もちろんユーフェニアとしても知り合いは多い方が心強い。一つ返事で承諾すると、喜色を露わにしたロジャーは見るからに舞い上がり、今にもユーフェニアの手を取つて踊りだそうとしたほどだった。

まあ好きな女性に会えるなら浮かれるのも当然だろう。

一方ユーフェミアは準備をする段階になつてさえ、届けられたドレスが目に入るたびに複雑な心境に囚われていた。

先日、馬車でディーンから言われた戯言タコヤクさえなければ、ある意味ここまで抵抗はなかつたのかもしれない。

彼の為に着飾る。

もちろん、そんなつもりは毛頭ない。

常識として、贈られたドレスを贈つた本人の前に着て立つという行為がどれほど勇氣のいることか。それが恋人とか家族なら意味のあることだと思うのだが、しかし相手はディーンだ。彼の本心がいまいち分からぬ上、ユーフェミアとしてもディーンのことは雇い主以上の感情は生憎持ち合わせていない。

よくよく考えれば、ドレス自体受け取るいわれもなかつたのだが、自分に合わせてあつらえたと思うと、悲しいことに貧乏人の性か、今更返すのも勿体ないという思いの方が先に来てしまつたのだ。我ながら現金なのだ。

悩んだ末、かなり不本意ではあつたが、その中でも最も大人しい色で、なおかつデザインも大人しいものを選んだつもりだ。これはドレスではなく仕事着だと言い聞かせながら袖を通してみたものの、襟元や袖口にあしらわれたレースをどこかで引っかけないかと気がはなかつた。こんなにもひやひやする仕事着は本来有り得ない。しかしいざ着てみると、浮き立つ心は押さえられなかつた。新しい、それも今まで着たこともないようなドレスだ。髪もいつもとは違うようにもつとお洒落に結い上げてみたくなるのが女心と言うものだろう。ちょっと試しに編み込んだりしてみたが、途中で鏡をのぞいて早々に諦めをつけた。結局どんなに着飾つても鏡の中の自分が急に美人になるわけではないのだから。

ベレスフォード邸に着くまでの約一時間。ある意味、地獄だつたと言つてもいい。

ロジャーは蕩けきつた顔のままジュリアの素晴らしい会える喜びを語り、ディーンもユーフェミアが着ているドレスを見て嬉しげ

に頬をゆるめると、終始賛辞の言葉を述べていた。

何の拷問だ、と思いつつ、当初は気乗りのしなかつた今回の招待も、むしろ早く目的に着かないかと思わずにはいられない程だった。

しかしジュリアの出迎えでベレスフォード邸に踏み入った時から、ユーフェミアははつきり言って、男一人の存在を完全に忘れ去った。そこは紛れもなく非日常の世界だった。

目に入るものすべてに圧倒された。

今まで仕事で貴族の邸に足を踏み入れたことは何度もあったが、大抵が玄関入ってすぐの広間までだった。それでも今まで見てきたどの邸とも違う。物の良し悪しは分からぬが、細部にわたる細工の一つ一つから違う。

床は白と黒の一色で幾何学模様が描かれ、目の錯覚だろうか。見た目よりも奥行きを感じる。左右の壁はシンプルに白一色。しかし壁際には古の神々らしき彫像が飾られ、全体的に上品で、派手さがないぶん纖細さが際立つ。天井も白一色。しかし小さな浮彫が描かれ、窓から入ってきた明かりがそこに陰影を出し、その緻密さがくつきりと浮かび上がる。

ありとあらゆる物に目を奪われるユーフェミアにジュリアは一つ一つ丁寧に説明をしてくれながら 半分以上よく分からなかつたが 居間への扉をわざわざ開いてくれて、さらに中へと促した。

一步踏み出したユーフェミアは、思わず目を見開かずにはいられなかつた。

どのように表現したらいいのだろうか。今までのシンプルさと違つて、彩りが目にも鮮やかだつた。

床は顔が写るのではと思えるほど磨かれ、壁に添うように天井まである丸みのある柱は、緑がかつた大理石だ。部屋の中央には、深みのある艶やかな光沢を放つ木製のテーブルとソファが置いてある。本当にここで人が暮らしているのだろうか。あまりにも日常からかけ離れ過ぎていて、まるで別世界へと迷い込んだような気分にな

る。

店にある骨董品が高級品だと思っていたが、いつして見ると確かにあれは骨董品だ。良質なものではあるだろうが、目の前の部屋に置かれている家具と比べるとその差が歴然だ。

ただもう溜息しか出でこない。

あまりにも見惚れいで、だからそこに先客がいることに気づかなかつた。

風景の中に溶け込むように、男はくつろいだ格好でソファにふんぞり返つていた。

まだ若い。ジュリアとたほど変わらないように見える。しかし、男と視線が会つた瞬間、ユーフェニアは思わずたじろいでしまつた。

何なの……。

最初に湧き上がつた感情は不快感としか言いようがなかつた。無遠慮に見つめてくる眼差しは、こちらが気づいたからといって逸されることもない。表情さえ変わらないことに、次第にそれは恐怖へと変わつていいく。

だがすぐに、その瞳に蔑みが含まれてゐること気づいた。冷ややかで遠慮がない。上から下まで一通り眺め、目を眇めた男から突き刺さすような敵意を感じ、ユーフェニアは思わず一步下がつていた。珍しい淡褐色（ヘーゼル）の瞳をした男は、身動きの出来なくなつたユーフェニアを見て、やつと表情を動かした。それは嘲るような暗く濁んだ笑みだつた。

「何を突つ立つてゐるんだ。もしかして挨拶の仕方も分からぬのか？」

眼差しと同じく冷ややかで、どこまでも高慢な物言いに、まさかと思う。

思い当たる人物は一人しかいない。これが話に聞いていたジュリアの兄なのだろうか。

ならば挨拶をしなければならない、と頭では思つものの、上から

押さえつけられるような圧迫感に喉元が締め付けられる。

「あ、の」

ふいに、かつて母と訪れた屋敷でよく向けられていた視線を思い出した。当時は母の背に隠れてやり過ごしていたが、今は遮るものがない。

見下げるような、馬鹿にするような、虫けらを見るような眼差し。どうしてそんな目で見るの、という疑問と、とにかく早く何か言わなければ、という思いで気ばかりが焦る。だが焦れば焦るほど言葉が出てこない。

拳銃、息苦しさまで感じてしまい、じわりと嫌な汗が全身に滲んだ。

部屋の外でディーンと何かを話していたジュリアが、よつやく異常に気づいたのはそんな時だつた。慌てたように部屋に飛び込んでくると、すぐに事態を察したのか一人の間に立ち塞がる。

「アシュレイ兄さま！ ここで何をなさってるの！？」

ジュリアが庇うように一步前に出てくれなければ、コーフェニアはもしかすると倒れていたかもしれない。極度の緊張のあまり、知らず息を止めていた。

華奢な身体が視界を遮ると、止まっていた時が動き出す。気づくと、全身が小刻みに震えていた。

正直、恐ろしかつた。まさかあのような視線に再び晒されるとになるとは思いもしなかつた。

何とか息を整えると、意識を正面に向ける。だが、ふいに肩をつかまれハッとした。背後を振り仰ぐと、そこには真剣な顔をしたディーンが立つていた。視線はジュリアを越え、ソファに向けられている。

「もう到着していたのか」

「なんだ。いたら悪いのか？」

男は余裕のある口調で、十分過ぎるほどの刺を含ませていた。

「もう、兄さまっ。いい加減になさつて！ それが初対面の女性に

対する態度ですの！？ そんなどから女性にモテないのです！」

腰に手を当てて堂々と言い放ったジュリアに、場の空気がふと変わった。わざとなのか、どうなのか。目の前にはジュリアの背中がある為、彼女の兄 アシュレイがどのような表情をしているのか分からぬ。

最初から機嫌が悪かったのかいつもなのか知らないが、もつと不機嫌になってしまったのではないだろうか。いくら妹でも、今のようないい方をされたらやはり怒ってしまうだろう。

もしもユーフェミアが男でジュリアにこうもはつきり言われたら逆に落ち込んでしまうかもしれないが。

内心ハラハラしながらアシュレイの出方を窺つていたが、心配は杞憂を終わった。

アシュレイの方から小さな溜息が聞こえると、ソファの軋む音をしてジュリアの向こうに立ち上がった彼の姿が見えた。

淡い金色の前髪を鬱陶しそうに搔き上げると、ゆっくりとテープルを回つてこちらに近づいてくる。

その動作はゆったりとしていて、こちらに向けられる眼差しは先程のような威圧的なものではない。いや、お互いに立つているからだろうか。正面から見ると、むしろ友好的にさえ見える。

先程の視線は思い違いだつたのだろうか。

アシュレイが立ち上がった時、思わず肩に力が入つてしまつたが、心配するほどのことはないのかもしれない。

じつとアシュレイの行動を目で追いつつ、彼が何をするつもりなのかそれでも身構えてしまう。目の前に立ち、正面から見下ろされ、こちらに差し出された手が何を意味しているのか分からず困惑するし、さらに一步近づいた彼に、右手を取られた。

「はじめまして。アシュレイだ」

横柄な口調は変わらないものの軽く頭を下げた彼は、そのままコーフェミアの右手を自分の唇に引き寄せた。目でそれを追いながら、思わず悲鳴を飲み込んだ。

持ち上げられた指先に込められた力は、手を取る、といつようなものではなかつた。まさに押し潰すといつ言葉に相応しく、骨が軋みを上げる。

ゆつくりと離れていくその淡褐色の瞳をただ、息を殺して見つめた。

上流階級の挨拶など、知らない。どうすればいいのか分からぬ。ただ、ジュリアの手前、騒ぐことなど出来なかつた。

「アシュレイ」

苦々しげな声が頭上から聞こえた。

その上、肩に置かれた手にかすかだが力がこもつたように感じた。もしかして彼は気づいたどうか。だとしてもジュリアの前で何も言つて欲しくなかつた。無用な心配はさせたくないなかつたし、何より初つ端から氣を使わせてしまつては先が思いやられる。

一方、指先に走る痛みの為、気づくと緊張は取れていた。おかげでやつと言葉が滑り出る。

「……はじめまして。コーフュニア・エヴァーツです。あの、この度は」「招待に預かり、身に余る光榮です……」

正直、なんて言つたらいいか分からなかつた。取りあえず教本通りの挨拶になつてしまつたが、貴族の邸に招待されることは、本音はさておき光榮なことには違ひないのだろう。

ジュリアもアシュレイの態度に満足したのか、今度はさつと彼を追い払いにかかる。

「もういいですわ。兄さまはどこの余所で過ごしてくださつね」

「何なんだ、それは」

「同じ邸に滞在するのに知らない殿方がいらっしゃるのは、コーフア姉さまが不安でしようから紹介しただけですもの。それに、いつまで姉さまの手を握つてらつしゃるの？ 過度な接觸は女性に嫌われますわよ？」

言外に紹介したくなかったと言つていいように聞こえた。しかも明らかにこの部屋から追い出そうとしている。だがそこには兄妹な

らではの気安さが窺える。

未だアシュレイに力を込められている手も早く放して欲しかったが、コーヒーミアとしては肩に乗った手の方も気になっていた。いつまで肩に乗せておく気だらうか。

ジュリアの台詞に素直に手を放したアシュレイとは逆に、やはりディーンは何時まで経つてもそのままだつた。ジュリアの言葉が聞こえなかつたはずはないだらうに。

アシュレイはぶつぶつと文句を言いながらも素直に居間から出ていく。どうやら妹には甘い兄の様子に、小さく笑う。アシュレイから取り戻した手を、空いたもう片方の手で握りながら。

ふと和んだ空気が漂つたところで、アシュレイが扉のところで足を止めた。何を思ったのかこちらを見て、コーヒーミアよりわずかに視線が上を向いているところを見ると、ディーンに用があるのだろう。人の悪い笑みを浮かべると静かに言った。

「そうだ、カーティス。あとで久しぶりにチエスに付き合え」

それは本当に何気だつた。

聞き覚えのない名前に目を瞬く。

ジュリアが表情を凍らせ、わずかに視線を揺るがしながらこちらを向きかけ、何とか思い止まつたことでそれが誰に向けられた言葉かを察する。

そして、アシュレイの勝ち誇つた顔。そこにある意図。遠ざかる足音に、今まで扉の外にいたのだろう。そつと顔をのぞかせたロジャーが恐る恐る口を開いた。

「ディーン様。あの、今の方はアシュレイ殿下でいらっしゃいますよね？」

ロジャーの放つた台詞に、心臓が大きく脈打つ。

ジュリアとアシュレイ。

この国に暮らす者なら知つていて当然の名前。まるで頭を殴られたような衝撃に、思わず足がふらついた。なぜ今まで気づかなかつたのか。

受けた衝撃の強さに思わず口を手で覆つと、呻くよつて咳いていた。

「王女…… わま？」

もしも背後にディーンがいなかつたら、その場にへたり込んでいたかもしない。腕を捕まれ、身体を支えられながら、それでも勇気を振り絞つてジュリアを見つめた。

気まずそうに視線をそらした彼女は、まるで叱られた子供のよう

に身体を小さくすると、ためらいがちに一つ頷いた。

「 黙つていい」「めんなさい」

謝られても、正直どうしていいのか分からなかつた。呆然とジュリアを見つめることしか出来ない。

名前を前もつて聞いておきながら、気づいて当然のことには気づかず、抜けているにも程があるではないか。この場合、むしろ謝罪しなければならないのは自分の方ではないのだろうか。

当然、ディーンやロジャーもジュリアが王女であることは知つていたはずなのに、なぜ何も言つてくれなかつたのか。しかも、先程の聞き覚えのない名前。明らかにディーンに向けられたものだ。

あまりにも知らないことが多すぎる。

現実を付けつけられ、今になつてやつと知らないことを甘受して

いた自分に気づくとは。

ユーフェミアが関わらうとしなくとも、相手が関わつてくる以上知らなかつたでは済まされない事態もこの先起ころかも知れない。まして相手がとんでもない人たちならなおのこと関係ないなどと言つていられなくなる。

先程アシュレイに取られた手を軽く握る。咄嗟に隠したが、鈍い痛みが走つていた。まるで本気で骨を砕こうとしたように込められた力は見事な加減で、ユーフェミアに何かの警告を告げているような気がした。

なぜこんな目に会わなければならないのか。

正直、貴族と関わるのは嫌だ。だが、この扱いはあまりにも馬鹿

にしそぎではないか。ジュリアにしても騙すつもりではなかつたのかもしない。だが、彼女が王女というなら、なおのこと知つていれば自然と自らに降りかかる火の粉を振り払えるかもしれない。

あまりにも打算的な考えに苦笑が漏れる。だけど。

ちらりと背後を振り返る。

今、身体を支える男だけはなぜだか許せない。話す機会も時間もいくらでもあつたのだ。どうして黙つていたのか。先程の名前が何なのか、聞き出して、絶対に耳にものを見せてやる、と密かに誓つたのだった。

ジュリアが王女であるとか、ディーンが嘘をついていたかも知れないという色々な葛藤はぱつさりと切り捨て、むしろ怒りを込めて目の前の王女を見つめた。

ジュリアはあの後ひたすら謝り続けた。王女らしさは微塵も見せず、むしろ普通の少女のようにユーフェミアの顔色を窺いながら説明をさせて下さいと言つてきた。

一方、当のディーンは何かをジュリアに小声で告げると、ロジャーを連れてさつさとその場から姿を消したのだ。事もあらうに王女であるジュリアに全てを押しつけて。

現在、場所を居間から移し、ベレスフォード邸の裏庭にある大温室にいる。

大、とつくだけあつてユーフェミアの家が何軒入るだらうというぐらいた大きい。天井部分の高さは、普通の家の三階はあるだらうか。白く塗られた骨組とガラスで作られた囲いの中は温かく、見たこともない植物に溢れていた。

状況がこのような時でなければ、ゆつくり見て回りたかったのだが、気分はそれどころではない。

温室の一角に設けられたベンチに腰かけて、隣に座る王女を見やる。

きゅっとスカートをつかみ、うつむき加減に思い詰めた表情で地面を見つめるジュリアを、王女さまと呼んだ方がいいのだろうかと迷う。逡巡した後、半分は嫌味を込めてそう呼ぶと、今にも泣きそうな顔をした彼女に呆気ないほど簡単にほだされてしまった。ずるい。

「ユーファ姉さまをこちらに招待したのは、実は折り入つて協力して欲しい事があつたからなのです」

目元に滲んだ涙を拭いながら、いきなり話し始めようとしたジユ

リアを慌てて止める。

王女からの協力を簡単に引き受けているとは思えない。王女という身分なら、どのようなことも簡単に出来てしまいではないだろうか。それなのにわざわざ庶民のコーフンニアに協力など しかも折り入つてとは怖すぎる。

じつと彼女の様子を窺いながら、まず確認させてもうひとつにした。

「私に？」

「はい」

「他の人じゃ駄目なの？」

聞きながら、何となく駄目だろうとこいつ予感はした。

「コーファ姉さまじやないと駄目なのです」

両手を胸の前で組むジュリアは縋るよじりを見つめる。潤みの残る瞳で、そのような表情をされると、無条件に何でも聞いてあげたくなってしまうではないか。

まずいと思いながら、慌てて視線をそらす。

王女に協力など庶民のコーフンニアが役に立てるわけがない。まず有り得ないだろう。それとも、これは命令なのだろうか。

ふと思いつき立ち、顔を上げる。

「拒否権はあるの？」

もじもないと言われようものなら、すぐにも退出をせてもうつもつりだつた。

「……無理強いは致しませんわ」

答えたその口調は硬い。表情も同様で、コーフンニアはしばらく考えた後、諦めて息を吐き出した。

「とりあえず話を聞くだけ。でもその前にティーンが先程呼ばれた名前と、あなたたちの関係について教えてくれる？」

どうしても王女である彼女に協力を乞われることに納得できなかつた。

しかしそれ以上に、彼らの関係は気になっていたのだ。子爵であ

る彼と、王族である彼女たち。気軽に名前を呼びあう関係は、親密さを窺わせる。

「一体、どのような知り合いなのか。聞きたくはないが知ると決めたのだ。巻き込まれるなら知つておいかなければいざという時逃げられない。」

ジュリアは少し考えた素振りを見せた後、口を開いた。

「……話はとても複雑なのです。すべて繋がっていると言つた方がいいのですけど……分かりました。ユーファ姉さまがディーンと呼ぶあの方のことからお話します」

空色の瞳の色を濃くしたジュリアに、ユーフェミアは頷いてみせた。

「つまり、彼の本名はカーテイス・ディーン・ラムレイで間違いないのね？」

口に出して彼の本名を辿つていく。それはとても奇妙な感覚だった。名前一つの事なのにすぐ遠い人に感じてしまう。

胸に生じた違和感に首を傾げつつ、やはり嘘をつかれるのは気分のいいものではないからだと認識する。騙されていたと一度感じてしまつときつと些細なことでも彼を信用出来なくなる。仕事のことを考へると、やはり信頼関係が崩れるのは良くないだろう。

しかしよく考えてみれば、イヴァンジエリンやロジヤーが彼をためらいもなく、まして言い間違える事もなくディーンと呼んでいたのだから嘘ではないことぐらい分かつて当然だつたのだが。

ジュリアの話によると、ディーンはラムレイ家に養子として引き取られたらしい。とは言つても、彼と養父とは血の繋がりがあり、ディーンの実母の兄がその養父にあたるという。養父 つまり伯父から「えられた名前が、カーテイスというものだったのだ。

どういう理由から名前を使つていいのか。それはジュリアにも分からぬらしい。ただ察するに、貴族社会ではカーテイスを名

乗り、商売をする場では「デイーン」で通しているのではないか、とのことだった。

だからジュリアやアシュレイがカーテイスと呼ぶのも間違いではなく、コーエミアが「デイーン」と呼ぶのも間違いではないのだ。

さらにジュリアは説明を続けた。

「カーテイスは兄の遊び相手として王宮によく連れて来られていたのです」「アシュレイ殿下の？」

「いえ、もう一人の兄、ブライアン兄さまのです」「つまり、王太子、ということか。

遊び相手という事は、子供の頃からの知り合いなのだろう。

「幼馴染？」

王族に対してその言葉が適切なのか迷つたが、ジュリアは頷いた。「わたくしやアシュレイ兄さまにとつて、カーテイスは兄のようなものなのです」

そう言いながらも、ジュリアの瞳に影が走つたことにコーエミアは気づかなかつた。

ただ、今回のこの場で、彼の立場を追々説明するつもりだつたらしい。最初からコーエミアに気まずい思いをさせるつもりではなかつたのだとジュリアは何度も繰り返した。

それには少々面食らう。

別に気まずい思いはしていないし、デイーンが何かを隠していることは分かつていたので、そこまでのショックは受けなかつたが。

……ショック？

それはない、と軽く頭を横に振る。

そんなコーエミアの行動に、ジュリアは怪訝な顔をする。それにもまた頭を横に振り、ショックでないなら何だろう、と考える。胸の中に湧き出すこの感情はどこか後ろめたい何かを訴える。えて名前をつけるとするならば、それは多分、デイーンに対する罪悪感だ。

知らなければならぬと思つたのは確かだつた。

だが単純に知つてやうつと思つた自分はなんて凶々しい人間だつたのだろうとも思う。彼が本名を告げないことに、知られたくない理由がそこにあるとなぜ考えなかつたのか。

実際にジュリアがその背景にある事情を話してくれたわけではないが、彼女の口ぶりから何かがそこに見え隠れすることぐらいユーフェミアにだつて分かる。どうして伯父に付けられた名前を厭うのか。もちろん、單なる想像でしかないが。

もしかしたら立ち入つたことを聞いてしまつたのかもしれない。

知るという行為は、相手に踏み込むということだ。彼らの内面に関わり、相手に対する責任も生じてくる。不用意な発言をしたとしても、知らないからこそ許されることもあり、知つていて見て見ぬ振りをするなど、單なる好奇心を満たした結果でしかないだらう。そう考へると、ユーフェミアが自らの為に相手を知ろうとしていることは、とても無責任なことなのではないのだろうか。

必要以上にユーフェミアに踏み込んで来るティーンは、黙つていることはあつても多分嘘をついているわけではないのだろう。ある意味、誠実とも取れる。では、自分はどうだらう。彼らのことを知つても逃げ出さずに正面から向き合つことが今後もできるのだろうか。

思わず口を片手で覆うと、無理かも、と呟く。

正直、自信はないし、知ることに対しても途端に気が引けてしまう。

自分はティーンに対して無関心でもあつたが、知らないことを薦に来て、彼の好意に甘えていただけのよつたな気がする。

そう考へると、確かに気まずい。

沈んでしまつたつもりはなかつたが、黙り込んでしまつたユーフェミアを気づかい、ジュリアは話を打ち切つた。

「着いて早々にこんな話をしてしまつて、お疲れになりましたよね？」

本当はまだまだお話しそうはあるのですけど……時間はま

だることですし、お部屋にこ案内しますわね

心配を表情に滲ませるジュリアは、先に立ち上がるビエンチに座つたままのコーヒーミアに手を差し伸べた。

まるで立場が逆転したその行動に、なぜだか苦笑が込み上げる。

「王女さまって、もつと高飛車なのかと思つてた」

彼女の手を握りながら立ち上がると、大きな目を更に大きくした彼女がすぐに笑みを深くした。

「そんなことないですわ。わたくしだって分をわきまえておりますのよ?」

「分をわきまえるつて?」

コーヒーミアが目を瞬かせると、耳元に唇を寄せ、小さく呟いた。

「これでも失恋したことだつてありますよ」

そう言つて、悪戯っぽく笑つてみせる彼女に、もつその残滓は見えない。それはすでに過ぎ去つたものなのだろうか。

確かに痛みを知つたからこそ学ぶこともある。それは、コーヒーミアにも心当たりがある。

だが、恋愛に関してジュリアは別だと思つていた。世の男が彼女を前にして彼女からの好意を断るなど考えられない。どう考えても断るのは彼女の方だろう。

「もつたひないわ。ジュリアを振るなんて。その人は見る目がないわ」

心からの呟きだが、ジュリアは首を横に振つた。

そして静かな目をすると、その人のことを思い出しているのか、とても大人びた顔を見せた。

「彼の心にずっと誰かがいたことは知つていましたわ。もちろん権力で彼を縛ることも可能でしたけど、それでは残るのは虚しさだけですわ。それはわたくしの望むものではありませんもの。それに、王女であるわたくしを正面切つて振つたのです。大した人物だと思いません?」

だから彼に恋をした自分の目は確かだつたと、彼女は高飛車に言

つて見せた。それは強がりだと分かつてしまつたが、ユーフェミアは素直に頷いた。

しかし彼女は突然何かを思いついたようにパッと顔を輝かせると、今度はユーフェミアの手を引いて再度ベンチに腰を下ろす。

「次はユーファ姉さまの番ですわ」

「はい?」

彼女につられて座りなおしたが、意味が分からず問い返すと、ジユリアは興味津々といった様子でこちらに身を乗り出してきた。

「わたくし、憧れでおりましたの。女同士での恋の話!」

「ええつ!?」

突然のことに、視線が泳ぐ。

人に話せるような恋愛経験は、はつきり言つてしていない。二十五にもなつて、だ。

笑つて誤魔化そうとしたが、彼女の瞳に宿る期待の強さに、がくりと項垂れる。

まさか王女さまとこのような話をする破目になるとは。

もう一度、ちらりとジユリアの顔を窺つたが、にっこりと笑いながら今か今かと待つている。

これは話さなければ納得しないだろう。それに、王女さまの失恋話を聞いて、ユーフェミアが話さないのは公平ではないような気がする。

深々と溜息をつくと、一応念を押す。

「面白い話ではないのよ?」

「人の経験談は勉強にもなりますわ」

からりと告げられ、覚悟を決める。

本当に、面白い話ではないのだ。

「十八歳の頃よ、その人と出会つたのは、その頃、私は職人としてまだまだ駆け出しで、仕事も全くなかったわ。でもね、本を作る過程つて沢山の人が関わっているのよ。伝手を頼つてどうにか仕事を回してもらつたりしていたの。彼もそうだった。画家の卵で、

画家としてまだ身を立てられないから、写字をした後の装飾を請け負っていたのね。仕事の流れから、私と彼はよく会うことが多くつたのよ。」「

そこまで喋つて、一息をつく。

今では完全に過去の話なのだが、話し出すとあの頃のなんとも言えない甘酸っぱい感情を思い出す。

「何となくなんだけど、もしかしたらこの人と将来は結婚するかもしれないと思つていたわね。決して燃え上がるような想いだつたわけではなかつたけど、とても居心地のいい関係つて言えばいいのかしら。一人でいると落ち着けたわ。だけど一年が過ぎた頃、あの人の画家としての才能を認める人が現れたの。その人に彼は留学を進められて それで、おしまい」

「え？」

あまりにも呆氣なかつたのだろう。きょとんとしたジュリアに、軽く笑つて見せる。

「別に勉強にもならない話でしょ?」

忘れたつもりだつたのだが、未だに苦い思いが込み上げてくる。本当はまだ続きがあるので。

互いに待つとも待つてくれとも言わなかつた。勉強する彼の邪魔にはなりたくなかつたし、その頃からナフムの体調が思わしくなかつたからだ。ただ、彼が出立する時、待つのが当然のような雰囲気だつた。最初こそ手紙のやり取りはしていたが、次第に疎遠になり、ユーフェミアもナフムの看病の為にそれどころではなくなつて、気づいた時には彼が帰つてくるはずの三年はとうに過ぎていた。

帰つてきたとの連絡もなく、突然街中で再会した時、彼の傍らには彼の子供を抱く女性がいた。その時、完全に終わったのだと気づかされた。

決して聞いていて気分のいい話ではない。後学の為に」という彼女に、わざわざするような話ではないだろう。

もしも、この先彼女が同じ状況になつた時、不安を煽るだけだ。

とは言つても、王女さまにそのような状況がくるとは思えないが。

「ユーファ姉さま？」

心に湧き出してきた痛みを隠すように、先にベンチから立ち上がると、今度はユーフェミアが彼女に手を差し出す。

「部屋に案内してくれるのでしょ？ どんな部屋か楽しみだわ」半ば強制的に話を打ち切る。

ジュリアはどこか納得がいかない様子だったが、ユーフェミアの態度に何を感じたのか。諦めたように手を取ると、立ち上がった。そして笑顔で爆弾を落とす。

「分かりましたわ。案内します。ですけど、私の部屋の隣とカーテイス様の部屋の隣。どちらがよろしくて？」

さらりと笑顔で言つたジュリアに、当然、彼女の名前を告げたのだった。

ジュリアが王女だと知り、呆然としてしまったコーエミアをジュリアに任せた後、ディーンはアシュレイの後を追うように居間を出た。

彼がいるだらう部屋に日曜をつけ、扉を開けたその場にまるで待つていたかのようにチェス盤を前にして座るアシュレイに厳しい眼差しを向ける。

「彼女に何をした？」

挨拶の為にアシュレイに手を取られたコーエミアの肩が、ある瞬間強張つたことを彼女の肩に置いたこの手が感じ取つた。

コーエミアは咄嗟に空いた片方の手で隠していたが、その指が赤みを帯びていたのを日に留めた時、彼女にとつてやはり思わしくない事態になつてしまつたかと、わずかばかり気が咎めた。

「何をしたつて？ 挨拶だらう」

悪びれもしないその口調に、彼が幼い頃に偶発的に知つてしまつた件を未だ引きずつているのだと諦めに近い心境で再確認した。日頃の彼はもつと落ち着いているが、今は全身から刺々しいものを放つていて。

ジュリアでさえもう割り切つてしまつたというのに、ここまで引きずつているのか。

アシュレイの気持ちも分からなくはないが、今回のようなことを見逃すことは出来なかつた。これから先、コーエミアの協力を得る為ならば、わずかな障害でも取り除かなければならぬ。でなければ、今までの苦労が水の泡になる。

「挨拶で女性にあのような手荒なことをするのはどうかと思つよ。

弱い者いじめと変わらないだらう」

「ついたが入つてしまつただけだらう」

自らの行動を正当化するその態度に、ディーンは目を細めた。

いい大人になつてまで、まだそのような子供じみた言い訳をするのか。

「彼女のあの手は、彼女の生活を支える大切な商売道具だ。もしも使い物にならないようなことになれば、あなたはその手で一人の国民の生活を壊したことになるんだ。人間としてあるまじき行為だと思わないのか？」

王族だからといって、何をしても許されるわけではない。

女性が一人で生活をしていくのがどれほど大変なのか。ユーフェニアを見ていたらよく分かる。それに彼女が培つてきた職人としての経験が役に立たなくなつた時、彼女の矜持など脆く崩れ去ることなど目に見えている。その時、彼女はどうやって生活していくのか。労働者階級からさらなる低みへと落ちるしかない。

もう少し自分の立場を深く考えてから行動して欲しいと、常々この第一王子に対しては思う。

彼女が筆跡を生かす仕事をしていることぐらい知つてはいるのだから、考慮に入れてもいいはずだ。どのような理由があるにしても一人の生活を　　国の基盤を支えている彼女たちの生活を、王族や貴族が脅かすことがあつてはならない。

アシュレイはどうやらその言葉でやつとハッとしたように、悔恨を淡褐色の瞳に浮かべた。

こういう自らの非を認める素直なところは昔から変わつていない。ディーンは取りあえず、もう一釘さす。

「あなたも王族として、もう少し柔軟な考え方をするべきだらう。それと否定的な感情を剥き出しにするのは控えた方がいい。徒に敵を作りかねない」

それは彼女に對してだけ言えることではない。自らの些細な言動で、取り返しのつかなくなつた人間を幾人も見てきているのだ。

内心、彼女に對して少しでも風当たりが弱まれば、と思ったのは事実だ。自分たちの目的を知つてはいるアシュレイならば、この件に關しては遠まわしに自分が敵になる可能性もあることを告げたつも

りであったのだが。

しかし。

「確かに、私もあの女が生きることまで否定したいわけではない。
……分かつた。手荒な真似はしないよう気をつけよう。だが、私が
あの女を気にくわぬことに変わりはない」
きつぱりと告げるアシュレイの根は深い。これはまだ一波乱ある
な、とティーンは溜息をいほした。

恨まないけど、いたたまれない。

出来ることならアシュレイと顔を会わせたくないというのが本音だ。だが、同じ邸で過ごすからには不可能な場合もある。

それが食事時だ。

こちらは客であるため時間をずらすことも憚られる。ベレスフオード邸に仕える者たちからしてみれば、ジュリアやアシュレイも客であることには変わりはないのだろうが、彼らは王族だ。その王女からのお招待を受けたとはいえ、庶民のコーフェミアが彼女の兄と同席するのを嫌がるなど不敬極まりないことに違いない。

もしそれがたとえ不敬などと思われなくても、わざわざ時間をずらすなど、ベレスフオード邸に勤める彼らの仕事を増やすだけだ。それを考えると、コーフェミア一人が食事の間我慢すれば全て問題なくなるのだ。

力チャカチャと皿にあたるナイフとフォークの音が食堂に響く。いつかディーンと二人だけで開店祝いをした夕食とは大違いだ。食事のマナーは見様見真似でなんとかやり過ごしているが、ジュリアたちと比べると申し訳ないぐらいお粗末である。意外だったのはロジヤーだ。こういう場に慣れているのかコーフェミアほど手こずっているようには見えない。

手を休め、落とした視線の先はナイフを持つ手に向かう。

昼間、挨拶と称してアシュレイに力を込めて握られた指先を見下ろす。咄嗟にあの場の雰囲気を壊さないよう痛みを隠したが、しばらく赤みが残り、鈍い痛みもなかなか取れなかつた。今ではすでに落ち着き痛みもないが、そういう手荒な振る舞いが怖くないわけではない。

警戒心を持つて食堂に向かったが、しかし顔を合わせた時は意外

にも何もなかつた。

いや、なさすぎた。

無言で食事をするわけにもいかず、ジュリアの手前話しかけたが、とにかく無視された。それはいなにも同然で、慌ててジュリアが言葉を引き継いでどうにか会話を成立させる始末。

嫌われているという段階ではない。何か気に障るようなことした覚えもなければ、身分をわきまえていなから、といつ理由でもないのだ。

なぜならロジャーとは普通に会話をしているのだ。しかも談笑までしている。笑っているのだ。

これにはさすがに絶句した。

それ以降、コーエミアは食事に専念することにした。

見たことも味わったこともない料理の数々だ。この際、嫌なことから目を背けても誰も文句は言わないだらう。さすが公爵家、と内心褒めそやしながらとにかく料理に舌鼓を打つ。

ちなみに、もう一人の人物については、コーエミアは完全にアシュレイと同じ態度を取っている。

話しかけられてもいも同然。

別に怒っているわけではない。

ジュリアから聞いた話を、少し心の中で整理する時間が欲しいのだ。

この状況に置かれてもなお、コーエミアは一步を踏み出せない。自分でも何を恐れているのだろうと思うぐらいだ。

考えられるのはジュリアが言っていた、話は複雑で全てが一つに繋がっているということ。それが、コーエミアでなければ彼女に協力できないということ。

とても嫌な予感はする。

知らなければ火の粉を払えないと思ったが、きっと知つてしまつたら泥沼から抜け出すことさえ出来なくなってしまう。

そんな予感だけは人一倍強く感じる。

きっとティーンもそれに関わっている。彼のことを知ると嘆つことは、必然的にジュリアの目的に近づくことだ。

取り留めもないことをぼんやりと考えていた為、完全に手が止まつていた。正面に座るティーンがこちらを見て何かを言いたそうな様子に、諦めて息を吐く。

「何？」

視線を合わす勇気がなく、葡萄酒の注がれたグラスに手を伸ばす。あまりお酒を飲んだことはなかつたが、思ったよりも飲みやすく、頭の奥を麻痺させる感覚が、不安な感情を鈍らせる。

「いや、少し飲み過ぎのようだけど、そろそろ違う飲み物にした方がいいんじゃないかな？」

心配する素振りに、カチンとくる。一体、誰のせいでこんなにも不安定な状況に陥つたのか。

「あなたに心配」

「カーティス！」

いわれはない、と続けようとしたが、かぶせるように遮られ、またですか、と苛立ちが増す。

先程からジュリアやロジヤーと話そうとするたびに、アシュレイが割り込んで来るのだ。相手が王子だと思いつと譲るしかない。どういう嫌がらせだ、と思いつつ口を閉ざした。それがアシュレイの思惑だと知りつつも。

給仕が空になつたグラスに葡萄酒を注いでくれ、コーフェミアはためらいもなく喉に流し込む。

鼻に抜ける香りはかすかに果物の甘さを残し、ささくれ立つた感情をやわらかく包み込むと、同時に愉快な気分にしてくれる。

「コーファ姉さま、大丈夫ですか？」

目を丸くしたジュリアが、隣から心配を滲ました声を掛けてくる。

「ふふ……。美味しいわね、このお酒」

胃の中も熱いが、頬も熱い。

これが酔っぱらうということだらうか。マナー違反かもしない

が、少し席を外した方がいいような気がしてジュリアに断りを入れた。アシュレイの視線が痛すぎて、いたたまれない。これは今後の対策を練らないと、と思いつつ席を立つ。

が、ふわりと視界が揺れた。

軽い眩暈のような感覚に、咄嗟に椅子の背もたれをつかむ。これは、まずい。

軽く息を吐くと、出来るだけ何事もなかつたように背筋を伸ばす。いくらいたたまれないからと言つても、お酒を飲み過ぎて失態を犯すのは、アシュレイに更なる弱みを見せることになる。なんだかそれはかなり腹立たしい。

可能な限り真っ直ぐ歩く努力をしながら、コーヒーフェミアは食堂から事実上、逃げ出した。

しかしながら、食堂から出るとすぐに壁に手をついた。

思ったよりも目が回る。

今はまだ気持ち悪さはないが、きっと動くと酔いが回つて気持ち悪くなるだろう。

そのまま壁に寄りかかり、軽く息を吸い込む。

食堂の外は空気が冷え、熱くなつた頬に心地いい。

「馬鹿みたい……」

ぱつりと呟く。

何の為にここに来たのか。単にジュリアの話し相手ではなかつたのだろうか。

だが、実際に来てみたら彼女の兄には嫌がらせを受け、ジュリアやディーンも何か疑惑があつて今回の招待を画策したようで、居心地が悪い。

本音はもう帰りたい。

貴族は嫌いだ。関わりたくない。

だけど、ジュリアは嫌いにはなれない。何かに利用しようとして

いるのかもしぬないが、彼女から向けられる気持ちは偽りではない。純粋に慕ってくれていると信じたい。

吐く息が酒臭く、最悪だ、と呟いた時、食堂の扉が開いた。

「大丈夫かい？」

全く、どうしてこういう時に限つてこの人が来るのが。

「問題ないわ。ああ、ごめんなさい。お酒臭いわ」

目の前の空氣を手で払い、苦笑する。

「歩ける？」

ゆつくりと近づいてくるティーンに、目の前の空氣を払つたその手を更に横に振る。

「今は無理。動くと気持ち悪くなりそう」

正直に告げると、ティーンは肩をすくめてコーヒーミアの隣に立ち、同じように壁に寄りかかる。その瞳はどこを見つめているのか。視線を追うと、暗くなつた窓の外に向けられていた。

コーヒーミアは頭の中にかかる靄を払いながら、言葉をつかみ取る。お酒を飲んでいるからだらうか、いつもより気安く感じてしまうのは。

「ねえ、本当のあなたはどちらなの？」

昼間に聞いたティーンの名前は、どちらも彼のものだ。それは分かつているが、どうして使い分けているのか。聞いてしまうのは簡単だが、聞けば一歩を踏み出してしまう。踏み込んでしまう。それは彼らの思惑に近づくことになる行為だと知りつつ、それでも感情に従つてしまつ。

「どちらとは？」

「貴族と商人」

カーティスとティーン。

彼はどうやらで呼ばれたいのか。

「……きみにはティーンと呼んで欲しいな」

向けられた眼差しはどうか暗い。

「それは商人として向き合いたいということ?」

ユーフェミアに最初に告げた名を望むのであれば、なぜこの場に連ってきたのか。貴族の邸に王族の人間。周囲を上流階級に囲ませ、一体どうしたいのか。

それとも単に、貴族としての彼をユーフェミアが嫌つて「いる」とを知つてゐるからだろうか。

「さて、ね……。そんなことより、かなり酔つてゐるね」

「誤魔化すの？」

再度の問い合わせに、彼は小さく笑つただけだった。

その瞳はユーフェミアから逸らされると、窓の外へと向かう。何を考えているのか、珍しく表情までも暗い。

だからか。それ以上追求してはならないような気になり、ディーンと同じように窓の外を眺めた。外は暗く何も見えない。闇がただ広がり、一点の灯りさえない。まるで自分の置かれている状況のようだつた。

「アシュレイ……様は、いつもああなの？」

自分が嫌われていると思うのは、何となく傷つく。一般庶民に伝わつてくる王族の姿など、尾ひれがついた眉唾物だといつ」とが良く分かつたが。

「いや、そんなことはない」と言つたらきみを傷つけてしまうか……きちんと理由があるにはあるが、ちよつと、子供じみているとは思つうんだけどね」

苦笑を洩らすディーンに思わず向き直つた。

「なによ、それ」

聞き捨てならない台詞に、感情が高ぶる。お酒のせいだらうか。うまく感情が制御できない。

「一体、どういう理由だつて言つのよ」「やつ」

嫌な思いをしたのだ。それぐらい聞いてもいいだろ。

しかしディーンは、挨拶の為にアシュレイに取られたユーフェミアの手を取ると、軽くその手、指先を撫でた。まるで、昼間の痛みを知つてゐるかのようだ。気づいていたかのようだ。

「取りあえず、私としてはきみが彼に好感を持たなかつただけ嬉しいんだけどね」

顔を覗き込むように見つめられ、咄嗟にその手を振り払う。

「またそうやって誤魔化す！」

「……本当に、酔つてるね。動けるよつなら、もつ部屋に戻つた方がいい。送つていこう」

どうしても理由を話そとしなじティーンにつゝ苛立ちをぶつけてしまう。回りまわつて彼が悪いのだと、理由づけて。こんなところに連れて来られて、こんな目に会つなど理不尽だ。

「結構よ…」

きつぱつと拒否すると、彼は意外にもにっこりと笑んだ。それはどこか楽しげで、黒い。

「いいのかい？」この邸はかなり古いけじ、本当に大丈夫？」

その意味するところを察して、一気に周囲の気温が下がつたような気がした。

「……もしかして、いるの？」

どこの吹く風といつよろにしれつとした顔をして、ティーンはいつも見下ろすとぼくそ笑んだ。

「いるね」

はつきり告げられ、頬が強張る。

食堂に来る前はまだ田暮れ前だつたが、今はもう窓の外は完全に夜に閉ざされている。

冷えた廊下が、別の意味でひやりとする。

遠くで物音が聞こえる。足音が響く。それが使用人のものだと分かつていても、ここが見知らぬ場所というだけで恐怖が増す。

周囲に視線を走らせながら、知らずティーンに寄り添つていた。

「きみの方から抱きついてくれるなんて感激だね」

決して抱きついているわけではない。少しだけ彼の方に寄つているが。

馬鹿なことを、と思いつつも、視界の端に過る影に乾いた笑みを

漏らした。

「冗談じゃない。 いつまでもこんなとこで留まつておくなど言語道断だ。

非常に不本意だが仕方がない。 摺らぐ視界に瞬きながら、 思いをそのまま声に滲ませ、 彼を見上げた。

「ディーン……」

果たして、 摆れているのは自分なのか、 ディーンなのか。 未だ酔いは冷めない。

コーエンニアの言いたいことを汲み取つたらしい彼は、 仕方ないなと呟きながらも、 どこか嬉しそうに腕を伸ばしてくる。 その腕は檻のよつにコーエンニアに触れることなく囲いこみ、 身に触れる空気の温度がわずかに上がつたような気がした。

「もう少しこのままでいたかつたが、 そのような表情をされると、 まるで理性を試されているような気がするね」

そう言いながらも、 互いの身体の間に出来たわずかな距離は縮まる。 そうではなく、 コーエンニアは身体に回された腕とその言葉に眉間に皺を寄せて見上げた。

その意味するところが決して分からないわけではない。 これでも一応、 嫁き遅れと言われる年齢だ。 だが、 軽々しく口にしていい言葉ではないはずだ。 相手にするほど心安い間柄でもないし、 自分がそのような対象になるとも思えない。

背中に回された腕を軽く押しのけると、 簡単に檻は開く。 コーエニアは身体の向きを変えると、 一歩離れて田線で促す。 すると、 性懲りもなく片手を取られた。

一瞬振り払うべきかどうか悩んだが、 すかさず腕 자체を支えるようじぐつとつかまれ、 真っ直ぐ歩けない自分の為だと気づいた。 結局、 おぼつかない足ではそれに頼るしかなく、 コーエンニアはふらつく頭を空いた片手で軽く押されると、 やつとその場から動きだした。

翌日。

冬の合間の暖かい日差しに恵まれ、邸の裏を流れるギボン川を上流に向かつて散策することがジユリアの一存で決まった。邸の者にピクニックバスケットを用意してもらい、要はぶらぶらと散歩をしましようとのことだ。

大温室を抜け、周囲を見渡すと、丘陵地に建つ邸からは川がベレスフォード邸を中心に半円を描くように流れていることが見て取れた。遠くから見た川沿いには木があるなと思う程度だつたが、実際にその場を上流に向かつて歩いていくと次第に木は本数を増していく、周囲は森のような様相に変わつていった。

なぜかこの散策にはアシュレイもついてきていた。だが、昨夕とは違い一言も喋らない。不気味なほどの静寂を守り、一定の距離を離れてついて来ており、その上コーフェミニアが誰と話そうとも邪魔をすることがなかつた。

別に何か悪いことをしたわけではなかつたはずなのに、なんだか居心地の悪さを感じる。だからと言って、無暗に話しかけて返り討ちにされてもたまつたものじゃない。おそらくこのピクニックはジュリアが自分の為に計画してくれたことだ。

そう思いつつ折角だから楽しもと思つていたのに、今日は今日でジュリアとばかり話していると、ロジャーの恨めしい視線が突き刺さつてくる。仕方なく気を利かせて一人が話すようにもつていくのだが、気づくといつの間にか再びジュリアと話しているのだ。

やむを得ず背後について来ていたディーンのところまで下がり、二人を眺めることにした。

こうして見ると、ジュリアは王女といつよりも、どこにでもいる可愛いらしいお嬢様だ。しかし現実には彼女は王女で、ロジャーの想いが叶う日は確実に来ることはないだろつ。

森に分け入ると、落ちた葉を踏み分けながら、鳥の囀りに耳を傾ける。

冬とはいえ、頭上は葉で覆われ、隙間から木漏れ日が差し込んでいる。

前を行く一人の上にちらちらと瞬き落りの影は、それさえ彼らの美貌を彩る道具でしかない。

もともと容貌のいいロジャーとジュリアが並ぶと、まるで一枚の絵のようだった。ただ一つ残念なことは、姉妹のようしか見えないことだ。

冬の木漏れ日にロジャーの豪華な金髪がきらきらと輝く。男だと分かっていても、あまり異性を感じさせず、コーフェミアも意識したことがない。きっとジュリアも同じ感覚なのかもしない。

「もつたいないな……」

思わずじぽすと、隣を歩いていたティーンが耳ざとく拾う。

「何が？」

「ロジャーよ」

視線を前に固定したまま、少しだけ声を潜める。

ジュリアが王女でないなら、是非ともロジャーを勧めたいほど彼がいい人であることはコーフェミアも分かっている。仕事に対しても真面目だし、コーフェミアへ回す仕事の指示も適切だ。分からないうことに対しても真剣に考へてくれるし、疑問にも一つ一つ丁寧に答えてくれる。いつも穏やかで、腹が立つことはないのだろうかと思えるほどだ。

ただ、ジュリアのことに関しては周りのことが目に入らなくなるようだったが、そこまで想えることも逆に羨ましい。

そのことをティーンに告げると、彼も前を行く二人を見ながら満更でもない顔をした。

「妬けるね。きみがそこまでロジャーを評価しているなんて」

「ではそう言っているが、彼も同じなのだろう。」

「ジュリアもロジャーの良さに気づけばいいのに」

王族と労働者階級の者が、こうして身分を気にせず同じ場所で遊んでいるなど、本当は奇跡なのかもしれない。だから、この貴重な時間をロジャーは少しでも多くジュリアと過ごしたいのだろう。彼女と仲良くする自分を妬んでしまうほどだ。

ぼんやりと二人を眺めていると、隣から予想外に真面目な答えが返ってくる。

「彼女も気づいてるよ。ただ、ロジヤーに深く関わっていないし、相手がそれなりの立場でない限り、彼女は頑なに相手を意識しないようしているんだと思う。それに、なによりも理性が働くならば、ロジヤーに魅力を感じていない証拠だろ?」

はつきりと言い切った口調は、どこまでも現実的だ。貴族社会において恋愛結婚する方が珍しいことぐらいユーフェミアだって知っている。だけど庶民の中で育ったユーフェミアには、そこまで冷徹に割り切れるものは持ち合っていない。

一 ひどい言い方ね

「そうかな？ 王女である彼女は自分の立場をよく理解しているよ。自分の結婚が政治的な意味合いが強いことも知っているし、当然、周囲もそれを期待している。お互い妥協するなら、彼女はそれなりの相手を選ばなければならない。 そう、まだ、相手を選べるだけいいと思つよ」

かなり生々しい問題を日常会話の「」とく言われ、貴族社会の一端にわずかばかり怯んだ。

ユーフュニアの知る結婚は、決して利益だけを目的としていない。ケイトたちのようにお互いに幸せがもたらされるものだとばかり思つていたのだ。

昨日のジュリアとの会話が甦り、思わずムツとする。

一 たつたら、ジエリアは本当に好きな相手と結婚できないの？」
ジエリアが認めた人は、彼女を受け入れなかつた。結果として

そういうこともあるだろう。だが、もし彼女の理性が働かなくなるほど相手と出会い、その人と想いが通じ合い、それが周囲に認め

られない人だつたら……。

そこにあるのは不幸な結末なのかもしれない。

「だから彼女は相手を選ぶ」

まるでコーエミアの考えを読んだかのように、ティーンは「ちらを見ながら当然のように答えた。それが最良の選択だとでも言つよつに」。

一瞬、言葉に詰まる。

だが、結局はティーンの言葉を受け入れられないと軽く首を横に振つた。

「分からぬ」

上流階級と労働者階級。

結局は考え方も違えば、生き方も違つてくるということか。

「つして今は一緒に過ごしているが、やはり根本的なところは相容れることは出来ないのかも知れないと思つと、少しだけ寂しさを感じてしまう。」

「たとえば、きみの言つたこの先ジュリアが理性をなくすほどの人物と出会つたとしよう。しかし周囲は反対している。だが彼女は王女だ。自分の立場も理解している。愚かな行動はしないだろうし、周囲もさせない。そんな彼女にきみは彼女の感情を優先してもいいと言つことが出来るのかい？」

聞かれ、すぐに頷くことが出来なかつた。

彼女が一介のお嬢様だつたら、言えていたかも知れない。しかし、彼女を取り巻く環境が自分とジュリアの隔たりを厚くしている。遠まわしに彼はジュリアの肩に責任という一文字が乗つていてることを言つている。

まさに考え方も生き方も違うのであれば、自分のこの考えは彼女にとつて責任を放棄しろと言つていいことになるのではないだらうか。

「すべては彼女が決めることだ」

ジュリアを見ながら、思いのほか穏やかな口調で言つ。

聞きようによつては突き放すように聞こえるかもしないが、そこには紛れもなくジユリアに対する信頼が見えた。彼女の選択がきっと正しいと、彼女自身が幸せになれる選択をするだらうと信じているように聞こえる。

ジユリアが彼を兄だと慕つよつて、「ティーンも彼女を妹のように思つてゐるかもしない。

コーフュミアは気持ちを入れ替え、再度、前を行く一人を見つめる。

王女だらうと庶民だらうと一つだけ分かつたことがある。

「結局は、他人のことに口は出せないのね」

「そういうことだね。身分は取りあえず置いておくとしても、色恋に関しては特に個人の問題だからね」

そう締め括つたティーンはなぜかその時、ジユリアを見ながら苦々しい笑みを浮かべていた。

「ぶらぶらと目的もなく歩き、お腹がすいたので昼食を取るという、なんとも非生産的な時間の過ごし方に、コーフュミアは絶対に貴族にはなりたくないと思つた。

どうやらこれが貴族的な時間の潰し方らしい。

時間の有効活用を信条に生活しているコーフュミアには到底合はない。なんて贅沢な時間の使い方なのだろう。

小さな森を抜けると再び野原が広がつた。しかしそこはもう人の手の入つた庭とは違い、自然に伸びた枯草が地面を覆つていた。

ジユリアと相談し、風避けになる木の側でバスケットを広げることにした。

用意されていた昼食はサンドイッチで、具材は分厚い肉や彩りのいい野菜が挟んである。貴族は時間の使い方も贅沢だが肉の厚さも贅沢なのね、と思いつつ、ジユリアと話しながら準備をした。

ボトルワイン一本と、人数分の皿やグラスの入つたバスケットは

かなり重かつたのではないかと思うのだが、それを一人で運んできたロジヤーは、再び溶けそうな顔をしてジュリアを見ている。この邸に来てからというもの、ジュリアの視界に入らないところでは常にその顔だ。

大方準備も済み、一人離れて川辺に立つアシュレイを見る。

ギボン川はそれほど大きな川ではない。川幅は大人の足で十歩もあれば余裕で渡れるほどだ。しかし水量はかなりある。アシュレイはゆつたりと流れる水面を眺めて何かを考え込んでいるように見えた。

昨日とは違い、大人しいものだ。

ピクニックにはついてきたが後ろを離れて歩いており、時々ディーンとは話していたようだつたが、昨日の夕食時とは違つてユーフェミアが誰と話していくても邪魔をしない。

だからと言つて、こちらを見る眼差しに含まれる敵意は少しも減つていなかつたが。

ディーンやジュリアは、子供じみた当てこすりのようなものだから、と言うが、理由も分からず自分暮らす国の王族に嫌われるなどユーフェミアにしてみればたまたものではない。

仲良く、とまではいかないまでも、普通に、接して欲しいと望むのは国民として望み過ぎだろうか。

せめて嫌つている理由ぐらい分かればいいのだが、ディーンたちの言うように子供じみた理由なら、お互いいい大人なのだから表面だけでも友好的に付き合つことも出来るはずだ。

少しだけ唸ると、すぐに決断する。

「アシュレイ様を呼んでくるわ」

昼食の準備が整い終わったのを見て、ジュリアに告げた。

彼女は驚いたように顔を上げたが、すぐに困惑したような笑みを浮かべる。無理をしなくてもいい、とその顔には書いてある。

「大丈夫よ。呼んでくるだけだから」

まさか皆の目の届く場所であからさまな非道な行いはしないだろ

う。ジュリアたちが一様にこちらを見つめているのを確認してから、コーエンニアはアシュレイの元へと向かった。

だが、まさか、どこかひとつ起つて得る可能性もあるどこかひとつで。

あつ、と思つた時には地面から足が離れていた。

一拍後、全身を覆う水の冷たさに、心臓がぎゅっと痛くなる。どうしてこのようになつたのか。

事実だけ述べるなら、アシュレイと聞いて命をした直後、川に落ちたのだ。

それは状況的に非常に悪かつた。

互いに声を荒げていたわけではないが、言ひ合つ声はきつとジュリアたちにも聞こえていただろつ。

だけど。

口を噛みしめると、わずかなためらいが現状を招いてしまつたことを後悔する。

死ぬかもしれない。

あり得ないと思う反面、脳裏に過つた言葉は、一瞬で恐怖を招くに十分だつた。

どうすればいいのか直後分からなくなつた。怖くて全身が硬直する。沈む勢いが強くて、このまま浮き上がることが出来ないのではないだろうかとさえ思えた。しかもその時、口から漏れ出した空気が泡となつて水面に向かつていぐのを視界にとらえ、ひどく焦るあまり、愚かにも喘いでいた。

当然、肺に流れ込んできたものは求めるものではなく。

あまりの苦しさに、吐き出せつても吸い込もうともせんでもならないで、ますます頭が混乱する。

嫌だ。怖い。助けて。

それでもとにかく本能が空気を求めるまま、よつやく浮き上がり

始めた身体が水面に近づくにつれ、広がったドレスの下衣を必死にかき分けながら水から顔を出した。

「姉さまっ！」

ジュリアの声を耳にしたが、返事を返せるほどいの余裕などなかつた。

濡れた肌に触れる空気は凍えるほどで、その上求めていたものはむしろ身体が受け付けなかつた。

気管に入つた水を押し出すように、せつかく吸い込んだ空気が咳と一緒に吐き出され、喉の奥がひりつく。

じわりと目の奥が熱くなる。

それは生理的なもの以外の何物でもなく、胸の中では純粹に、助かつたと思っていた。

落ち着いてくると、周囲を見渡すほどの余裕が出てきた。
深さも胸の辺りまでで、思ったより流れは早くない。そのことに安堵したものの、あまりの水の冷たさにどんどん体温が奪われ、思うように手足が動かないことに気づく。

「姉さまっ、こちらに！」

川岸にドレスが汚れるのも厭わず、膝をついて必死に手を伸ばすジュリアが、ゆっくりとだが後方へと向かいつつあることに、自分がゆっくりと流されていることを知つた。

まずはいな、とは思うものの、水をかく指先が凍るような水温に凍れてくる。

懸命に腕を動かすが、一向に岸辺に近づけない。

誰かが川に飛び込んだ音が聞こえたと思つたが、どうやらコーエミアが水面に顔を出す間に流されてしまつた為か、離れた所で水をかき分ける音がする。

これはまずいかも、と思つた時、ふと足に何かが触れた。

背中を這い上がる、寒さとは違う冷え。身体の芯からの嫌悪感に顔が引き攣る。

ふくらはぎをつかむ、はつきりと手だと分かるその感覚に、脳が

思考を停止し、全身が拒絶反応を示した。

「 っ！」

声にならない悲鳴が、口から漏れる。恐怖が、身体の動きを止め
る。

どうしてこんな時に。

まだ日が高い時刻なのに、なぜ、と思つ。同時に、水中の暗闇に
時刻など関係ないのかと、どこかで納得している自分がいた。

「 ディー、ン！」

水中に引き込まれる、と思つた間際、なぜだか彼の名が口を突い
て出でていた。

どうして彼なら助けてくれると思つたのか。

再び水中に沈んだコーヒーミニアは、確かに自らの足をつかむ影を
見た。

悲鳴すらも喉に張り付き、再び鼻腔に水が入り込む。

今度こそ駄目だと思った。

ただひたすら怖い。

息が苦しくて、喉の奥が痛くて、それでも沈みそうになる意識に
檄を飛ばして、水面に揺れる太陽に向けて手を伸ばした。

水底を自由な片足で蹴ろうとしたが、ドレスが絡み付いて上手く
いかない。

暴れれば暴れるほど、息苦しさは増していく。

次第に指先さえ動かす力もなくなり、身体中から抜けていく力に、
絶望に近い諦めが襲いくる。

意識が薄れていく、その瞬間 。

ふつと身体が浮き上がるような気がした。

「 コーフェミニア！」

厳しい声で名を呼ばれて、頬にあたる風の冷たさに本能的に息を
した。

喉の奥が詰まつた感覚に咄嗟に咳き込むと、生温かい水が口の端
を伝い落ち、やつと求めていたものが肺に入りこむ。途端、心臓が

激しく脈打ち始める。

「つすらと目を開けると、怖いほど真剣な顔をしたディーンがいた。

まだそこは川の中で、抱えられるようにして彼の腕の中にいた。頬に温もりを感じ、彼の片方の手が添えられていることに気づく。冷えた身体に足の感覚はすでにはない。まだ何かが足をつかんでいるような気がして、目の前のディーンに縋りつく。

「駄目……、早く

岸に上がらないと、と告げたいが咳き込みすぎて声がかされる。彼は言いたいことを理解してくれたのか、一つ頷いた。コーヒーミアを両手で抱え上げると、岸に向かって歩き始めた。そして小声で呟く。

「大丈夫だ。『彼』がなんとかしてくれる

濡れた黒い前髪から滴が落ちて、腕に抱えられたコーヒーミアの頬で小さく跳ねた。

見上げたディーンの表情は、いつものように余裕が見えず、その瞳は怒氣を孕んでいるように見えた。

身体はだるく、身を預けた状態のまま、視線だけでこの原因となつたアシュレイを探す。

川岸に立ちすくむようにこちらを見つめ、青ざめるアシュレイに、わずかばかり微笑んでみせた。

あの瞬間、驚きに目を見張りながらも、咄嗟にこちらに手を伸ばしたアシュレイの手をつかまなかつたのはコーヒーミアだ。昨日の件が脳裏をかすめ、瞬間に躊躇つてしまつたのだ。

ただ、こちらに延ばされた手は、傍から見るとどう見えるか。突き飛ばしたように見えないだろうか。

その為にディーンが怒っているなら、誤解を解かないといけない。だけど、徐々に瞼が重くなる。思いがけない急激な心労に、意識がついてこない。

「ディーン……。彼、を 責めない、で……」

それだけ力を振り絞つて告げると、ゴーフェニアはゆっくりと目を閉じた。

死ぬかと思った。

凍えるような寒さに目を覚ましたユーフェミアは、束の間、自分がどこにいるのか分からなかつた。

目は開いているはずなのに視界は黒く、身動きしようにも拘束されているかのようにしっかりと身体は何かで固定され、訳の分からぬ出来事に混乱しそうになる。動転するあまり無意識に口元にせり上がってきた悲鳴を何とか飲み込むと、まずは落ち着こうと動ける範囲で深呼吸をする。

長時間同じ体勢でいたためか、首から肩にかけての筋肉がひどく強張り、頭をかすかに動かしただけで首に痛みが走つた。

反射的に顔を顰めると、仕方なくその体勢のままで周囲の様子を窺うこととした。

身体に伝う振動から、どうやら馬車に乗っているようだと分かる。視線だけを動かすと、窓の外を流れる景色に、先程視界が変だつたのは目がおかしくなつたのではないだと分かり安堵する。だが次の瞬間、思いがけない状況に気づき愕然とした。

視界が黒いと思ったのは、誰かの胸に顔を埋めるように寄りかかつっていたからだ。しかも不自然な体勢の割に安定しているのは、背中に回された腕ががつちりと身体を支えているからだ。

何があつたのか状況が飲み込めず、恐る恐る視線を上げると、自身を拘束する者の首筋に濡れて張りついた黒髪が見え、それだけでこの腕が誰のものかを悟る。

ユーフェミアの身体には見覚えのある上着が巻きつけてあり、すぐ記憶の端にロジヤーの姿が引っ掛かつた。

しかしながらその上着は気休めでしかなく、濡れたドレスは確実にユーフェミアの身体から熱を奪つていた。すでに指先も足先も冷

え切り、痛みを伴つてゐる。現実を思い出すと、途端歯の根が合はないような寒氣を感じて、ぐつと奥歯を噛みしめた。

ディーンは湿り氣を帶びた自らのコートをはおつてゐたが、顔色は酷く悪い。それは単に寒さの為なのか、それとも自分を心配して。

あり得ないと考えを打ち切り、再度視線だけを動かし周囲を見渡したが、馬車には他に誰も乗つていなかつた。

かすかに身動ぐと、身体に回された腕がわずかにゆるむ。

視線を下げたディーンと一瞬田があつたが、すかさず腕に力を込められ、身体がさらに密着する。咄嗟に非難を口にしようと口を開きかけたが、すぐにその理由を知つたコーフェニアはそのまま口を噤まざるを得なかつた。

濡れてはいたが、かすかに感じる互いの体温が唯一の暖だつた。

服越しに感じる体温はわずかにディーンの方が高い。

結局、身動ぐことさえためらわれ、邸に着くまでその体勢のまま終始無言をすることとなつた。

着いてからは待ち構えていた邸の者たちに早急に運ばれ、強制的に湯に浸けられた。その上、十分温まるまで出てはならないと見張りを付けられ、足し湯までされ、おかげで指先の感覚までしつかりと甦り、ようやく生き返つた心地がした。

しかし部屋に戻ると、今度は待ちかまえていた医者に診察をされ、特に異常が無いことがわかると、今日はとにかく温かくして休みなさいと言われ、やつと安心した邸の者たちから解放されたのだ。

このような扱いをされたことのないコーフェニアはただ恐縮しつ放しだつたが、休め、と言わてもまだ口は高く、心配したジュリアあたりが訪ねてくる可能性を考えると着替えるのもどうかと悩む。使用者が部屋を退室する前、何か温かい飲み物でも持つてきましょうかと尋ねられたが、水を飲み過ぎたらしく食欲はなかつた。部屋は十分過ぎるほど温めてあり、コーフェニアは横になるべきかどうか迷つたが結局は寝台の端に腰かけるにとどめた。

死にかけたと思えば、身体に残る疲労感が瞼を下げようとする。

確かに体調は万全ではないが気にかかるほどではない。

一人部屋でぼんやりとしている、ふとあの時、川縁でアシュレイと交わした会話が甦ってきた。

途端、コーフュミアは後悔に呻き声を上げ、頭を抱え込んでいた。

今思えば、何と大胆な事を言ってしまったのか。

アシュレイに散々なことを言われたといはえ、もつと理性を働かすべきだった。矜持はないのかとか媚びているのか、と気分を害する事を散々言われても、どれほど我慢ならなかつたとしても、黙つていればよかつたのだ。

要するに 魔がさしたのだ。

「殿下のおっしゃる矜持とは何でしょ。王族や貴族の矜持など、生まれた時から庶民の私に持ち合せているものではありませんし、理解できるものではありません。ですが、庶民の私にも生きていく上で必要だと思う矜持は持ち合わせております。失礼ですけど、殿下のおっしゃる矜持は、庶民の……特に労働者階級の女性の生き方を否定しているものに聞こえます。殿下は私たち女性がどのような苦労をしているのか本当に知つていらつしゃるのでしょうか。もしもそれも知らずにそのようなことをおっしゃるのであれば、私たち庶民を いえ、女性を見下げているとしか思えません。そのような方に一体国民の誰がついて行くでしょう?」

確かにアシュレイの言つよう、労働者階級の女性の中には羽振りのいい男性に媚びを売つて甘い汁を吸つてはいる者がいないわけではない。だからと書いて、彼女たちの生き方を非難するつもりはコーフュミアには無い。なぜなら元を糾せば、女性が生きにくく世の中であるから、アシュレイの言つような女性が多く出るのだ。そのような世の中を知りもせず、変える力を持つている王族である彼がただ非難を口にするのは許せなかつた。

勢いで言つてしまつたが、間違つたことを言つてはいるつもりはなかつた。それにコーフュミア自身、決して恥ずかしい生き方をして

いるつもりはないのだ。

胸を張つてきつぱりと言い切つたゴーフュニアに、最初こそ驚きの眼差しを向けたアシュレイだが、すぐにいつもの冷淡な笑みを浮かべると、両腕を組んで見下ろしてきた。

「では、おまえの言う矜持が何か見せてもらおうじゃないか。決し媚びないと言うんだな？」

「当たり前です。誰かに寄りかかって生きよつなど思つた事はありません」

淡褐色の瞳を正面から見返すと、わずかにその瞳が怯んだようを見えた。それは一瞬のことだ、すぐに逸らされる。

「だからと言つて、おまえと馴れ合つつもりはないがな」

それだけ言つと、ジュリアたちの元に向かつつもりだったのか、アシュレイに行く手を退くよう軽く肩を押されたのだ。

いや、押す、と言つよりも、掠る、と言つた方がいいのかもしない。

たまたまゴーフュニアの立つていた足場が悪かつた為、前日の件を思い出し、身を引いたゴーフュニアが足を滑らして川に落ちる結果となつてしまつたのだ。

思い出し、アシュレイがどうしているか気になつた。

きつと氣にもしていないうだろうが、あの時、川岸に立つ彼の顔が青ざめていたように見えたのは氣のせいではないだろう。

ディーンやジュリアに責められていなければいいが、と氣を揉んだその時、扉をノックする音が響いた。

「はい？」

返事をすると、すぐに扉は激しい音を立てて開き、血相を変えたジュリアが駆け込んできた。

ドレスの裾を翻し、その勢いのままギャウシと飛びついてきて、勢いあまって一人して寝台に倒れ込む。

「ええっ、ジュリア！？」

「姉さま、生きてますよね！？」

頬をぱちぱちと叩かれ、怪我はないかと先程の医者よりも慎重に身体に触れてくる。

入口にはロジャーもあり、彼にも心配いらないと寝転んだまま笑顔を向けた。

「大丈夫よ、何ともない。身体だけは昔から丈夫なのよ」

身を起こしながら、ロジャーに上着の礼を言ひ。

「コーフェミアさんが無事で何よりです」

彼も安堵の表情を浮かべながら、部屋の暖気が逃げてはいけないと思ったのだろう。入つてくると扉を閉めた。

「ごめんね。心配かけてしまったわね」

「いいえ。姉さまに大事が無くて良かつたです。ですけど、アシュレイ兄さまは許せませんわ！ 姉さまと同じ田に合わせてさしあげれば良かつたですっ」

拳を握り締めて力いっぱい言い放つジュリアは、表情も陰しく、激しい怒りをあらわにする。本気で言つてはいるように聞こえて、ユーフェミアは慌てて彼女の拳を押し留めた。

少なくとも今回の件においてアシュレイは悪くない。むしろ助けてくれる素振りは見せたのだから、責めるべきではないだろう。

「待つて。違うのよ。落ちたのは私の不注意なのよ」

「底う必要はありませんわっ」

力強く言い切るその眼差しは、いつぞやのアシュレイと同様冷やかだ。しかしその視線の先にいるのが自分ではないからか、身の竦むような怖さは感じない。むしろ自分のためにこうして怒つてくれるジュリアに親愛さえ感じる。

彼女の怒りを宥めるように、コーフェミアはざつと事のあらましを説明した。

ついでとばかりにアシュレイの所在を尋ねる。

「そう、図書室にいるのね？」

返ってきた返事に、昨日部屋に案内される前、通りがかったついでに教えてもらった場所を思い浮かべた。

この邸内の広大な図書室は、時間があつたら行つてみようと思つていた場所の一つだ。ちょうどいい、と寝台から下りると、ジュリアはふてくされたように視線を逸らした。

「ですけど、今はカー・ティスと話し中ですわ

「ディーンと？」

確認しつつもジュリアの態度に、首を傾げる。

まるで彼らの話から閉め出されたような口ぶりだ。

聞いてはまずいような話をしているのだろうか、とためらいながら、それでも彼らの元に行く意思を示す。

「お邪魔かしら？」

「いいえ、大丈夫ですわ。きっとアシュレイ兄さまはカー・ティスに叱られている最中でしおから」

わたくしも一緒に兄さまを罵つてやりたかったのに、とジュリアは頬を膨らませて呟いた。

その言葉にギョッとする。

確かにディーンには彼を責めるなど言つたはずだったのに。

コーエミアは慌てて身を翻す。

「姉さま！ 無茶をしては駄目です！ 兄さまのことはカー・ティスに任せておけばいいんですわ！」

背後から腕をつかまれて、身体を氣づかってか引きとめられる。ジュリアにも説明したとこに、それでもこのまま誤解をさせておけというのだろうか。

どうこうもりなのか問おうとして、ジュリアはその眼差しから逃げるように顔を背けた。

「それに……もう遅いです。兄の元に連絡が行つてしまつたんですね……」

空色の瞳に影を落としながら、次第にその声は小さくなつていいく。赤みがかつた金色の睫毛も弱々しく震えている。

「兄？」

「ブライアン兄さまです。わたくしたちに何かあればすぐに王宮へ

と連絡が行くことになりますの。だから……もうすぐ、兄さまがこちらにいらっしゃいますわ」

彼女の告げた言葉に田を見張った。

王太子まで、ここにやつてくると言つのか。

噂では人間的にもよくできた人物だと聞いているが、噂と現実の違いはアシュレイで立証済みだ。

王太子が来る、ということがどういつ意味を持つてゐるのかコーエミアには理解できなかつた。ただ問題があれば、こういう言葉とジユリアの態度から、あまり好ましくない事態であることにぐらい想像できる。

「姉さまはこちちらにいらしてください。もしかしたら会ひが必要が出てくるかもしだせんけど、その……姉さまがお会いしたくないのであれば、わたくしから話しておきますから」

どうやら昨日、彼女たちの正体を知つて腰を抜かしそうなほど驚いたコーエミアを気づかってくれているらしい。

コーエミアは腕からジユリアの手をそつと外すと、彼女に向き直つた。

正直、歓迎すべきことではないが、必要があるならば会わなければならぬだらう。もしもアシュレイ一人が悪者にされるような事態になるならば、きちんと誤解だけは解いておきたい。コーエミアが足を滑らしたせいで、この事態を引き起こしたのだから、きちんと責任をもつて弁明するつもりだ。

「いいえ 必要があるなら会つわ」

なんだか次第にやつかいことになりつつある現実に、もしかして自ら首をつっこんでしまつてゐるのかしら、とコーエミアは首を傾げて自問自答した。

午後の日差しが差し込む図書室は明るく、裏庭に面した窓の外は緑の芝生が広がっていた。膨大な蔵書は天井まで埋まり、仕事柄嗅ぎ慣れた紙とインクの匂いはユーフェミアの緊張を解してくれる。窓辺近くに置かれたソファに、王太子は姿勢を正して座っていた。その正面にユーフェミアが座し、隣にはジュリア。背後にはディーンが立っている。アシュレイとロジヤーは現在同席していない。王太子を目の前にしたユーフェミアは、不思議な感覚に囚われていた。

穏やかな眼差しに見つめられながら、対面したブライアンにユーフェミアはすっと目を奪われていた。

髪の色はアシュレイと同じ淡い金髪、瞳の色はジュリアと同じ空色の瞳。その色合いに、押さえきれないほど懐かしさが込み上る。

自分がどう挨拶をし、何を喋ったのか。まるで夢の中にいるかのようで、現実感がない。

不躊躇だと分かつていたが、視線がユーフェミアの全てが彼の一動作に引きつけられる。彼の発する声が、耳に心地よく残る。

「……さま、ユーファ姉さま？」

ジュリアの声と、突然背後から視界を覆われた手に、ユーフェミアは強制的に現実に立ち戻らされる。暗くなつた視界に、一体、今まで自分は何をしていたのかと慌てる。

「あ、え？」

目を覆う手を除ければ、背後から覗き込んで、どこか不機嫌そうな顔をしたディーンが視界に飛び込んできた。その距離は思いのほか近い。手を離せば、その手はそのまま肩に置かれる。

「どうしたんだい？　きみが呆けるなんて珍しい。一体、何に見惚れていたのかな？」

ディーンの意地悪な口調にどこか違和感を覚えながらも、ユーフェミアはいつものように反論する余裕さえなく、再びブライアンに視線を向けた。自然と心が向かう。

記憶の底から甦る、懐かしい人にそつくりで。自分と同じ色の髪と、春の晴れ間のような温かい空色の瞳。年齢も、当時の人と変わらない。エド……。

心の中で名前を呟く。

「……そんなに似ていますか？」

まるでユーフェミアの心の中を見透かしたように、ブライアンは微かな笑みを浮かべる。それはどこか困惑していく、ユーフェミアに更なる追い打ちをかける。

それだけで心臓が痛くなる。泣きたくなるような衝撃に、心が打ち震える。

たまらず息を押し殺す。

でないと、本気で泣いてしまいそうだつた。

「兄さま……。もしかして、ユーファ姉さまは

ジュリアが落ち着かすようにそっと背中を撫でてくれながら、何かに気づいたのだろう。問いをブライアンに投げる。それに、彼は静かに頷いた。

「彼女は一度、会っているはずです。もう忘れてしまった可能性の方が高いと思つていまつたが……覚えていたのですね？」

今更、誰を、と聞くのは愚問だつた。最後の方は、確認というより確信に近い。

ユーフェミアは込み上げる感情を抑え込むよう息を飲み込み、頷いた。

忘れるはずはない。ずっと心の奥に引っ掛けついていたのだ。

その人の事を知つてゐる人がいる。そう思つだけで、心が浮き立つ。

「どうして、あなたは……いえ、あの人のことを知つていらっしゃ

るのですか？」

気がはやる。

知りたいと、心が渴望する。

その気持ちが表れていたのか、背後から軽く肩を引かれて、前に身を乗り出していたことに気づいた。

落ち着くように肩を軽く叩かれ、ユーフェニアは先走る気持ちを我慢する。

ブライアンはわずかに視線を下げる、小さく苦笑する。

「アシュレイの非礼を本人の代わりに詫びるつもりだったのですが、どうやらあなたはそのようなことよりも『あの人』のことが気になりますね」

言われ、ユーフェニアはアシュレイを弁明するつもりでここに来たことを思い出した。

当初の目的をすっかり忘れていたことを見透かされ、出来ることなら両手で顔を覆つてしまいかけた。代わりに羞恥を耐えるようにスカートを握りしめる。

当然、ブライアンの詫びを受け入れるつもりは当然ない。が、本来の目的は果たすべきだ。

気は半分以上削がれていたが、気を引き締めるとぐつと顔を上げる。

「あの、王太子殿下がアシュレイ殿下の」

先に片付けるべきことを口にしようとする、ブライアンからすぐには手を上げ止められた。

「ここは王宮ではありません。そんな堅苦しい敬称は必要ありません」

確かにここに王太子がいるのは、きっと公なことではないのだろう。本来なら護衛と称して数人の近侍に囲まれている、と確かにジュリアが話していた。

彼は一人でベレスフォード邸にやってきたのだ。つまり私的に来たと思つていいのだらう。

躊躇いながら、コーフュニアは言を繋いだ。

「アシュレイ様の件をどのようにお聞きになつたのかは存じませんが、川に落ちたのは私の不注意です。」

「非は自分にあるとはっきりと告げる。

正面から見つめると、ブライアンの眉がわずかに持ちあがる。

「アシュレイを責めるなど？」

「話が早い。

結論を先に言われ、コーフュニアは目をそらすことなく短く首肯した。

するとブライアンの瞳に、興味深げな色が浮かんだ。まずジュリアを見、次いでディーンを見て、再びコーフュニアを正面から見つめる。

「なるほど。アシュレイがあなたに反感を持つはずだ

「……はい？」

思いがけない返事に、気の抜けた返事をしてしまつた。数度彼の言葉を頭の中で繰り返したが、意味するところが分からぬ。反感を持たれていたのは知つてゐるが、どこからそういう結論になるのか。

ディーンやジュリアは大人氣ない理由だと言つていたが、結局それも分からずじまいだつた。

できることなら分かるように説明して欲しかつたが、それを王太子である彼に求めるのはさすがに躊躇われた。

だが、きちんと戸惑いが伝わつたらしい。ブライアンは、ゆるく口角を上げると簡単に説明をしてくれた。

「私たちの周囲には大きく分けて二種類の人間がいるのです。媚びる者と縋る者。私たちの顔色を窺い、媚びへつらいながら私たちの持つ特權のおこぼれにありつこうとする者。もう一つは、私たちに縋り、揉め事を回避しようとする者。王宮にはそのような人間ばかりだと言つても過言ではない」

その中心にいるはずなのに、ブライアンは顔色を変えることなく

淡々と告げる。慣れてしまつたといつよりも、それを当然の世界として受け入れているように聞こえた。

コーエミアにしてみれば受け入れがたい世界だった。まるで自分のために他人を利用するのが当然だと言つてゐるようだ。

ふと、アシュレイに川岸で散々罵られた言葉の数々を思い出し、ブライアンが今言つた言葉が混じつていてことに気づく。アシュレイが自分をどういうつもりで罵つたのか、理由は分からぬまでも気持ちだけは分かつたような気がする。

王族は庶民から見たら遙かに恵まれた生活を送つてゐるばかり思つていたが、この邸に来て彼らを知れば知るほど、同情に近い感情を覚えてしまうのは、きっとおこがましいことに違ひないだろう。だが、思わずにはいられない。

自らの意識に沈もうとしていたところを、ブライアンの声で立ち戻る。

「あなたのように媚びるでもなく、縋るでもない者は私たちひとつて、とても稀な存在だ。そのような汚れ切つた世界を見て育つたジユリアやアシュレイが、あなたに好意を持つことはおかしくはない」ゆつたりと話すブライアンの声は耳に心地よく、思わず聞き入りながら、畏れ多い褒め言葉に慌てて首を横に振る。だが、すぐに信じがたい言葉があつたことに首を傾げた。

「あの、アシュレイ様も？」

声が疑つたものになつてしまつたのは仕方がない。昨日から散々な目にあつたのだ。あれが好意から來てゐるものとは到底信じられない。

「ええ。弟の場合は少し色々なものが混ざつてしまつて、反感を持つに至つたのだと思います」

やはり反感なのか。

渋面を作つたまま、取りあえず納得する。完全に理解したつもりはないが、アシュレイの根底に好意があるならば、まだ関係改善に余地はある。

苦笑を浮かべたブライアンは、話し終わるとジュリアに視線を向けた。

「それでもまだ、きみたちの目的に彼女を巻き込むつもりなのかい？」

優しい口調だったが、それはどこか冷酷な響きを持っていた。好意を持っているにもかかわらず、目的の為ならばコーヒーミアを利用するのかとブライアンは聞いているのだろう。だが、ジュリアは言っていたではないか。強制はしないと話を聞くだけというのは約束したのだから、コーヒーミアは彼女が出した結論に異論を唱えるつもりはなかった。

ジュリアはかすかに青ざめたが、ちらりとコーヒーミアの背後に立つディーンに視線を向けると、コクリと頷いた。

それを見て、ブライアンは深く息を吐き出した。
仕方がないというように。

「……つくづく私も甘い。どうやつたらそこにいるカーティスのような人間になれるのだろうね」

どう言う意味なのか分からなかつたが、困つたように一人呟くブライアンの声は、決して小さくはない。

「ブライアン、それはどういう意味かな？」

言葉を返すディーンもどこか楽しげだ。笑い合つ一人を見て、本当に幼馴染なのだとほつきりと感じる。

この邸に来てから、コーヒーミアはディーンとの距離をありありと見せつけられ、実際にその身分の差を感じていた。今まで気安く接してきたが、王族の中に入つても違和感がない。確かに彼は上流階級なのだ。

そこに寂しさを感じないと言えば嘘になる。コーヒーミアにとつてディーンは、すでに知り合いの域を超えている。いつも反発しているが、向ける感情は友人にに対するそれに近いものがある。だが、現実は違うのだ。その上、違う世界を垣間見た後悔が押し寄せてくる。この邸に来るべきではなかつたのかもしれない、もう何度も

思っていた。

「さて、話を戻そう。アシュレイの件はあなたがそう言つのであれば、その言葉に甘えてなかつた事にしよう。それで、あなたは『あの人』の何を知りたいのですか?」

やつと話が戻り、正面から聞かれ、『ティーンやアシュレイのことは取りあえず保留する。

今までは正直、エドのことと父親のことが結びつき、考えるたびに暗い気持ちに囚われていたが。

心臓が徐々に早鐘を打ち始める。

ずっと知りたかったことが、まるで薄いカーテン越しに影だけが透けて見ていくような気がした。しかも手を伸ばせば届く位置にいる。

こうしてあの人によく似たブライアンを目の前にして、今となつてはその答えは予想がついているが、そうなるとカーテンを開けるのが怖くなる。知りたいけど、知りたくない。

腿の上で握っていた両手がかすかに震える。

この期に及んで緊張してきた。あれほど川の水を飲んだというのに喉に渴きを覚える。

正面から見つめくる視線から逃れるように、コーフュニアは自らの両手に視線を落とし、声を絞り出した。

「……私の記憶の中の人が、本当に エドワーズ国王であったのか……」

言葉にしてしまえば、もう取り返しはつかない。

ブライアンはそんなコーフュニアの恐れに気づいたのか、安心させるように小さく笑つた。

「それは間違いない。父はあなたを引き取りに、一度バルフォアに赴いている」

短い言葉だつた。だが、すべてを説明しているかのようだつた。息を飲み込むと、一つの言葉を繰り返す。

「引き取る……」

「ええ。私なりに調べたのですが、あなた言つ『あの人』が父であることに間違いはないでしょう。ですが……あなたはこの続きを聞く勇気が本當にあるのですか？」

尋ねられ、咄嗟に言葉が出なかつた。ブライアンはユーフュニアが何を躊躇つてゐるのか分かつてゐる。その躊躇いを知つていてなお、選択させてくれるというのか。

それはとても親切で、残酷だ。

情けない顔をしてゐるとは思つたが、それでもゆつくりと顔を上げると、ブライアンは穏やかに笑んだまま、容赦なく切り込んでくる。

その春の日差しのような眼差しだけは真剣で。

「たとえあなた望まない答えだつたとしても」

それはどこまでも冷ややかに、現実を突きつけて。

「全ての生活が一変するようなことになつても」

まるで悪魔の囁きのように甘美で、同時にコーフュニアひとつては恐怖の宣告に近く。

「あなたはそれを全て受け入れる覚悟があるのですか？」

正直に言つと、分からなかつた。

それでも知りたいと思うのは、悪いことなのだろうか。

覚悟と言われても、知つて何が変わらるのか。周囲が変わらるのか、自分が変わらるのか。

思いは決まつてゐるのに、ブライアンの言葉が頭の中を混乱させていた。

だが、先程まで背中を撫でてくれていた手が熱を伝えて、促しているような気がした。肩に置かれた手に力が加わると、更に頭の中が静まつていく。

一度目を閉じ、息を吸うと、ゆつくりと視線を上げた。空色の瞳を真つ向から見つめ、静かに息を吐き出す。

「私は……知りたい」

告げた言葉は思ったより大きくなく、その場に静かに落ちていく。

ブライアンは膝の上で両手を組むと、その答えが分かつていたよ
うに、ゆっくりと目を閉じた。

11・零れて乾いてく涙は、見ない振りに決めて 前編

今この瞬間が、怖い。

次にブライアンが目を開いた時、その瞳は先程まで見せていた厳しさを完全に拭い去っていた。

コーフェミアを見てながら、どこか違う何かを見ているような眼差しで、口元には穏やかな笑みまで浮かべている。

先程まではあきらかに違う雰囲気にコーフェミアは困惑した。

「あなたは 母から聞いた、あなたの母君とそつくりだ」

苦笑と共に呟かれた言葉を、コーフェミアは数度頭の中で繰り返した後、思わず目を見張っていた。

どうしてここで母が出てくるのか。いや、それよりも国王ではなく王妃がクリスティアナのことを知っていた事実に頭が混乱する。

ブライアンの様子から、王妃が彼女の子供たちである彼らに悪意を込めて母のことを話したわけではないことぐらい容易に想像できる。でなければ、彼らが、これほど穏やかな表情をしているはずがない。

彼らの母親でもあるパメラ王妃。確かに、コーフェミアの母クリスティアナが生きていたら同じ年頃だろう。とても穏やかで美しい人だと噂で聞いたことがある。その王妃であるパメラが母を知っているとは。

驚きのあまり一の句が告げずにいると、ブライアンは身体から力を抜き、ソファの背もたれにすがると、やがてゆっくりと話し始めた。

「母はグラッドストン公爵メイナード家の出で、あなたの母君のエヴァンス家とも懇意だつたと聞いている。交流のあつた両家に同じ年頃の娘。過去にも先にも親友と呼べたのは彼女だけだつたとよく聞かされていたよ」

視界の端で、隣に座つたジュリアの頭が同調するようにかすかに動く。

彼らは子供の頃からクリスティアナの話を聞かされていたのだろうか。

ブライアンの瞳がわずかな間、遠くを見つめた。それはとても穏やかで、コーフェミアが想像していた　憎しみを込められた感情はそこに見えなかつた。

一方、クリスティアナとの思い出を辿りながら、いくら考えても母の口から王妃の名を聞いた記憶はなかつた。

事実、聞かされたところで、庶民の中で育つたコーフェミアが母と王妃が親友だと言わても信じなかつただろうし、そのようなことをコーフェミアがうつかり周囲に漏らし、聞き付けた何者かに自分たちを悪用されることを恐れていたのかもしれない。母の立場を理解するには自分は幼過ぎたし、母が亡くなるのも早過ぎたのだろう。母の口から何一つ、父親のことでさえ聞いたことがなかつたのだから。

どこかもやもやするものを抱えながらも、再び口を開いたブライアンの話に耳を傾ける。

「母は幼少の頃にはすでに父と婚約を取り交わしていた。社交の場に出る歳になると、王太子の婚約者として扱われ、同年代の娘を持つ親やその娘自身から、隙あらばその地位から引きずり降ろそうと何度も嫌がらせを受け、どれほど挫けそうになつたかと言つていたことがある。だが、絶対的に味方となつてくれた親友がいたから乗り越えることができたと聞いている」

それがクリスティアナなのだろう。

ブライアンの口からさらりと語られた上流階級の黒い部分は、コーフェミアが想像できるようなものではないし、想像したくもなかつた。だが何となく、母がパメラの味方となつてゐる姿は想像ができた。きっと母の事だ。他の貴族の令嬢に口でも　もしかしたら手でも負けはしなかつたことだろう。

どこまで彼らは母の話を聞いているのか分からなかつたが、どことなく決まりが悪くて身を縮こまらせた。

しかしブライアンの聲音が穏やかだからか、いつの間にか緊張がほぐれていることに気づく。

氣を取り直して顔を上げると、ブライアンはこすらを見てかすかに微笑んだ。その顔はやはりエドに似ていて切なくなる。

「だが、実質あなたの母君 クリストイアナが社交界にいたのは約一年。母と共にその美貌で社交界でも注目を浴びていたクリスティアナは、忽然と姿を消すことになった ある噂と共に」

「……噂？」

思わず眉を顰めていた。

その口ぶりから、噂が決してよくない手合いものであることだと分かる。

ちらりと隣を窺つと、ジュリアも組み合わせた手に視線を向けたままでいつもの元氣はない。

コーフェニアにもその噂がどのようなものであるか、ある程度予測はつく。

一般に、貴族の娘が社交界に出ると言われているのが十四、五歳だ。コーフェニアはクリスティアナが十七歳の時の子供なのだ。時間的には合っている。しかもこの会話の流れからいくと、やはり……。

「常に母の側にいたクリスティアナと母の婚約者である父が顔を合わす機会はいくらでもあつたはず。まして周囲は敵だらけ……。先程も言いましたが、どうにかして母を婚約者の立場から引きずり降ろそうとしている連中にとつて、母の味方であるクリスティアナの汚名は、親友と婚約者の両方に裏切られた母を社交界に居づらくさせるには恰好の材料だったのだろう 事実、クリスティアナは君を身籠つていた」

当時、クリスティアナと王太子であるエドワーズが一人だけで会つている姿は何度も目撃されている。しかも、婚約者のいる者同士

が人目を忍ぶようにこつそりと。それは次第に人の口に上るようになり、さらにクリスティアナの婚約破棄と妊娠の発覚。

その上、生まれた子供は王太子と同じ蜂蜜色の髪。

「おそらく事実関係から推測するとあなたは父の血を引いている」「……え？」

頭の中でたどり着いた結論に、ブライアンは早合点を止めゐる。思わず聞き返と、彼は困ったように笑つた。

「私も様々な手段を使って調べた結果です。父の補佐を長年している父の友人に聞いたこともありますが、なかなか事実は教えてもらえなかつた。むしろ私に気づかうところが余計に認めているように思えて、何度も食い下がつたところようやく認めた。だが母はあなたの髪色が父や私と同じでも、親友であるクリスティアナを未だに疑つてはいない」

それは現在も、と言つことだらう。

しかしふと疑問に思つ。

彼らが調べなければならないほど、事実は巧妙に隠されていたといふ事なのだろうか。二十五年以上も経つた今では噂の大きさがどれほどのものであつたか計れないが、確かにそのおかげでコーヒーミアは静かに暮らしてこれたのだ。

ならばなぜ、ブライアンやジュリアは、クリスティアナやコーヒーミアの存在を知ることができたのか。

コーヒーミアのわずかな表情の変化に気づいたのか、ジュリアは静かに話し出した。

「……昔、母が仕舞つていた過去の日記を見つけてしまつたのですわ」

「どこか虚ろな遠い目をしてぽつりとジュリアはこぼした。

「ブライアン兄さまやアシュレイ兄さまと、母の私室で遊んでいた時です。母はその時留守で……偶然、侍女たちもいなかつたのです」

あまり感情のこもらない訥々とした調子でジュリアは話す。

続きの間である衣装部屋に入りこみ、美しく豪華な色とりどりの

ドレスをかき分けでジュリアが隠れる場所を探していると、実家から嫁入り道具を入れて持つて来たという箱を見つけた。

ジュリアが隠れるにはちょうどいい大きさのその箱を開けると、中には意外にも数冊の本が入っているだけだった。だが普通の本とは装幀からして何かが違い、興味を引かれて手にとつて開いてみると、中は職人が書いた文字とは明らかに違う、母の筆跡と思われる字で何かが書かれていた。

まだ簡単な文章しか読めなかつたジュリアは、取りあえず兄たちに見せることにした。

そしてそれがパメラの昔の日記であることを知つた。

日付は、パメラがまだ結婚する前。

主にその日の他愛ない出来事や親友のクリスティアナのこと、時には社交界での嫌がらせが綴られていた。

だが、次第に親友の名前が日記から減つていつていふことに気づく。

『まさかクリスがあの方の子供を身ごもるなんて……。私は一人の関係を知つていながら何もすることが出来なかつた。婚約も破棄され、公爵の怒りも買つてしまつたエヴァンス家はもつ……。わたくしに出来ることは そう、一つだけ。クリスを信じること。それが噂からも彼女を守る、唯一の手段……』

それを最後に、その一冊からクリスティアナの名前は完全に消えた。

ブライアンに読んでもらいながら、次第に一人の兄の顔色が悪くなつていくことにジュリアは気づいた。

書いてあることの意味はほとんど分からなかつたが、兄たちの顔色から良くないことが書かれていたことに不安になつてくる。

取りあえず日記を元の場所に戻し、母の私室から逃げるように出るとブライアンの部屋で口を濁す兄たちにしつこく問い合わせしたのだ。知られた事実に打ちのめされたのは、ジュリアだけではなく、話してくれた兄たちも同様だった。特にアシュレイの父に対する嫌

悪は酷く、その憎しみはすぐにクリスティアナに向くこととなつた。それから、ブライアンは色々な手段を講じてクリスティアナのその後を調べ上げた。

王都からほど近いバルフォアで生活していること。すでにクリスティアナは亡くなつてゐること。ブライアンより一つ年上でコーヒーミアという名の娘がいること。かつてクラiftonにある大学に勤め、父の教師をしていたナフムという者と暮らしていること。

それは兄妹だけの秘密となり、それぞれの中で消化され、想いは次第に別々の方向へと向いていくこととなつた。

ブライアンは父や母が静観しているならば静観を続けよう。アシュレイは嫌悪感から決して認めてはならない存在へ。ジユリアは次第に姉への思慕に変わつていつた。

「だから ユーファ姉さまは、わたくしの本当の姉さまなのです！」

ずっと会いたかつたのだと涙を浮かべて手を取られる。

だが、ユーフェミアは覚悟をしていたものの、告げられた事実に戸惑いしか覚えなかつた。

二十五にもなつて、いきなり弟や妹ができたと言われても、実感はわかない。どういう態度で接すればいいと言うのか。

ただ話の中で、一つだけ納得できたのはアシュレイの態度だ。

きっと彼は潔癖であるが故、怒りという形になつて向けどころのない感情をユーフェミアに向けてしまつたのだろう。ブライアンから聞いた経緯からは、憎しみを持たれてしまつのも分からなくなつた。母は親友の婚約者を、彼らの母親から一時的にしろ奪い、子供まで産んでしまつたのだから。

ユーフェミアからしてみれば、ディーンやジュリアの言ひようこそ『子供っぽい』理由では片付けられない。受け入れられないと言つのも仕方がないと思う。

重い息を吐きながらユーフェミアは俯く。

知つてしまつた後、何がが自分の中で変わるかもしれないと思ふ

ていたが、今もつてユーフェミアの心を占めるのは、やはり恐れしかなかつた。

父親が誰かを知りたかったのは確かだ。記憶の中にいるあの人ならいいのに、とずつと思っていた。

だが、実際にあの人があつたなら、どうすればいいのだろう。もう一度会いたいと思っていたが、それは無理だ。会えるはずがない。

心の中が突如、虚ろになつてしまつたような気がした。

「さて あなたは自分の生まれを知つてしましましたが……少し脅し過ぎましたかね？」

ブライアンに言われ、指先を痛いほど握りしめていたことに気がつく。手のひらに食い込んだ爪は痛みを感じないほど、二人の話に動転していた事実を教えてくれた。

「姉さま……」

ジュリアがそつと力を入れ過ぎていた手を開いてくれる。痛ましげな眼差しに、そんなにひどい顔をしているのだろうかと思つ。大きな衝撃を受けたのは確かだが、まだ現実としてユーフェミアの中に受け入れたわけではない。

「ブライアン」

突然、背後に黙つて立つっていたディーンが口を開き、すっかり彼の存在を忘れていた事に気づく。

ディーンがこの場にいてブライアンが話したという事は、この内容を彼も知つていたのだろう。回らない思考を何とか動かしながらゆっくりと振り返ると、ディーンは安心させるかのようにいつもの余裕のある笑みと視線をユーフェミアに向かたまま、ブライアンに話しかける。

「彼女はまだ休養の必要な身体だ。続きはまた今度にしてくれないか」

「そうだつたね。 分かったよ。私は明日の午前中までなら時間が取れる。それまでならば、あなたの為にいつでも時間を取るつも

りです 姉上」

呼ばれた敬称に、ユーフェミアの身体はびくんと震えた。

そうであるかもしぬないが、王太子であるブライアンから敬称で呼ばれることに強い抵抗を感じた。彼らは十数年という長い間、ユーフェミアの存在を知つており受け入れていたかもしぬないが、ユーフェミアにとつてはほんの少し前に知つたばかりだ。まだ他人としか思えない。

困惑を顔に浮かべて、ユーフェミアは首を横に振る。

「私はまだ、現実を受け入れられておりません。たとえそうであつても、名前で呼ばれた方が落ち着きます」

言葉を慎重に選びながら、素直にそれを口にした。

「……わかりました、ユーフェミア殿」

頷いたブライアンが、かすかに残念そうに見えた気がしたが、それはディーンによつて瞬時に意識がそらされた。

「ユーフェミア」

ブライアンの返事とほぼ同時に名を呼ばれ、腕を引っ張られる。反射的にソファから立ち上がつたが、話の内容が強烈過ぎた為か、それともやはり溺れた影響なのか、足に力が入らずふらついてしまつた。

しつかりしないと、とは思うものの頭の奥が麻痺したように働かず、ディーンに支えられて何とか立つていられる始末だ。

だが、背後から肩に手を回すように身体の向きを変えられ、完全にブライアンたちに背を向ける格好になつてから、突如頭の中が鮮明になる。

「ちよつ

「では、先に失礼するよ」

こともなげに平然と言つてのけたディーンに目を見張る。幼馴染かもしぬないが、絶対に王族に対する態度ではない。

残された二人の様子が気になつて顔だけで背後を振り返るが、二人はまるで驚いた様子もなく、そのことにユーフェミアの方が驚愕

する。

ジユリアに至つては視線が合つと、ゆっくりお休み下さい、とま
で親切にも声をかけてくる。

だから、そのまま押されるように図書室を出たコーフィニアの耳
に、ブライアンの呟いた言葉は届かなかつた。

「カーテイスは、どこまで本気なのだろうね」

「……わたくしにも分りかねますわ」

兄妹はあきれたように顔を見合せた後、小さく笑いながらも疲
れた様に身体中から力を抜いた。やはり日頃から張りつめた場に慣
れている二人にとつても、思った以上に緊張する会話であったこと
には違ひなかつた。

11・零れて乾いてく涙は、見ない振りに決めて 後編

西の空へと向かう夕日が次第に赤みを増しながら、廊下に長い影を引きはじめていた。

「あの、ディーン……。一人で歩けるから離してくれないかしら」時折すれ違う使用人たちの視線がはつきり言つて痛い。見て見ぬ振りをしながら、ユーフェミアの肩にチラリと手をやり、口の端をかすかに持ち上げ、愛想良く笑む彼らのその眼差しは、あきらかに好奇の色が混ざつてゐる。

離して、というよりも、離れて、と言いたいのだが。

図書室を出るまではジュリアやブライアンの手前、振り払うのもどうかと思い甘んじて肩を抱くことを許していたのだが、廊下に出てほつとしたのも束の間、いつまで経つてもその手は離れない。

片眉を上げてしばらくその手を睨んでみたが、その手の持ち主は視線に気づいているはずなのに肩を押して歩き始める。

反対側の身体の側面は、完全にディーンとくつついている。この距離は、傍から見れば仲睦ましい恋人同士に見えないだろうか。

立ち上がった時にふらつてしまつた為、ディーンとしては支えてくれているつもりかもしれないが、必要以上にくつつくとかなり歩きづらい。

その上こんなに寄り添つと、馬車で暖を取る為に余儀なく抱きしめられていたことが頭に掠め、途端ディーンと顔を合わせるのが恥ずかしくなる。

「無理はしなくてもいい。何だったら馬車の時のよつに抱えていいんだけど?」

いつもより近い位置でディーンの声が響く。

今までに思い出していたことを言われ、ユーフェミアはむしろ顔が見られない位置について良かつた、と赤みを帯びた顔を何気なくそらした。

先程ブライアンから聞いた話はかなり衝撃的だったが、現在そちらにまで気が回らない。それもこれも隣を歩くこの男のせいだ。

馬車の中で必要以上に身体を密着せざるを得なかつたあの状況は、今思い出してもひどく落ち着かない。

肩に回されたこの手が身体を支える為に、きついほど強く抱き締められた時、一瞬、何かを錯覚してしまいそうになつた。

川で気を失つてしまつたことを、もしかしたらティーンは心の底から心配してくれたのかもしない、と。それはユーフェニアが彼の心を、少しでも占めているという意味で。

まさか、であるが。

「そう言えば、足は大丈夫なのかい？」

考え込んでいたため返事が遅れ、肩を抱かれた手に力を込められ、さらには彼の方に身体が寄る。そのまま顔を覗きこまれ、いつもより近くにある夜色の瞳にわずかにたじろぐ。

だが、すぐに視線をそらしてしまつた。気恥かしさの方が先にくる。

「……大丈夫よ」

照れを隠そうとして、ついぶっきらぼうに言い放つた。

足は、冷え切つた身体を湯で温めていた時、つかまれた箇所を確認したが、かすかに赤くなる程度で誰にも気づかれなかつた程だ。痛みもないし、すでに忘れ去つていたと言つてもいい。

「本当に？」

疑つようになつめられて、ますます素氣無くする。一方、心臓は

ユーフェニアの感情とは逆に次第に早く脈打つてくる。

「ええ。問題ないし、歩けないわけじゃない。だから離してくれない？」

丁度いいとばかりに、再度願い出た。

だが、ティーンは、肩を抱く手に力を込めて返事を返してき

た。否、と。

不快とまではいかないが、無意識に身体が強張る。ここまでくつ

ついていながら意識しないなど不可能だ。まして肩を抱くティーンに悟られないなどあり得ない話で、まったくもつて忌々しい。

頭上から漏れた小さな笑い声に、込み上げる怒りを押さえつけ、悔しさにギリリと奥歯を噛んだ。

「あのね、ティーン」

誤解をして欲しくなくて、何か言わなければと口を開く。しかし。

「コーヒーミニア」

かぶせるように彼の強い声に遮られた。さっきまでの雰囲気とはうつて変わつて、その強さに彼が何を話そうとしているのか気づき、口を閉ざす。

ふと視線を上げると、そこは一階へと続く階段の手前で、数段上ると広めの踊り場があり、そこから左右へと別れ、先は一階へと向かっていた。壁には明かり取りの窓から差し込んだ傾きかけの陽光がますます赤みを増して、コーヒーミニアの上に降り注ぐ。

ぼんやりとその赤を見上げて、家にいればもうすぐイヴァンジョンやリックが目覚める頃だと気づく。彼らは何を話して夜を過ぎてしているのだろうと、思いを馳せる。

ふいに頬を撫でられる感覚に、いつの間にか肩から手は外され、わずか手前、近すぎるほど距離にティーンが立つっていた。

「こんなことになつて、私を恨んでるかい？」

その顔がどこか悲しげに見えるのは、夕日が彫の深い彼の顔に影を落としているからだろうか。

頬に触れる手から逃れるよう顔を背けると、かすかに彼の瞳が暗く沈む。

いつもの余裕はどこに行つたのか、宙に止まつたまま行き場を失つたその手は力なく落ちた。

目の端に、ティーンの存在を留めながら、視線を床に落とす。

先程から考へないように、触れないようにしてていたのに、どうしてティーンはいつも人が油断したところを切りこんでくるのか。コ

「一つ、ミニアが質問してもかわすくせに、」
「今は、何も考えたくない」

知りたいと願ったのはコーフェミニアだ。

自分がこの世に生まれてきたことが、人道にもとる行為の結果であるかもしれないことなど、とうの昔に覚悟をしていたつもりだった。だが、与えられた事実は予想以上にコーフェミニアを打ちのめし、勝手に傷ついているだけであることは分かっている。コーフェミニア自身を否定されたわけではない以上、傷つくのは間違っている。しかし、この心の中に湧き上がる感情は何なのか。

もしもエドが国王でなかつたら？

おそらく話を聞いた時点で、すぐさま会いに行っていたかもしれない。娘だと認めて欲しくないと言えば嘘になる。いや、誰よりもエドに父親であつて欲しかったのかもしない。それがままならないから、こんなにも傷ついて、諦めて、悲しいのだ。

だから、ここでティーンに当たるのは八つ当たりでしかない。いつものティーンのように軽口を叩いて、普段通りに接して欲しいのに。

「……分かった。では、少し昔話をしようか」

察してくれたのか、引いてくれたティーンにホッとする。恨んでいるとかいないとか、考えたくないといつよりも、実際には周りの人の事まで考えられなかつたのだ。

ぐるりと身体の向きを変えたティーンは階段に足を掛け、手をコーフェミニアに差し出すと無言で促す。

この邸に来るまで、馬車の乗り降りで何度も取つてきた行動なので、さすがにコーフェミニアも学んでいる。素直に手を乗せると、安堵したように小さくティーンが息を落とした。

彼はどこに向かおうとしているのだろうか。

手を引かれるまま、コーフェミニアは夕日に赤く染まつた階段をティーンに連れられるまま上つて行つた。

三階はベレスフォード邸の最上階らしく、現在旅行中のフラムスティード公爵 ブライアンの話からするとコーヒーミアの叔父になるのだろう の居住空間になっていた。

公爵の息子は現在留学中で、それをいいことに旅行好きの夫婦は留守がちらしい。邸の者は働き甲斐がないと言つているほど彼らは家を空けていることが多いと聞いた。

その三階の廊下には、ほぼ等身大と思えるほどどの代々の公爵一家の肖像画が掛けられていた。

現在の公爵の前で足を止めたディーンは、肖像画を見つめていたコーヒーミアを振り返るとそつと髪に触れてくる。

「王族の血を引く者は、大抵が蜂蜜色の髪をしている」

言われ、今通つてきた廊下に掛けられた代々の公爵の肖像画が皆、暗い髪色をしていたことを思い出す。現在のフラムスティード公爵は王弟になり、今は亡き王太后の生家である爵位を継いだのだ。

ジュリアにしても、赤みがかった金髪は、きっと王妃に似たのだろう。だが、自らのこの髪色は。

沈みかけた心は、ディーンの声で現実に引き戻される。

「そんな暗い顔をしないでくれ。きみが私を責めていなくても、きみにそんな顔をさせてしまった自分を斬り殺したくなるよ」

「でも、私は……」

この先、どうすればいいのか分からなかつた。

正直、ブライアンがどうして素直にコーヒーミアの出自を話してくれたのか分からなかつた。たとえコーヒーミアが王族の血を引いていようと、彼らに得になることはおそらく何一つないだろう。隠されても不思議ではなかつたはず。

だから、真実を話してくれたことに余計にでも戸惑い、彼らが何を求めているのか底知れない恐ろしさを覚える。この先、自分が望むように生きていいいのか悪いのか、それさえ今のコーヒーミアには判断できなかつた。

「コーエミニア」

強く名を呼ぶその声に、からつじて視線だけを上げる。

正面から見つめてくる夜色の瞳は、コーエミニアの揺らぐ心を惹き付ける。

「私は、きみがたとえ誰の血を引いていようと、きみの生き方を尊敬しているよ」

思いがけないティーンの発言に、うつむきかけていた顔をティーンに向ける。

いつも彼は本音を語らない。だが、この言葉に含まれる音は決して嘘から出たものではなく、彼の純粹な本音に聞こえた。

「ジユリアから私がラムレイ家に養子に入つたことは聞いたね？」

確認を込めて聞かれ、素直に頷く。

「では私がいすれ養父の持つている爵位である侯爵を継ぐことは？」初めて彼から聞く彼自身の話に、目を見開いて首を横に振る。

侯爵。

昔話とは彼自身の事なのだろうか。そう思つてこわかに心がざわつく。

それに不思議だ。最初はティーンが自分の知らない秘密を知つているかもしれないと思って彼の事を知りたいと思つていたはずなのに、父親を知つた今でも、彼の事を知りたいと思つてゐることに気づく。

夕日に染まる廊下は、階下の物音一つ届かない。ただ、互いの呼吸が聞こえそうなほど、静寂に満ちていた。

コーエミニアが黙つていると、ティーンは公爵の絵を見上げながら、珍しく険呑な光をその瞳に宿した。それは肖像画の中の公爵に向けられたものではなく、他の誰かに向けられたものだと話を聞くうちに知ることになった。

トライーン視点です。

きみが心底うらやましいよ 。

思わずこぼしてしまった本音に目を瞬かせたコーヒーミアを見て、ディーンは苦笑を禁じ得なかつた。

コーヒーミアにとつて今まで自分がどのように見えていたのか。心から信じ切つていない表情がすべてを語つてゐる。分かつていたつもりだが、こゝもあからさまだと心がまったく痛まないわけではない。

きつと彼女の事だ。上流階級は人を羨む前に何でも手に入れることが出来るとも思つてゐるのだろう。確かに金や権力を用いればあながち間違ひではないが、自分にとつてコーヒーミアという人間に對してだけは全く当て嵌まらない。

コーヒーミアを羨むのは、何も彼女の身体に流れる血に對して言つてゐるわけではない。

王族の血を引いていながら庶民として育つたコーヒーミア。

彼女の今までの生活は、愛されているが故に与えられ、知らないところで守られてきたものだと彼女は知らないだろう。

代わりに彼女に与えられたものは自由以外何一つない。職人としての実力も、一人で生活していくだけの力も彼女自身の努力の結果だ。

生きていく為に自ら働いて得た賃金で質素で堅実な生活を送りながらも、身分に縛られない自由を手にするコーヒーミアを羨ましいと思つてしまつたのは、自分と正反対の生き方をしているからに他ならない。

養子であろうがなからうが、この身体に流れる血は間違いなく冷徹な養父サイモンの血を引いてゐる。しかしサイモンに引き取られ

るまでは、自分もユーフェニアとそれほど変わらない生活を送っていたのだ。

バルフォア周辺の土地を治めるレイヴンズクロフト侯爵。それがサイモンのもつ肩書きで、こだわり続けたものだ。

なぜその爵位にこだわっていたのか。今のティーンにはよく理解できる。

王都にほどよく近く、商業で栄えるバルフォアは街道の交わる地点でもあり常に活気に溢れている。そのような場所は自然と人が集まり、金の流通も激しい。結果、周辺の土地は潤い、領地は水源の確保など基本さえしつかりしていれば自然と豊かになり、その土地を持つ領主は自らの懐が痛まないどころか逆に膨れ上がる。しかしバルフォア自身には自治権が認められている為、実際に領地の収益につながることはない。

だから今でこそ領地は潤つていると言えるが、かつてはそうではなかつた。

サイモンが爵位を継いだ時、領地は決して豊かではなかつた。土地を整備し、作物の実りを多くするためには元手が必要で、金づかいの荒かつた先代のおかげで侯爵家には資金が足りなかつた。

そこでサイモンは貴族とのつながりを欲しがつている資産家に妹を嫁がすことにして、土地を改良する資金と、もともと子供を作ることのできなかつたサイモンは、生まれた子供が男児であったなら侯爵家の後継ぎとすることを条件とした。

そしてサイモンの妹夫婦の間に生まれたのがティーンだ。

カーテイスという名はサイモンがレイヴンズクロフト侯爵の後継ぎとして名付けたものだ。ディーンという名は本当の両親が付けたもので、引き取られるまではそちらの名前で呼ばれていた。

しかしながら、本来なら見えないものが見えていたティーンは、実の両親から「えられるべき愛情を受け取った記憶はない。むしろ疎まれ、気味悪がられていたところがあつた。その実、貴族に資産を提供できるほどの家に生まれながらも、侯爵家の後継ぎでさえな

かつたら、もつとぞんざいに扱われていた可能性はあった。

侯爵と最初の取り決めどおり、ディーンが八歳になつた時、体の良い厄介払いが出来るとばかりに、サイモンに引き取られた後は両親とは会うこともなかつたほどだ。

ディーンにしてみれば、自分を必要としてくれるサイモンの期待に応えることが、いくら取り決めとは言え、引き取つてくれた礼だとじつつと思っていた。

もともと両親にさえ与えてもらえないなかつた情を、養父になど最初から期待していなかつた。そしてそれを期待できるような養父でもなかつた。上流階級としての教育は厳しく、領地を守つていく觀念を徐々に植え付けられていつたが、それは決して非合理的な考えではなく、むしろ理にかなつたものとして受け入れていた。

このような現実的な物の見方をするところは、資産家である実父の血を引いていたのだろう。

今思えば、どこか冷めたものの見方しか出来ない子供だった。

それと言うのも、ディーンから見たサイモンは、欲深い男だと子供ながらに理解していたからだ。

領地が潤い始めると、サイモンは次に更なる地位を欲しがつた。おあつらえ向きに領地は王都に近い。つまり王宮に近いということ。サイモンは王宮の権力者と次第に親密になり、すぐに次の狙いを見つけた。

それは王女であるジュリアだ。

侯爵家に王族の血を入れる。同時に王女に相応しい身分を与えられることがある。それがサイモンの狙いだつた。

まずは王太子の遊び相手となるようディーンに教育を施し、権力者に渡りあつて上手くその立場を手に入れると、自然と王族に近づくことができた。そうなるともともと口の上手いサイモンのことだ。あとは国王に取り入り、ディーンとジュリアの婚約を口約束まで漕ぎつけたのだ。

そこまで一息に話すと、すでに周囲は薄青い闇を落としてしつつあった。

途中、使用者が廊下で話す一人に気づいたのだろう。灯りを持って来てくれたが、込み入った話をしていることに気づいたのか、少し離れたところにランプを置くと、下がって行った。

コーエミアは最後の一言に驚いたように目を見開いていた。

深緑の瞳はランプの灯りを受け、更に深みを増している。

その瞳の中に、少しでも自分の欲する感情がないかと思わず探していた。

しばらく彼女は黙つたままだが、じくりと喉を上下させると擦れた声を発した。

「婚約……してるの？」

かすかに揺れる瞳をどう捉えるべきか。嫉妬はなくとも動搖ぐらいいはしてくれているだろうか。

内心の期待を抑えながらも、小さな願望が胸に過る。

気づいた時には性質の悪い答えを試すようにぶつけていた。

「ジュリアが二十歳になつたら、正式に決まるだろう」

嘘ではない。すでに社交界でも下火ながら噂は広まりつつある。二十歳を目前に控えたジュリアと口約束だが婚約者の位置に誰よりも近い自分。まだ、抑えられているがそう長くは持たない。

こうしてベレスフォード邸で会つたことさえ、実際にはジュリアがユーフェミアを招待したわけだが、その場に自分がいるだけで曲解されてしまうし、噂を助長してしまう。

噂に後押しされることはだけは、何が何でも避けなければならない。

それが養父の仕組んだことだとするなら尚更だ。

「そう

ふいにそらされた視線は、肖像画へと向かつ。

彼女の横顔から窺える感情の変化はない。たつた一言の返事に、何を期待していたのか。彼女の心中を見極めるために煽つておきな

がら、望まない言葉に不満を覚える。

「少しごらい嫉妬して欲しいな」

限りなく本心に近い言葉を、いつものように軽く告げると、彼女の瞳に陥呑な光が宿つた。

「他人のものに興味はないの」

冷めた口調とは裏腹に、瞳にあるのは怒りだ。

何に対してもヨーフニアが怒っているのか。今まで黙っていたことに對してか、軽口を叩く自分に対してか。

原因是色々考えられたが、何よりも無関心でいられるよりはいい。どのような感情であっても、その感情が自分に向いてる限り、彼女の心の一部分を自分が占領することができるなり。

込み上げるのは喜びだ。

つい頬が緩むと、彼女の怒りは増していく。

それでいいと思いながらも、できることなら怒りではなく、違う感情で心を占めることができたらと思つてしまつ。

だが、まだだ。

時期を見誤れば、彼女は手に入らない。

今は知らされた事実に衝撃を受けて心が不安定になつていて、きっと彼女はこの先も彼女自身の本質をえることはない。王族であらうと平民であらうと、その芯の強さが何よりも彼女の魅力であることを自分は知つている。

彼女を手に入れるということは、その本質を曲げるということだ。いかにその芯を折らずにゆっくりと曲げていくか、それがどれほど時間のかかる難しい作業であることが分かっているつもりだ。

それに彼女は気づいていないが、着実にこちらに近づきつつある。

「話を続けても？」

苦笑を洩らしながらも、どこまで話したかを思い浮かべ、自分と

同様の目を持つ彼女だからこそ、知るべきもう一つの事実を今から告げなければならない。彼女を変える前に、逃げ出してしまわないよう自由に飛んで行ける羽根を切り、手の中にとどめておくために

も。

「ええ

胡乱な眼差しに内心ほくそ笑む。

軽く頷いた彼女に、ディーンはもう一つの驚くべき話を彼女に与えた。

引き続セトイーン視点です。

話し終わっても、彼女は自分の告げた言葉を上手く飲み込めていないようだった。

数度瞬きを繰り返し、やがて深緑の瞳が信じられないと見開かれる。

「母が 王宮に、いる？」

衝撃の強さに、すでに表情を取りつくのひとときも出来ず、不安に揺れる眼差しはただ自分しか見ていない。

そのことに微かな愉悦を覚えてしまう。

思わずユーフェミアの頬に手を伸ばし、そつと触れていた。わずかに赤みを帯びた頬は温かかった。はっきりと生をこの手に伝えてくる。

今でこそセシウムの温もりが甦っているが、氣を失った彼女を馬車で抱きかかえていた時、ただでさえ白い肌が氷のよつに冷え切り、一度とその体温が戻らないのではないだろうかと思えたほどだった。いくら名を呼んでもピクリとも反応せず、蜂蜜色の睫毛に縁取られた深緑の瞳は閉ざされたままで、まさに死と隣り合っていることに嫌でも気づかされた。

だからこそ考えさせられたこともある。ゆつくりと時間をかけて彼女を手に入れる計略を立てていたが、この先何が起こるとも限らない。まさに不慮の事故がないとも言えないだろう。

だから、あのようなことがあつたばかりに気が急いでしまう。

いつそのこと彼女の誇る尊厳を全て無視して捕らえてしまおうか。バルフォアに撒いた噂を真実のものとするのは簡単なことだ。しかし一方でジュリアとの計画を白紙に戻すという問題も生じる。彼女の不安げな眼差しが自分の邪な考えを押し止める。

質問の答えを急かす。

自らの下劣な欲望を悟られないよう、離れ難い手を彼女から遠ざ

け、ディーンが再度告げた声は胸中とは違つて至極素つ氣ないものだつた。

「そうだ。クリスティアナは今も王宮にいる」

それがどういう意味なのか、死者が見えてしまつコーフェミアなら分かるだろう。

緑の瞳が揺らぐ。瞬きをした瞬間、潤みを帯びていた瞳は水分を押し出し、睫毛を濡らすと零となつて頬を転げ落ちていつた。顔を歪めることもなく、ただ呆然と目を見開いたまま涙を流す彼女の心はすでに許容量は一杯だろう。今日一日でどれほどの衝撃を受けたことか。

残酷なことをしている自覚はあつた。

だがこれも、彼女に付け入る隙を作る為だつた。

まして死者を見る目がある以上、彼女とのつながりは他の誰よりもより強く、彼女と唯一の秘密を共有する立場にいる優越感はこの上なく心地良い。

当然、クリスティアナの存在がコーフェミアの心をどれほど揺さぶるか。

この世にどどまつてゐるなら母に会いたいと思つるのは必然だろう。しかも、彼女はクリスティアナとつながりのある自分を必要とせずにはいられなくなる。彼女の心を絡め取るには、彼女の母親の存在が間違いなく何よりの効果を發揮する。

だが、筋書き通りに動く彼女を田の当たりにして、自らの心が疼くことは予想外だった。

「私がきみの存在を知つたのは、直接彼女に聞いたからだ」

それでも、かすかな違和感に気づかない振りをして、ディーンは告げた。

すべての始まりは、王宮でクリスティアナと出会つたことだ。彼女と出会わなければ、コーフェミアの存在を知つても、ただ利用するだけの存在ぐらいにしか思わなかつたかもしない。用が済めば切り捨てることも厭わない養父のように。

そこまで考え、ふとディーンは自嘲した。

いや、それはないだろう。現に、クリスティアナを知っていても最初は利用するつもりだったのだから。では、どこで変わってしまったのか。

ディーンは思いを馳せる。

養父の考えと違う道を歩み始めたのは、あの夜。王宮で何かの夜会が開かれた庭のことだった。

王太子と懇意であるといつて、どれほど社交界で注目を浴びることになるのか。

まだ子供と言える年齢に近いディーンは、会場から逃げ出すようにな庭の片隅に隠れていた。

草木の茂みに身を潜め、追いかけてきた女性をやりすごす。

いずれ継ぐ爵位と王太子からの信頼。この二点において、ディーンはどうやら独身女性から優良物件と思われてることを、はじめてその夜会で実感した。

話に聞いて何も知らないわけではなかつたが、実際に女性たちに遠慮なく身体を触れられることに拒絶反応が起きたと言えばいいのだろうか。きつい香水の匂いにも気分が悪くなり、どのように逃げ出してきたのか記憶にはなかつたが、とにかくディーンは夜会が終わるまでどこかに隠れていようと決めた。

だが逃げる場所も選ばなければならぬこと、その直後学んだ。庭はその実、逢引現場だらけで、どこに行こうとも茂みには身を寄せ合つ男女ばかりで、とにかく無我夢中で庭の奥を目指した。

追つて来る者がいないか背後を振り返りつつ、黒髪と黒い夜会服が闇夜にまぎれることに感謝する。

一体どれほど奥まつた場所に来たのだろうか。

会場からの音楽は微かに聞こえる程度だが、辺りにはすでに人はいない。灯りもかすかに届く程度で、ぼんやりと木々の輪郭のみを

目に映すだけだった。王宮は死者のたまり場のような場所だったが、さすがにここまではそういう者たちもいないようで、やつと落ち着くことが出来る。

昼間でも、ここに人が来ることはないのだろうか。
草が茂り、荒れた庭には人工池があった。水が張つてあり、その辺に一人の女性が立つていることに気づいた。

暗闇であるにも関わらず、彼女の姿ははつきりと見て取れる。
簡素な服は一瞬、王宮で働く下働きの者だろうかと思わせた。しかし、彼女の立ち姿は優美で、振り向いたその顔は化粧をしていくなしても会場にいたどの女性よりも美しいことに気づき、身にまとう雰囲気から彼女が上流階級の者だと分かる。

見事な金髪を背中に垂らし、その双眸にある深い緑色がとても印象的だった。

ディーンと視線が合つと、彼女はにこりと人懐っこい笑みを浮かべた。

『あら、あなたには私が見えるのね？ 娘と一緒にだわ』

その言葉に彼女が既婚者だと分かり、少なからず安堵する。彼女が会場にいた女性たちと同じ態度を取るような心配がないことぐらい分かつていたが。

「あなたは――」

透けて見える彼女が何者なのか。

悪意のあるものではないことぐらい分つたが、彼女がここに縛ら
れていることも同時に知る。

『私はクリスティアナよ。そういうあなたは？』

滑るように近づいてきた彼女だが、近くに来ても恐怖を感じ
なかつた。

それどころか幽霊からまさか名前を聞かれるとは思わず、ディーンは言い淀んだ。

こんな幽霊は初めてだった。たとえ悪意のないものでも、どちらかと言えば、死者とは強い思いの塊だ。彼らは大抵自らの意識に囚

われて、他のことにまで気が回らない。

だが彼女の深縁の瞳は興味津々と言つたように輝いている。

「ディーン、です」

気づけば、養父に与えられた名前を避けていた。それは大切なものだからという理由からではなく、自分にとつて馴染み深い本来の名前を 両親がくれた名前を、本来与えられるべき愛情と共に彼女の口から呼んで欲しかつたからかもしぬれ。彼女が娘を持つ母親だと知つたばかりに。

『ディーンね……。それで、ディーンはどうしてここへ？』
問われ、一瞬躊躇つ。

だが、彼女が死者であること。まして同じ田を持つ人間がそう多くないことを知つてゐるディーンは、どうせ誰に知られることでもないと夜会から逃げ出してきた経緯をぽつりぽつりと話した。

すべて話しことると、しばらくの間静寂が落ちた。

だが、すぐに隣から小さな笑いをかみ殺す声がする。

怪訝に思つて顔を上げると、田が合つた彼女は我慢ならないと声を上げて笑い出した。遠慮もなく、お腹を抱えて。上流階級の女性とは思えないほど気取ることもなく。

真剣に話したのに、と頬を赤くすると、それでも彼女は首を横に振る。涙が出るはずもないのに、目元を拭う仕草を見せる。

思つ存分笑いとばすと気が済んだのか、今度は急に真面目な顔をして、ディーンに指を突き付けてきた。

『駄目よ。なつてないわ。逃げると誰だつて追いたくなるものよ。そういう場合は、あしらうのよ』

そう言つて、クリスティアナはいくつかの例を教えてくれた。

つまり、逆に女性の方から遠慮してもらう例とか、女性の気分を害さない断り方とか、だ。

それを聞いて、やはり彼女が上流階級の者であることを確信する。着てゐる服は簡素だが、何か事情があるに違いない。

『あなたはどうしてここに？』

死者と深く関わりを持つべきではないと思いつつ、ディーンはそれでももう少し彼女と話してみたいと思つた。上品ぶらない彼女の会話は、昔を思い出し、久しぶりに清々しさを感じていた。

クリスティアナは最初見ていた場所に視線を送ると、小さく笑う。

『大切な人の一生を見届ける為よ』

「あなたの娘さん？」

近くにいるのだろうかと周囲を見渡すが、ここは王宮の庭の奥だ。こんな場所にいるとは思えない。

その問いに、クリスティアナの表情はやつと死者のそれになる。

瞳の奥に闇が広がる。

『……ユーファは強いわ。ナフムもいるし、大丈夫。でも』

軽く首を振つて、ディーンを見た。

その瞬間、その瞳はどこまでも穏やかな緑が広がり、ディーンの心をとらえる。

死者の瞳がこんなにも穏やかなのは初めてだつた。それなのに、なぜここに縛られているのか。

大切な人が娘でないなら、それは一体。

尋ねようとして、彼女の視線が自分の背後に向く。

『もう帰る時間ね』

そちらは会場の方だつた。

名を呼ばれる声に会場での出来事を思い出し、一瞬身を固くしたが声はあきらかに男のもので、探しに来たのはどうやら侯爵の使いの者らしいと気づく。

ディーンはクリスティアナを見ると、思わず尋ねていた。

「あなたはいつもここにいるの？」

『ええ』

肯定の言葉以外、彼女は何も言わなかつた。

それは決して、次を約束するものではなかつた。

だが、それから王宮で夜会がある度に、ディーンは彼女に会いに庭の奥を訪れることとなつた。

ディーンの手を握り、その手に願うより額を当たたユーフェニアは、震える声で嗚咽を漏らす。

「お母さん……」

本来なら、彼女もクリスティアナを見る目を持つている。だが、母親であるクリスティアナが亡くなつたあと、ユーフェニアは一度も母親を見ていないので。まさかまだこの世にとどまつてゐるとは思つてもいなかつたのだろう。

いつも気丈に振る舞うユーフェニアが弱さをせらけ出す姿に、思わず抱きしめたくなる。もつと縋つてくれてもいいのにと、物足りなさをどこかに感じる。

まさか自分がこのよつた感情を持つよつになるとは未だに信じられなかつた。

まつたく、いつからだろう。彼女をそういう対象としてみるよつになつたのは。

最初こそ、クリスティアナの娘だというだけの興味半分だつたのに。だから五年。同じ街に住み、傍観していた。

情報は常に入るよつにして、生活に苦しんでいるならば、少しうらいの援助など容易いことだと考えていた。

だが、実際に会つた彼女は上流階級の女性とは違ひ、盤上の駒のように容易く動いてくれない。一手をより複雑にしなければ自分の思い通りにならないことに気づき、知らずそれを楽しんでいる自分がいた。実際に彼女を知れば知るほど、人に頼ることなく自分で選んだ道をまっすぐに歩く彼女を心底羨ましいと、手に入れたいと思つた。

しかし最初のうちは、ただ珍しい手駒として手に入れたいとしか考へていなかつた。

言ひ方は悪いが、所詮、彼女も貧しさが染み付いてゐる。身分や金銭をちらつかせば、すぐに考えを翻すだらうと思つてゐた。

同時に進んでいたジュリアとの共謀に彼女を巻きこむことにしたのは、彼女の身体に流れる血が最大の要因だが、そういう浅ましい考えもなくはなかつたのだ。

だが、いつまで経つても彼女は折れない。その強さがどこからきてるのか。知らうとした時はすでに遅く、捉えるつもりが逆に捉われていた。気づけば、手駒としてではなく、何よりも自分の身近にいて欲しい存在になつていた。

こうしていつも手を伸ばせば届くところにいて、触れることができなう距離。

だが理性でそれを押し留める。

まずは心を捉えるために、隙だらけの彼女に今だとばかりに一步踏み込む。

今までの散々のやり取りで、彼女が嘘を見抜くことは知つていて、だから本心からの言葉を、先に口に乗せた。

「きみは生まれに囚われず、自分の生きる道を自分で切り開いてきた。私はそんなきみを羨ましく思つと同時に、尊敬さえしているよ」だからこそ思う。養父のいいなりになどならず、きちんと自分の意思をもつていれば、ジュリアとの婚約を最初からしなくて済んだかもしれないし、彼女自身も傷つけなかつたかもしれない。それこそもつと上手く立ち回つて、もつと早くコーフュミアと出会いれば

「きみはきみのままでいいんだ」

濡れた瞳が見上げてくる。

その瞳は先程までの、搖らぎはない。もう彼女の中では気持ちの整理がついている。これから成すべきことが、すでに決まつていてに違ひない。

「本当に？」

空氣に溶けるほどの囁きをされ、ディーンの耳は拾つてしまつ。

確認を取るほど彼女の心は弱り、最後のひと押し欲しいのだろう。その言葉を自分に望むということは、彼女の中で自分の地位が

少しは上がつてこると思つていいだらうか。

そのことに小さく笑い、彼女の手を握り返す。

「変わる必要はない」

「ゴーフェミアが望まないのであれば、今までの生活を続けることは可能だ。

おそらく彼女の出生を知つてゐる誰もが、彼女が望むよつこと願つてゐる。

だが

「ゴーフェミア」

誰よりも、彼女の自由を望まないのはディーン自身だ。自らが自由になるためにも、是非にも彼女の協力が必要なのだ。

その上でなお、彼女の自由を奪おうとする欲深さは、まったくもつて養父と同じだ。それでも彼女が自らこの手をつかむより、それが一番彼女にとつて幸せなことなのだと思わせるよう、周囲を固めてしまつう慎重さはもうどうしようもない。性分だ。

その為に布石を一つ打つ。

「ジュリアとの婚約を破棄する為にも、私の婚約者になつてくれ」告げた言葉に、ゴーフェミアの涙は完全に止まつた。

まるで仕切られた壁の向こう側で「ティーンが話しているような気がした。

聞こえてはいるが耳がその言葉を拾い切れない。切れ切れの単語を頭の中で繋いでいく作業を、わずかに遅れながらしていく。とても重大なことを話していることだけは分かる。だが、次第に組み上がっていく内容を、頭が理解し切れない。

母が、なに？

今もいるって、どうこうこと？

茫然と夜色の瞳を見つめる。

彼の口が紡ぎ出す言葉は、いつもコーフュニアの心を上滑りする。なのに今、頭では理解できなくても、どうしてこれほどまでに心に突き刺さるのか。幾重にも厳重に鍵をかけ、守ってきた心の奥まで容易に進入し、一番弱いところを躊躇いなく突いてくる。

母が亡くなつて、どれほど年月が過ぎたことか。

その間、一度もコーフュニアの前に彼女は現れなかつた。だからきっと心安らかに神のもとに召されたのだとずつと思つていた。それなのに……。

沸き上るのは、悲しみに塗まみれた疑問。

どうして一度でもいいから会いに来てくれなかつたのか。

母が死に切れないほど残した想いとは何だったのか。

それがよりもよつて、王宮という場所なのは、娘の自分よりも気にかかる人がいたから？

それほどまでにクリスティアナにとつて自分は軽い存在だったのだろうか。

ただ一度も、会いに来ることえないほどに。

胸が張り裂けてしまいそうだった。

視界が霞む。

答えを教えて欲しくて、田の前の夜色の瞳に問う。
だがティーンは、真っ直ぐに自分を見ながら違う誰かを見ている
よつこ、その瞳に熱を込めた。

ああ、そうなのか と。

ゴーフュニアは溢れる涙を、田を閉じることによつて押し込めた。
それでも心の奥から溢れだす痛みは途切れることはなく。
頬に延ばされた手を、咄嗟につかみ、逡巡した後、結局祈るよつ
に額に当てていた。

この手は、クリスティアナに延ばされたもの。
自分に与えられたものではない。

答えは彼からは貰えない。欲しくない。
だけど、母につながる唯一の標^{しべい}。
だから、この手を離すことは出来ない。
溢れる涙をこじらえることなく、ゴーフュニアはその手を握り続け
た。

冗談でしょう？

前日の夜もよく眠れなかつたといふのに、昨夜も眠りは浅く、何度も目を覚ました。

物音一つしない室内に響くのは、自身が寝返りを打つ度にする衣擦れの音と、口から漏れる溜息ばかり。

暗闇に仄かに浮かぶ天井を見上げてみると、昨夜ディーンに言われた言葉が頭の中で何度もこだまする。

コーフェミア自身、心がぐらついていたのは確かだ。

彼が自分に向ける眼差しに誰を重ねていたのかを知った時、同一の人物を慕つからこそ、今までとは違う関係を築けるのではないかと思う反面、彼に対するかすかな妬みが生まれたのも事実だ。

それは意外な感情の変化をコーフェミアにもたらした。

彼との間にあつた垣根を一足飛びに飛び越え、今までなら無防備で不用心に思えていたことでも、たつた一人の存在一つでコーフェミアの中でディーンに対する距離は確実に縮まつていた。

あえて言つなら家族に向けるものに近い。

度重なつて告げられた真実は息苦しいほどの苦痛を与え、剥き出しへされた心を甘やかして欲しくて、母との時間を過ごした彼を妬み羨む気持ちもあつたが、それよりも互いに秘密を共有しあう者として、そして彼女を慕う気持ちを分かりあえるという点においても、思わず目の前のその胸に縋りつきそうになつていた。

それはディーンが本音を見せてくれたからに他ならない。だから、そのまま甘えてしまおうかと思えたのに……。

あの一言は、コーフェミアに現実を思い出させ、踏み止まらせた。ディーンに握っていた手をすかさず振り払つたとしても仕方のないことだらう。

心臓が飛び出しそうになつたことは、もちろん秘密だ。

ディーンの明確な意図は、結局その場で教えてもらえなかつた。いつものように余裕のある笑みを浮かべ、肩を竦めただけだつた。明日になつたらジュリアと三人で話し合おうということになつたのだが、明日とはもう今日の事だ。厚いカーテンの隙間からはまだ朝日さえ差し込んできていないが、これ以上眠ることも出来そうになくて、コーヒーミアはあきらめて上体を起こした。

時計を見ると、おそらく邸の者も起き出す頃合いだ。朝食まで時間はある。何か温かい飲みものでも貰おうと、取りあえず身支度を済ませることにした。

両手にカップを握り、立ち上る湯気に息を吹きかける。

昨日、自らの出自を知つた図書室に明かりを灯し、昨日と同じ場所に腰をおろした。

昼間はあれほど暖かい日差しが差し込んでいたといつに、夜も明ける前だからだろうか。窓の外は暗く、むしろ冷氣が押し寄せてくる。

使用者が暖炉に火を入れてくれたが、部屋が暖まるにはまだ時間がかかるだろう。

火の爆ぜる音を聞きながら、寒よけのストールを身体に巻き付け、カップに注がれた甘めのミルクティーを一口含む。

考えなければならないことはたくさんあつた。

だが、二十五年も一人で生活してきたのだ。今更何かを望まれているわけでもないことぐらい分かる。名乗りを上げるような馬鹿な真似をするつもりもない。平穀な暮らしを望むなら今のままでいいのだ。ディーンも言つていたではないか。このままでいいと。だけど。

コーヒーミアは深々と息を吐いた。

一番の問題は、そのディーンだ。

「のままいいと言いながら、^{貴族}彼の婚約者になれ、というのは如何なものか。おそらく協力して欲しいと言っていたのは、婚約者の演技をしろということなのだろう。もし了承すれば、それは否が応でもその世界に足を踏み入れることになる。

平穏を望む自分にとつて、正反対のことになるのではないだろうか。

じわりと込み上げる不安と同時に、すでに引き返せない場所に立つている予感がする。

なぜなら、ユーフェミアの欲望が心の奥で密かに芽吹いたからだ。それは抗いたい魅力で、昨夜からユーフェミアの心の片隅で囁いている。

口では平穏を望みながら、一度だけいいから、遠くから姿を見るだけでいいからと、エドワーズ国王に会いたいと思つてゐる自分がいる。そして何よりも、王宮には母がいるという。聞きたいことはたくさんある。だが庶民であるなら、決して立ち入ることの許される場所ではないし、まして国王に目通りが叶うわけでもない。

そう考へると、必然的に一つの道しか残されていないことに気づく。

ディーンの婚約者としてなら、王宮に出入りすることも可能かもしれない。まして彼は王族と懇意だ。国王を垣間見る機会はあるかもしれないし、母にも会えるかもしれない。

ユーフェミアの考へが辿り着く先など、ディーンにはお見通しだったのだろう。

きっとこれは彼が用意した道に違いない。

周到に用意されていたことに気づいた時には怒りと通り越して呆れてしまつたが、この用意された道がどこに向かつてゐるのか。ディーンがどういう思惑でこの道を準備したのか。

互いの目的の為に、誰かを傷つけるわけがないなら、ユーフェミアとしても自分の小さな望みを叶える為にディーンたちに協力するのは願つてもないことだ。

カップをテーブルに置いて目を閉じる。そして自分の心中でもう一度問いかける。

それは最初から変わりはしない。父親が誰であろうと、自分の生きる場所は一つ。

まつくりと目を開けると、肅然と決意を固める。

この気持ちが揺るがない限り、どんなことにも流されることはない。

ならば、一人に協力してもいい。

テーブルに置いたカップを手に取ると、ユーフェニアは腹を括つてソファから立ち上がった。

耳には鳥のさえずる声が、夜が明けたことを告げていた。

図書室を出たところで、朝も早い時刻だというのに思いがけない人物とかち合つた。

「……おはようございます」

一応挨拶はしてみたが、淡褐色の瞳はふいつと逸られ、思つた通り返事はない。

視線が逸らされたことをいいことに、思わずまじまじとアシュレイを見てしまう。

自分と同じ蜂蜜色の髪。淡褐色の瞳は屋内にいる為か、縁がかつて見える。常にユーフェニアに対しては敵意をむき出しにしているが、目尻はどちらかといつと下がり気味 要はたれ目で、普通にしていれば優しげに見え、女性からも人気がありそうに見えるのだが。

これが弟になるのか。

未だに現実を受け入れられていない為、やはり他人としか思えない。

じつしてみるとブライアンとアシュレイはあまり似ていない。蜂蜜色の髪は同じだが、瞳の色も顔立ちも似ていない。むしろアシュ

レイはジコリアとよく似ている。

と言つことは、イヴァンジエリンとも似ているのか……。

そう思つと、瞞みついてくる所など可愛いものだと思えてしまつから不思議だ。

「……もひ、いいのか？」

顔を逸らしたまま、アシュレイがポツリと漏らした。

「はい？」

一瞬、家にいる人形のことを思い出していた為、咄嗟に何に對して言われた言葉か分からず、ぼんやりしてしまつた。しかし、すぐに何のことか思い当たる。

川で溺れかけたのは昨日の事だ。色々なことがありすぎて随分前のことのように思つていたが、アシュレイとはそれ以来会つていなかつた。

「大丈夫です。あの……」

上目づかいで様子を窺う。

嫌われているのは仕方がないが、初日に骨が折れるのではないかとこうほど手を握られて以来、何かされるのではとつい警戒してしまう。現在もアシュレイと普通に会話をしているが、通常他の人と会話をする距離よりも一步分離れている。まるで、お互いの心の距離を表しているかのように。

だが川に落ちそうになつた時、助けてくれようとしたのも事実だ。

「ありがとうございました」

礼を言つて損ねていた事を思い出し素直に頭を下げるが、ようやく淡褐色の瞳が正面から見つめてきた。

「……カーテイスが煩いからな」

口では渋々といった様子だったが、その顔を見ると満更でもなさそうだ。

しかし、どういう心境の変化なのだろう。

少なくとも最初の刺々しさは見られない。むしろ先程は心配を匂わすことを口にしなかつただろうか。

その変化が、ディーンに起因するものであるのは少し意外だった。

「ディーンとは仲が良いんですね」

言つた後、さすがに気安すぎたかと口を噤む。

アシュレイは嫌そうに顔を歪めると、不機嫌そうに胸の前で腕を組んで再び余所を向いた。

「あいつには敵わないからな」

どういう意味なのか計り兼ねる。確かに悪賢いとは思うが。

それが顔に出ていたのか、イラついたようにアシュレイは、わずかに強い口調で言い放つ。

「おまえもつぐづく不運だな。いくらジュリアとのこととは言え、カー・テイスは一度決めたことは何が何でも自分の思い通りにする。この場に担ぎ出された時点で、おまえに選択の余地はない」

嘲つているのか、同情してくれているのか。

思わず目を見開くと、アシュレイは言に過ぎたとばかりに苦々しく顔を歪めた。だが一度堰を切つたものは止まらないようで、さらには言葉は続く。

「昨日も言つたが、別におまえと慣れ合つつもりはない。血がつながつてゐると思つていい氣になるな。もしもおまえが少しでもジュリアのことを思つなら、一人の茶番に付き合つのは止めた方がいい。私は最初からカー・テイスを止めるつもりでここに来たんだ」

「それは、どういう

冷静なアシュレイに対し、一方コーフュニアは不穏なものを感じ、ざわりとしたものが心の奥で蠢く。

血が身体中を駆け巡るのに対し、心の奥は冷えていく。

「私がカー・テイスに敵わないからといって、おまえを牽制できないわけではない」

「ちょっと、待つて」

コーフュニアは一方的に告げられる内容に、無意識にアシュレイに一步近づいた。

途端、アシュレイの手が空を切つてコーフュニアがそれ以上近づ

くことを押し留める。

「ジユリアがカーテイスと婚約していることをどれほど喜んでいたのか、おまえは知っているのか？」

「え？」

完全な不意打ちだつた。

ディーンとジユリアは共通の目的 婚約を破棄にする為にコーフェミアの協力を仰いでいたのではなかつたのだろうか。

だが、ふとジユリアが先日話してくれた相手がディーンであることに結びつく。権力で縛つてしまつのが嫌だと言つたジユリア。その為に、わざわざ婚約者の手を離すのだろうか。

「そういう事だ。よく考えるんだな」

果然とした表情から、コーフェミアが知らなかつたことに気づいたらしい。言い捨てるように言葉を放つと、アシュレイは背を向けて了。

一方的に言われ、一人廊下に取り残されたコーフェミアは、先程腹を括つた決意が早くも揺らぎ始めていた。

鈴の音を転がすような笑い声を上げたジュリアは、堪え切れないとばかりに一頻り笑つていたが、ようやく笑いをおさめると、姉さま……と腕に縋りついてきた。

その顔はとても穏やかで、コーフェミアの憂慮を吹き飛ばす。

「心配は無用ですわ。過去のことですもの」

ふわりと甘い香りが、身を寄せた彼女から漂つ。

人形のように可愛らしいジュリアは、こう見えて実はかなり潔いのかもしない。

現在、温室にはジュリアと二人しかいない。

ディーンは今朝早く、仕事上のことで何やら問題が生じたらしく、ロジャーと一緒に籠つて話しあつていたので、そのまま一足先にジュリアと一緒に温室にやつて来たのだ。

温室は太陽が出ていれば上着がいらないほど暖かいが、空はあいにく雪が降りそうな重く立ち込めた灰色の雲に覆われている。それでも空気の流れもなく、室内を一定温度で保つために焚かれたストーブのおかげで邸の中よりは格段と温かい。

朝一番にアシュレイと交わした会話のおかげで、コーフェミアは無意識に浮かない顔でもしていたのだろう。原因をジュリアに問い合わせられ、初めは誤魔化したもののどこからともなく彼女は嗅ぎつけたらしい。怒られたアシュレイは、やつてられないと昼前にブライアンと共に王宮へと帰つて行つた。それでも帰り際にちらりとこちらに向けた眼差しで念押しすることを忘れなかつたが。

結局、更に詳細を問い合わせられ、コーフェミア自身の口から話す結果となつてしまつた。

ジュリアは身を離してベンチに座り直すと、真剣な色を湛えた空色の瞳を向けてきた。

先程までの甘えた雰囲気を拭い去つた彼女が、何を話そうとして

いるのかを察し、コーエミア自身も姿勢を正す。

「コーエア姉さまでなければ無理なのです」

先日、この場で言つた台詞とまったく同じ言葉を口にした。

「それは

今なら理由が分かる。

だが口に出すには憚られ、ためらうと、ジュリアが言を繋いだ。
「ええ。姉さまが、ひそかに王族の血を引いているからですわ」

きつぱりと言い切り、次の瞬間、瞳に影を落とす。

「そもそも、わたくしたちの婚約はすべてレイヴンズクロフト侯爵カーテイスの養父である侯爵が言い出したもの。たとえ口約束でも侯爵は、カーテイス以上に計算高い方ですわ。まずは、というより、何をおいてもわたくしたちの婚約破棄を誰よりも納得させなければならぬ相手は侯爵ですの」

それはつまり、二人が婚約破棄を目的に動くことは王族側の反対はないと思っていいのだろうか。ディーンからも口約束と聞いていたから、そこまで固い約束事ではなかつたのかも知れない。

促すように相槌を打つと、ジュリアは続けた。

「ですけど、それはかなり難しいのです。侯爵を納得させるには、生半可な理由では不可能です。ならば、わたくしが他の誰かと早々に婚約なり発表してしまえばいいのでしょうか、王女という立場が相手を選ばずのです。一応、それでも候補を上げてはいますが、わたくしの二十歳の誕生までには決まらないでしょう。そうなると、カーテイスにわたくしの代わりとなり、侯爵の納得する女性と婚約してもらうしかないのです。今現在、王族でわたくしに準ずる女性は皆、既婚者ばかり。ですから

ジュリアの視線がコーエミアに向けられる。

「つまり……私？」

まさかと思いつつ、次の瞬間、無理、と却下する。

名乗りを上げるつもりはないのだ。ジュリアの話からすると、王族にならなければならぬだらう。それは出来ない。

小さく頭を振ると、ジュリアは困ったように、取りあえず続きを聞いて下さい、と告げた。

「結論から言うと姉さまがカーティスの婚約者となつて、公式の場で国王に認めてもらえば、もつ侯爵は口を出せません。その後、何か理由を付ければ婚約の破棄をすることも出来るでしょう。ですが、ここで何よりも重要なのは、ひそかに姉さまが王族の血を引いているということ。きっと侯爵のことです。王族に恩を売ることがができると考え、最終的には認めざるを得ないでしょう」

「……恩？」

引っかかりのある言葉に、眉を顰めて聞き返した。

ジュリアは言いづらそうに、だが、濁すことはしなかつた。

「……こういう言い方はとても不本意なのですけど。見方を変えれば、姉さまは王族に迎え入れられなかつた王族です。それは今まで隠されてきたことから、姉さまの存在をこれからも公にすることはないという王族側の意思表示とも取れます。つまり姉さまは、わたくしの姉といえども王族にとつて 弱み、とも言える存在。そんな姉さまを王族としてではなく、侯爵家に迎え入れるということは、恩を売るに他ならないことですわ」

ですけど、とすかさずジュリアは続けた。

「決して姉さまはわたくしたちにとつて弱みではありません。もしも姉さまがお嫌でないなら、王宮で一緒に暮らしたいと思つています」

「

じつとこちらを見つめてくる彼女の瞳は真剣だ。

そんなことをすればどれほど大変なことが起きるか、ゴーフュニアも分かつている。

ジュリアが自分を傷つけないよう言つてくれたことを察し、思わず頬が緩む。落ち着くように彼女の手をポンポンと叩いた。

「どうして私でないといけないのかは分かつたわ。でも……」

言葉を続けようとして、温室の入り口に人影を見つけ口を閉じた。話が話だけに人払いはされており、ここも王弟殿下の邸で使用人も

心得ているだらうが念の為だ。しかしコーフェニアの心配をよそに、扉を潜つてきたのはティーンだつた。姿を目に止め、視線でジュリアに報せる。

「彼女も気づき、取りあえず会話を止めた。

「ひどいな。抜け駆けは良くないよ」

近づきつつ、彼の視線はジュリアに向ぐ。

ジュリアもそれを受けて、不敵に笑つた。

「あら。抜け駆けを最初にしたのは、あなたでしょ? コーファ姉さまの弱みにつけ込んで、理由を付けては毎日のようないいに行つていたではありませんか?」

椅子に座つたまま、上目づかに軽く睨むジュリアの言葉をしばし吟味する。

弱みが何を指しているのか。少し考え、すぐに借金の件だと思い当たる。

今まで、その件に關しては自分の弱みと思つたことはないし、骨董品店を開くと決めたことも理由を付けたとは考えもしなかつたが、なるほど。言われてみれば最初から企んでいたのかもしない。

やはり悔れない、と思わずじとじと見つめると、ティーンは肩を竦めた。

「否定はしないよ」

開き直つた態度に、ジュリアはあきれたように首を横に振り、コーフェニアも開いた口が塞がらなかつた。

そんなコーフェニアを夜色の瞳が見下ろしていく。

「それもこれも、きみに会いたいが為だと信じてくれないのかい? 偽りの台詞に表面的な取り繕い。

どうして昨日は、こんな人に甘えてしまおつと思つたのか。それほど自分の心が弱つていたのか。

「コーファ姉さま……。カーティスの言葉を信じてはなりませんわ、どこから出してこいるのかといつぐらこ低い声を出したジュリアは、ベンチから勢いとつけて立ち上ると、コーフェニアを背に庇うよ

うに一人の間に立つ。

腕には力が入っているのか、小刻みに震えている。

「まったくあなたという人は、いつも女性に對して調子のいいことばかり。もしも相手の女性が本気になつてしまつたらどうするつもりですか？」

あからさまに陰を含ませるジュリアに対し、ディーンは心外だとばかりに両手を広げた。しかしその顔にはどこまでも余裕がある。「何だかその言い方は、私が女性に對して見境ないようになつてゐるけど？」

「違わないでしよう」

すかさず返したジュリアの言葉に、ふーん、違わないんだ、とゴーフェミアは冷めた眼差しをディーンに向ける。

こちらを見たディーンは、何か言おうと口を開きかけたが、言い返しても結局は言い訳にしか聞こえないことに気づいたのか、大人しく引き下がつた。

「……ジュリア。取りあえずその件は後にしよう。ゴーフェミアの協力が得られなくなるとお互いまずいだろ？」「

それでもちやつかりこの会話の責任を半分ジュリアに押し付けてしてしまうのは、ディーンの方が上手なのだろう。

ハッとしたように、ぐるりと身体の向きを変えたジュリアは、慌ててゴーフェミアの顔色を窺う。

「姉さま！ その、カーテイスは……女性の扱いに慣れておりますの。伊達に場数をこなしてしませんわ！ 協力して下さつても、きっと不快な思いをさせるようなことはしないと思いますの！」

両手を握りしめて力説するジュリアを見ながら、彼女の必死さが窺えて苦笑が漏れる。

「……ジュリア。それではあまり説得力がないよ」

「ここにきてようやくディーンは苦々しい顔をする。

参つたとばかりに天を仰ぎ、息を吐き出すと、困つたようにこちらを見る。

「少なくともきみに対して嘘は一つもついていないよ」

「へえ、そう」

言ひ訳などひりでもいこと顔を背けると、ディーンは眉尻を下げた。

「コーフェミア……。いや、取りあえず、言いたいことは曰ほどあるが、それもまた今度にしよう」

やけにあつせつと引き下がると、ディーンはジュリアに曰くばせする。

それに頷き返したジュリアは、コーフェミアの側から数歩離れた。代わりにディーンがコーフェミアの前に立ちふさがる。

「なに?」

ベンチに座つてゐる為、背の高いディーンを見上げるには多少首が痛い。かすかに首を傾げるよつにして見上げると、それに気づいたのか、彼は床に片膝をついて跪き、コーフェミアに視線を合わせてくれた。

目が合つと、その瞳はいつになく真剣さを湛え、先程までの軽々しいものが取り戻される。

夜色の瞳はコーフェミアだけを見つめてくる。

何か、大切な話をしようとしているだけは分かる。息を詰めて、彼の言葉を待つた。

「きみに、正式に依頼したい」

それが何の話なのかなど、今さらだろ?。

コーフェミアは無言で続きを待つ。

「私たちの勝手な理由できみを巻きこもうとしているのはわかつてゐるつもりだ。それでも、私たちに協力してくれないか」

声も真摯そのもので、コーフェミアの胸の奥がかすかに軋む。ディーンは視線を少しもそらすことなく、続けた。

「ジュリアの言つようによつて不快な思いをさせんつもりはないし、きみの社会的地位を下げるようなことは絶対にしないと約束しよう。ただ、最初に言つておくが、多少のリスクがないわけではない。もし

かすると、きみにある程度の無理を強いることも出てくる可能性もある。それも踏まえて、私たちの計画に協力してもらいたいと思っているんだ」

「……そんなこと言つて、私が拒否するとは思わないの？」

答えなど分かつていていたが聞いていた。

拒否など出来ないよう、最初から仕組まれていた。ヨーフェミアの心がどこに傾いているのかを彼は知っている。多少のリスクなどものともしない意氣込みがヨーフェミアの中に生まれていることも。ディーンは口の端を持ち上げた。その顔はどこまでも自信に溢れ、ヨーフェミアの方が先に視線をそらしていた。

「きみは拒否しない」

耳に飛び込んできた言葉に、目を閉じる。

違うかい？ と問われ、ヨーフェミアは諦めて視線を戻した。

「違わないわ」

夜色の瞳を見てはつきりと告げると、ディーンは頬をゆるめた。ただ、それだけ。

なぜ、とも、どうしても、とも聞かない。

彼はやはり分かつてているのだ。

ヨーフェミアは覚悟を決めると、ディーンの手を差し出す。そして、側に立つジュリアを見上げて、はつきりと告げた。

「わかったわ。あなたたちに 協力する」

言つてしまつた。

口から出た言葉一つで、すべてが動き始める。

協力をする意味で差し出した手は、なぜかディーンに手の甲を上にして持ち上げられた。その所作の目的をユーフェミアが予測できなかつたのは、ひとえに彼が目を奪うような嫣然とした笑みを浮かべたからだ。

ディーンはユーフェミアの手を自らの方に引き寄せると、そのまま手の甲に恭しく口づけを落とした。

それは貴族としての挨拶なのか、協力者として感謝を込めたものだったのか、ユーフェミアは口から出かけた悲鳴を飲み込むのがやつとで判断することは出来なかつた。

一方、助けを求めるようにジュリアを見ると、彼女は彼女で胸の前で祈るように両手を組み、頬を薄桃色に上気させ、空色の瞳を輝かせている。その態度が予想以上に何かを期待しているような気配を匂わせ、ユーフェミアは開きかけた口を思わず閉ざした。

正直、反応の良すぎる一人に、しり込みしなかつたわけではない。頭の片隅にも早くも辞退の一文字が浮かび上がつたが、軽く頭を振つて自らの目的を思い浮かべると、ふと先程ディーンが温室にやつてくる前にジュリアとの会話が中断してしまつていたことを思い出した。

聞きたかつたのは、今朝アシュレイから聞いた話の再確認だ。

アシュレイの言葉が未だ心の奥底に漬のよう沈んでおり、何かの拍子にそれは舞い上ると、今までのジュリアの態度にどこか納得できない不可解さを感じてしまう。その違和感が何なのかな。はつきりとした形が見えないながらも、ユーフェミアは取りあえず目の前の状態をどうにかすべく問い合わせた。

「ねえ、ジュリア」

口を開きながら、ディーンの手の中にある白いの手を引っ張った。不自然に思われず、いかにして手を解放してもうつかという理論みだつたのだが、軽くつかまれた指先は離されることはなかつた。その手を気にしつつ、今更だと思いながらも、ジュリアに感じた違和感とは違うもう一つの気になつた件を口にする。

「どうしてジュリアは……いえ、あなた達は婚約を破棄したいの？」

「当然、最初に聞いて然るべきことだつた。」

だが、上流階級の裏事情に首を突っ込むのは、庶民として分不相応な行為であるし、事実、身に危険が迫ることもある。うつかりで済まないかもしない事態は出来ることなら遠慮したい。

しかし、この度はその限りではないだう。すでに巻き込まれてゐるし、おそらく身の危険^{云々}も心配はないはずだ。協力する以上はある程度の情報は仕入れておくべきだし、口では関わりたくないと言いつつも、実のところまったく興味がないわけでもないのだ。つまり、好奇心から純粹に知りたかった。

ジュリアは目を数度瞬くと、一点の曇りもない笑みを浮かべた。

「先程も申しましたけど、このような男^{かた}はお断りですの」

どこまでも柔軟な雰囲気を醸しながら、ちらりとディーンを見る瞳だけはどこまでも冷ややかだ。

コーフュミアは首を傾げる。

それが通用する立場なのだろうか。ここ数日で仕入れた知識を総動員すると、ジュリアの言つてることは王女といつ立場上、單なる我儘になるのではないだろうか。

彼女は冷めた眼差しをディーンに向けたまま、先程コーフュミアに言つた台詞をまったく違う意味合いで言つてのけた。

「女性の扱いに慣れておりますのよ？ いえ、慣れているのは時と場合によって役に立つこともありますけど、裏を返せば一体どれほどの女性と遊んでござられたのでしょうか、といつことですか」

「……」

思わずちらりとティーンを見てしまつ。

ジュリアと同じ眼差しで。

たしかに彼女の立場を考えると、それが婚約を破棄する理由としては納得しかねるものではあつたが、単に同じ女性としてなら共感できた。そんな男はお断りだ。

「 ジュリア」

苦々しい表情を浮かべたティーンは、コーフンニアと視線が合つとスイッチとそらし、ジュリアを咎めるような眼差しを向ける。その視線を受けたジュリアはそっぽを向いた。

「 姉さまにはもう話しましたし、カーティスも今更ですけど、確かに昔はあなたに淡い想いを抱いていたことがありましたわ。ですけど、所詮小娘の戯言と取り合わなかつたのはあなたですし、わたくしも若氣の至りですわ。…… そうですわね。もつと人間的に優れた方を選ばせてもらえた機会を貰て下さつたあなたには感謝しますわ。ですけど、そうなるとこの婚約ははつきり言つて邪魔なのです」
「 こりと笑つていうジュリアから、何か得体の知れないものを感じる。

それは明らかにティーンに向けられているものではあるのだが、日頃の彼女とは何かが違うような気がして胸の中に蟻わだかまを落とす。

「 でも、ジュリア」

「 姉さま」

ピシリと言葉を遮られる。

空色の瞳が、無言の力で発言を押し止める。

聞かないでくれとその瞳は告げていた。

どうやら彼の前で話したくないことらしい。口を閉ざすと、彼女は一度ゆっくりと目を閉じ、次に目を開いた時にはいつもの雰囲気に戻っていた。

「 ……ですから、姉さまが引き受け下さり、これほど嬉しいことはありませんわ。もちろん協力のために姉さまがカーティスの毒牙にかかるては本末転倒ですし、出来る限りわたくしも姉さまの負担

を減らすつもりです」

「ディーンを一警するジユリアは唇を引き結ぶ。

完全に対決姿勢を見せる彼女に、懸念が必ずしも払拭できたわけではなかつたが少しだけ胸をなで下ろす。

しかし、ジユリアの視線がすつと動き、冷ややかにその一点コーフュニアの手をつかむディーンの手を見つめていることに気づいた。

すっかり忘れていたが、彼はまだ手をつかんだままだつた。

「……いい加減、手を離してくれないかしら」

手を引くように引っ張るが、昨夜のように簡単にその手は離れない。むしろ、かすかに力を込められたような気がして眉を寄せる。

「ディーン」

少し強めに名を呼ぶと、それにかぶせるように彼はジユリアに向かつて言った。

「少し席を外してくれるかい？」

先程までこの場でしていた会話を、まるで聞いていなかつたかのよくな口ぶりと笑顔を彼女に向けた。

その笑顔にジユリアの瞳がかすかに上がる。何か言おうと口を開きかけたが、吸い込んだ息を結局深々と吐き出すと、諦めたように了承した。

「……かまいませんけど、姉さまに何かなさいたら容赦しませんことよ？」

「分かつてるよ」

明らかに王女に対する態度ではない仕草で、空いた片手で彼女を追い払う。

少々のことには寛大なジユリアもそれには顔を顰めてみせた。だが、どうやらディーンとの付き合この長老に言つだけ無駄だと思つたのだろう。

心配げな視線を一度こちらに向けたが、ぐるりと背を向けると温室から出ていった。

その間もずっと手を捕らわれていたコーフェミアは、なんとか取り戻そうと振つてみたり引つ張つてみたりしていたが、何だか遊ばれているような気分になつて無駄な足掻きは止めた。

顔を上げると、こちらを見下ろすディーンと視線が合つ。その瞳が、誰を見ているのか。

どことなく居心地の悪さを覚え、ジュリアが去つた後、途切れたままの話題を探した。

そう言えば、ディーンが何故婚約を破棄しようと思ったのか、そのことさえコーフェミアは知らないのだ。それなのに協力を引き受けたことは早計過ぎたかもしれない。

しかし今更そんなことを思つても仕方が無い。彼らの婚約破棄の目的は、コーフェミアの望みを叶えることに直接関わるものではないだろうし、知つていようといまいと結果は一緒だと思つた。

が。

やはり、知りたいのは好奇心だ。特に、ディーンの理由は気になつてしまつ。

彼もジュリアを追い払つたほどだ。何か話があるのだろう。それはあまり人に聞かれたくない類の話なのかもしない。つまり、クリスティアナの話の可能性も高い。だが、なぜだかそれを思うと、明らかにディーンに対する妬みが心の中に湧き出し、母のことを聞きたいと思う一方、耳も塞ぎたくもなる自分もいる。

だが、この沈黙は堪え難い。

「ディーン」

コーフェミアは捕まれた手をくいくいと引っ張つて、自らが座っているベンチの隣をもう片方の手で叩くと、ディーンはどことなく楽しそうな顔をして隣に腰を下ろした。

それと同時にようやく手を解放され、ホッとしつつも、彼が落ち着く前に彼の話から逃げるように質問を口にしていた。

「どうしてあなたは、その……婚約破棄したいの？」

視線をさまよわせ、ちらりと隣を窺う。

いつかディーンも言つていたではないか。

貴族社会の結婚に自分たちの感情が入ることはない、と。

ならば、二人は否と言えないのではないだろうか。

「ああ、それを今から話そうと思つていたんだ」

こちらを見たディーンの笑顔は清々しいほどさっぱりしており、逆にユーフェミアの胸に不安が立ち込める。その夜色の瞳の中にあるのは、紛れもなく自分の意思を貫き通す強さだ。

もしかして、いきなり核心をついてしまった？と思わずユーフェミアは座つたまま、じりじりとあとずさつていた。

「私はきみとの婚約をその場しのぎで済ますつもりはないよ」耳に飛び込んできた言葉に、思わず目の前の男を凝視していた。どこか不敵な笑みを浮かべるティーンに対し、コーエミアの頬は次第に強張つていく。

いつもと同じ軽口のはずなのに、中身の重さがまったく違う。その場しのぎで済ますつもりではないのなら、どういづつもりだとうのか。

答えは一つしかない。

たどり着いた結論に、血の気が引く。

まさかと思いつつ、尚も違う可能性を考えてみる。

一体、なぜこのような話になつてているのか。確か、彼とジユリアが婚約破棄をするに至つた理由を聞いていたはずだったのだが。コーエミアはこめかみを押さえ唸つた。

「ちょっと、待つて。意味が分からないわ。だってあなたたちは婚約を破棄する為の協力だつて……」

もとを糾^{たた}せばそうだつたはず。

しかし告げられたのは、先程のその場しのぎではないといつ発言。ティーンは混乱するコーエミアに尚も追い打ちをかける。

「ジユリアからどう聞いたのか知らないが、私はきみに婚約者になつてくれと昨夜言つたじゃないか」

「いや、でも、それはあなたのお養父さまを言つくるめる為じゃないの？」

言葉は悪いが断りを入れられるほど構つていて余裕はなかつた。彼自身も別段気にしてた様子も見せずに話を続けた。

「第一の目的はそうだが、これは国王さえ巻き込む話だ。国王を謀れば……いや、それ以上にきみと嘘の婚約をしたことが国王に露見したら私はただじや済まないし、何より私はもとから嘘を吐くつも

りはなかつたよ？」

飄々とした態度で、こちらを楽しげに見つめてくる。

先程から彼の口調とは裏腹に、言っている内容が重みを増しているのは気のせいだろうか。ずしりと胃の辺りが重くなる。

つまり。

国王を謀らない為に保身で婚約を真実にするのか。いや、もとから嘘を吐くつもりはないということは、本当に彼自身の意志で結婚する気があるということだろうか。

どちらにしろ、ゴーフェミアにとつて有り難くない話だ。

引きつる口元を無理矢理上げると、口からは乾いた笑みしか漏れなかつた。

冗談としか思えない。

「……でも、私はあなたと結婚する気はないし？」
見解の相違は早い段階で解決しておくに限る。

今後のことを見据えても誤解されたままでは困るので、その点だけは分かつてもうつつもりだつた。

「今まで、だらう？」

「これからも、よ」

強調された言葉をすかさず投げ返す。

一体、どこで齟齬が生じてしまつたのか。

当惑するゴーフェミアをよそに、ディーンは少しも狼狽せず、わずかに眉を上げただけだつた。

「一つ聞いてもいいかな？」

「何？」

「どうして結婚するつもりはないんだい？」

「どうして結婚しなければならないの？」

一人で生活していくだけの力は取りあえずあるつもりだ。

今の生活に不満はない。ならば、結婚などする必要がどこにあるのか。

上流階級のように義務的に結婚する必要は庶民にはないのだ。

それに昔から感じていたのだが、どうやら自分には家族との縁が薄いような気がしてならない。誰かと結婚して家庭を築いても、その先の幸せが見えないのだ。それは酷く心の中を不安にする。

本気でヨーフェミアが言っていることによつやくディーンも気づいたのか、やつと面食らつた表情を見せた。

軽く天井を仰ぐと、小さく何かを呟いた。

それがどこか呆れているように見えて、心の奥に痛みが生じる。おかしなことを言つたつもりはないのに。

「私はあなたたちに協力するけど、あなたといえ、誰とも結婚するつもりはないのよ」

声に滲んだ不機嫌さに気づいたのか、ディーンはこちらを振り返ると、何かを決意したように頷いた。

「分かった。この際、きみの信条はどうでもいい

そう告げると、なぜだかおもしろむずつに見つめてくるディーンに、さらに不愉快さは増していく。

どうでもいいと言われたことにも腹が立つ。

「ヨーフェミア」

まるで宥めるようにこちらに手を伸ばしていく。その手が触れる前に払い除け、軽く睨みつける。

「……私が聞いている質問に、私の信条がどう関係しているつづりのよ」

当初の質問から離れてしまつてこることに気づき、どうにか話を引き戻す。はつきり言つて、まったく関係ないではないか。ディーンが婚約破棄したい要因と、ヨーフェミアが結婚したくないことなど何の関わりがあるというのか。

ディーンはこちらをじつと見つめると、思わずぶりな笑みを口元に浮かべた。

「それは、半分はきみのせいだからだよ」

意表をつく台詞に瞬間言葉を失つて、すぐに首を横に振る。

「まったく身に覚えがないんだけど？」

何故そうなるのか分からぬ。しかも婚約破棄の原因を人に転嫁するなどいふ迷惑だ。その上、言葉の裏には責任を取れといふ意味合いが含まれているように聞こえるのは氣のせいだろうか。

ディーンは軽く笑うと次いでその胡散臭い笑みを消し、ふと懐かしむような目をした。それは昨夜とまったく同じ瞳だった。

「きみの母親 クリストイアナに会つてから、自分の考えと養父の考えに差があることに気づいたんだ」

神妙な様子を見せる彼に、騙されではならないと思いつつも黙つて耳を傾ける。

「それが年を重ねる」とに苦痛を伴うようになつてね。ジュリアから異性として慕われていることにも気づいていたが、養父の思い通りになることに嫌悪を覚えて、どうしても彼女を受け入れることは出来なかつた。だから、ジュリアから婚約の破棄を申し出られた時、むしろホッとしたよ。……そう、商売を始めたのも養父に反発したことだ。表向きは自分の力試しと言つていたが、生まれた時から貴族社会に身を置いてきた養父はあまりいい顔をしていない。だが、商売はある意味、養父の目の届かない場所で自由な時間を持てたという意味でも、収穫のあるものだつたよ」

そう言って、こちらに穏やかな目を向ける。

「自由な時間を持てたおかげで、養父の裏をかける。今回の計画はかなり前から準備をしてきたが、私の相手を務める女性がどうしても見つからなくてね。役に溺れることなく、養父に流されず、それでいて私の相手として周囲に納得させることができる女性はそうはない。きみの存在は知つていたが、実際に人となりを知るまでは、きみを候補にさえ上げていなかつた」

穏やかな瞳がこちらを見つめる。コーフェニアを通して母を見ているのではなく、おそらくコーフェニア自身を。

そのことにどこか落ち着かない気分にされながらも、ベレスフォード邸に来てからずっと疑つていたことの答えでもあることに気付く。

つまり、出会い 자체は彼が仕組んだものではなかったと？
本当に偶然だったと思つていいのだろうか。

「コーフェミア」

再度伸びてきた手が、今度は払い除ける間もなくコーフェミアの手を握る。

思わず身体に力が入り、その手を見つめながら全身がディーンの声を拾い集める。

「きみがすぐに適役だと気づいたよ。私の持つ肩書きを前にしても靡くどころかむしろ嫌悪した。だからと言つて態度を変えることもなく……。きみを知れば知るほど、面白い女性だと思ったよ。役だけで終わらすには惜しいと思わずにはいられなかつた」

思いのほか近くで聞こえる声にそつと視線を上げると、すぐ間近に夜色の瞳があつた。

だが、その瞳はすぐに伏せられる。

「いや、そうじゃないな。途中から目的は関係なく、きみのことが気になつて仕方がなかつたよ。きみとの会話が楽しくて、仕事と称しながらも会いに行くのが待ち遠しくてたまらなかつた」語られる言葉が、ゆつくりとコーフェミアの心の中に落ちてくる。だがそれは、必ずしも滲み入ることはなく。

コーフェミアは軽く首を横に振つた。

彼の言つていることは、特別だと言つてはいるわけではない。物珍しいという意味でも取ることが出来る。

今までも、コーフェミアに近づこうとする者は幼馴染であるケイトの言を借りると何人かいたらしい。しかも彼らからは最初に珍しいという言葉を大抵告げられていた。しかしすぐに興味を失つてしまふのか、知人以上の関係になることもなく、コーフェミアもまたそれ以上の関係を望まない以上、どうにかなることはなかつたのだ。だからディーンも一緒だらう。

面白い　物珍しいだけで、コーフェミアも今までの者たちとそ
う大差ないと思つていた。

しかし。

グッと手を強くつかまれ、自ずと意識を向かわされる。再び視線を上げると、再度夜色の瞳と視線が合わせた。

「だから」

思いのほかその声が強くて、ゴーフュニアは咄嗟に自らの手を取り戻そうとした。視線を無理に外し、思わず誰かに救いを求めるよう温室の入口に目を向ける。

しかし、初めから込み入った話をする目的でジュリアが人払いをしていたのだ。当然、誰もおらず。

違うと言しながら、彼が何を言わんとしているのか本当はどうかで分かつていて。

そんなこと、正面切って言われた経験はない。

どうしたらいいのか、わからない。

聞いてはならない言葉を聞いてしまつような気がして、心が逃げ出そうとする。

物珍しいだけで済ませればいい。

しかしゴーフュニアが逃げ腰などなど、テイーンにはお見通しあしく、さらに手を強くつかまれた。ついにほ、もう片方の手を頬に添えられ視線を戻される。

今、認識できる視界にはテイーンしかいない。

逃げられない。

息を飲んで見つめるゴーフュニアに、テイーンは挑発的に微笑んだ。

「きみの信条がどんなものであれ、私はきみを手に入れるつもりだよ。もちろん、心じとすべて。私のことも好きにさせてみるよ」

宣言された言葉は、完全にゴーフュニアの心中に深くに突き刺さった。じわりとそこから滲み出たものは痺れるような痛みを伴いながらも、なぜかとても心地良く、彼の発言に抗いたいのに、どうしても口を開くことは出来なかつた。

ぼんやりと見上げたガラス越しの空は、重苦しい灰色の雲に覆われ、外気との温度差が激しい為かガラスは白く曇り、外の景色を完全に遮断している。しかし冬だというのに常緑に覆われた温室は、上着を着なくとも大丈夫なほど温かい。

一人、ユーフェミアはベンチに座っていた。

ぼんやりと霞んだ空を見上げながら、必死に心を宥めていた。

その後、さらりと頬を撫で上げられ、完全に固まっていたユーフェミアは我に返ると共に、いつの間にか握られていた手が自由になり、後頭部に回された彼の手がディーンとの距離を縮めていることを知ると、咄嗟に目の前にあつた彼の口元を手で覆つた。

何をされようとしたのか、分からぬはずはない。

あの発言に、この状況、この状態。

だからといって、ユーフェミアが触れることを許した覚えはない。

「調子に乗らないでっ」

言つた瞬間、怒りがこみ上げてきた。

口を覆われたディーンは一瞬、目を瞬いたが、ユーフェミアが覆う手を取ると、かすかに笑みを浮かべたまま、なんとそのまま手のひらに口づけを落としてきたのだ。

「な、なな、何をするのよ！」

悲鳴を上げ、逃げるようになにベンチから立ち上がつた。

捕らえられた手を力任せに取り戻すと、完全に彼の手の届く距離から離れる。

「何つて？ 好きな女性にキスしたいと思つことはおかしなことかな？」

「許可した覚えはない！」

いや、それ以前に好きな女性つて……。

瞬間、頬が熱くなる。

面と向かつて言われ慣れていないと、照れくさいような面はよいような、決して向けられる好意が嬉しくないわけではないが、この

歳になつて舞い上がつてしまつたことがそれ以上に恥ずかしい。

それを悟られたくなくて、赤くなつた頬を怒氣で誤魔化す。

「は、話を元に戻すけど、つまりジュリアと婚約を白紙に戻すのは自分の為なのね？」

話からすると決して、コーフュミアのせいではない。つまり、責任を取る必要もないはずだ。ディーンの言つ「その場しのぎ」もコーフュミアが否と言えば、丸く収まる話ではないか。

次第に本来の自分を取り戻すコーフュミアに、ディーンはベンチから立ち上ると一步近づく。

「まあ、そうだね」

何気に距離を縮めようとする彼と同時にコーフュミアもまた一步下がる。

一二、二回それを繰り返し、結局引いたのは彼だった。
肩をすくめると、

「一応話は済んだが……私は欲しいと思つたものは必ず手に入れるから」

と、何気に捨て台詞に近い断言をし、去つていくその背中はなぜだか楽しげだった。

それから一人取り残されたコーフュミアは、ベンチに座り直すと誰もいないのをいいことに顔を覆つて悲鳴を上げた。

恥ずかしすぎるし、完全に高ぶつた感情は静まらない。

顔も胸の奥も熱い。

一時そのままでしたが、ようやく顔を覆つ手を除けると、ゆつくりと空を見上げた。白く曇るガラスの向こうで雪が降つていて、初めて気づく。

そう、浮かれている場合ではない。

コーフュミアの目的は、あの人を一眼見ること。そして母に会うこと。その為の一歩を踏み出したといつて、どうやっても心の中からあの夜色の瞳が消えることはなかつた。

なんだか、違和感。

五日ぶりに帰ってきた自分が、コーヒーミニアをあつといつ間に非日常から日常の世界へと戻してくれた。

夕暮れ時に現れた祖父のナフムもあまりにもいつも通りで、何故だか拍子抜けするほどだった。

「おじいちゃん……」

赤い日差しが斜めに差し込む居間に、ひつそりと佇むその姿に思わず涙ぐむ。

胸に湧き上がってくるのは確かに安堵感もあった。しかし、それは明らかに違う感情も同時に湧き上がる。もつとどんびりとした、どちらかといふと後ろめたいもので、唇を噛み締めないと思わずナフムを責めてしまいそうになる。

年月と共に色濃くなつた床の板目に視線を落とし、自らの影だけが長く横引いているのを見つめる。

自分の生まれを知つてからずっと、考えずにはいられないことがあつた。

もしもティーンと出会い前に知つていたら、彼らを近づけることはなかつたかもしれない。

平穏な生活を望むのであれば、ティーンたちとの関わりはひどく心を乱されるものだ。

だが、実際に彼らと関わってしまった今、もしも、はあり得ない現実だ。今更だと思いつつも、だからと言つてこのどうじょうもない不安を消せるわけではない。

しかしいくら不安だからと言つても、ナフムを責めることなど出来るわけがない。彼は死者だ。本来ならすでにこの場にいる者ではない。自分を心配してこの世に留まつてくれてこるというのに、何

故責めたることなど出来よ。

むしろナフムが生きている時に、自らの生まれを知りうとしなかつたのはユーフェミア自身だ。現実から目を背けて逃げていただけなのに、それでも教えてくれていたらと思つてしまつのは、やはりナフムに対する甘えがあるからだ。

唇を噛み締めて床を見つめていると、透けた身体がふわりとユーフェミアの正面に回ってきた。

小柄なナフムはユーフェミアよりも背が低い。少しだけ手を伸ばすようにしてその手は蜂蜜色の髪に触れる。視界の隅では、いつものようにナフムの手がふわふわと揺れていた。

『どうしたんじゃ？ 楽しくなかつたのか？ 何か嫌なことでもされたんじゃなかろうの？』

いつもと全く変わらないナフムに、内側に湧き出た負の感情を吐き出すように吐息した。

そして疲れたように笑つた。

「大丈夫。ちょっと疲れただけ……」

ナフムは心配性だ。だからこつして自分の側にいて、いつまでも神の御許に行くこともできないのに。

これ以上、心配をかけるわけにはいかない。こうして側にいてくれるだけで十分なのに。

『どうか？』

尚も心配そうに見つめてくるナフムに笑顔を向けたが、幾分ぎこちなかつたのかもしね。誤魔化すようにソファに座つたが、あきらかに眉間に皺を寄せたナフムは何を思つたのか、ユーフェミアの少し上

背後に視線を向けた。その視線は鋭く、もの言つたげ

だつたがすぐに首を横に振つた。

『疲れたのじやつたら今日はもつ休んだ方がいいぞ？ わしの晩飯はいらんからな？』

そう言って、再び頭を撫でてくれた。

その手つきはどこまでも優しく、ユーフェミアを甘やかす。

だから今まで気づくことはできなかつたのだ。この皺だらけの手に、いつまでも縋りついて甘えていることは出来ないのだと。

深夜。

疲れていったはずなのに目は冴える一方で、眠りは一向に訪れる気配もなくユーフェミアはランプを片手に一階へと向かつた。

いつの間にか習慣になつてしまつてゐるなんて。

自らの行動に苦笑がこぼれる。

彼らも変わることなく、悪態をつきながらもユーフェミアを迎えてくれ、なぜだかナフムと対峙した時とは違い、むしろ彼らの方にほつとしてしまつた。

だから思わずリックを力任せに抱きしめてしまい、あとで散々彼にシンバルが壊れるじゃないかと文句を言われたが。

いつものようにソファに腰を下ろし、膝の上にリックを置いてイヴァンジエリンに問い合わせるまま、ベレスフォード邸での出来事を話していたのだが

『なんですか？ 婚約者つ！？ テイーン様のつ！？』

一言発する毎に震えながら高くなつていいくイヴァンジエリンの声に、ユーフェミアはたまらずリックから手を離し、耳を押さえた。ある程度は想像していたが、久々のけたたましさに思わず目も閉じる。

『おいおいおいおい……一体、何の冗談なんだ？』

流石のリックも呆れ半分、興味半分といつたところだらうか。ユーフェミアの膝の上で横向きに転がりながらも、訝しむ声と同時に力チャツとシンバルを打ち鳴らす。

視界の端で、おろした髪がランプの明かりを受け、鈍く輝く。

一方、人形の瞳がユーフェミアの発言に陥呑な輝きを出したような気がした。

『どうしたことですか？！？ 説明なさい！？』

ジュリアによく似た人形は、穏やかに微笑みながら声高に命じた。

すべて話し終わる頃には、冬の深夜だからなのか、はたまた目の前の人形が発する何かなのか、さすがに寒さが身に凍み始めた。両腕をさすり、それでもぶるりと一つ身震いするとショールをぎゅっと身体に巻き付ける。足元はすでに冷え切つてるのでどうしようもない。この状態で眠れるわけもなく、だからと黙つてこの不安を彼らに話しても、どうにかなるわけではないことぐらい分かっていたが、それでも誰かに聞いて欲しかったのだ。

無意識に彼らを選んだのも、おそらく適役だからだ。

死者の声が聞こえる者はそういうない。コーフェミアが秘密の一つや一つ話しても漏れることはないだろうし、彼らが話す相手は所詮、ディーンぐらいだ。ナフムのように親身になつて自分と同じように心を痛める心配もなければ、むしろイヴァンジエリンのように怒鳴つてくれるぐらいの方が、いつそ清々しい。リックもきつと鼻で笑つてくれるだろう。

そうやつて笑い飛ばして、大したことではないのだと思つたかつたのに、むしろ鼻白んだのは彼らの方だつた。

『あなたが……王女……』

『お姫様だったのか……』

二人して言葉を失い、コーフェミアの方が慌てる。

「えつと、リック？ イヴァンジエリン？ そこでどうして黙つちやうのよ？」

驚きで声が出ないというより、コーフェミアに流れる血に対して畏怖を感じている様子の二人に、コーフェミアの方が愕然とする。死者に王族とか身分とか関係ないと思つていた。

『あ、ああ。いや、うん……』

最初に立ち直つたのはリックだったが、なぜだか歯切れが悪い。

『小娘が、王女……』

イヴァンジエリンの内心が垣間見えた気がしたが、未だ放心している彼女はさておき、手の中のぬいぐるみを見下ろす。

「でもね、だからと言って私が私であることに変わりはないし、何かを望んでいるわけじゃないのよ。ディーンの婚約者になつたからと言つても、これはお互に利害が一致したからで……」

言いつつ、次第に頬に熱が集まり始める。

身震いするほど寒いはずなのに、じんわりと身体の奥が熱くなる。ディーンがベレスフォード邸の温室で宣言した言葉は、思い出すたびに胸の奥に熱を灯す。ただ、自分でも舞い上がっているだけだと頭で理解していても、心の奥が勝手にざわめくのだ。

『そう、利害の一致……』

ふふっと、ひそやかな笑い声が耳に届く。

それは低く、イヴァンジエリンの全身から発せられ、空気が揺れて伝わってくる。

『そこにあなたの感情はないと断言できるのね？』

冷ややかな問いに、咄嗟にリックを両手で握りしめると、迷うことになく頷いた。

だつて迷う筈はない。例え自分が何者であろうと庶民であることに変わりはないのだ。この場所で生きていいくと決めているのだ。ただ一度、上流階級の婚約者になり、用が済めばこの茶番も終了だ。自分の目的を果たすために彼を利用するのだ。

そう、利用するのだから。

すつと、胸の奥に灯つた熱が消えていくのが分かった。

どこからともなく入りこんだ風が、蠟燭に灯つた明かりをかき消すように、それは本当に唐突だった。

リックを握りしめていた手から力をぬくと、ふうっと長く息を吐き出す。

思い出した。自分の立場を。

自らに流れる血が何であれ、ナフムやクリスティアナが望んだのは、庶民としての自分。彼らはそこに、ユーフェミアの幸せがある

と見定め、コーフェニア自身もそうだと思つた。

「……私の生きる場所はここでしかないのよ」

たとえディーンが宣言したように彼のことをこの先好きになつたとしても、彼の隣を歩けるわけではない。

最初から、答えなど出しているのだ。

『ちょっと待てよ』

コーフェニアの氣を引くよつて、膝の上でカチャツとシンバルが鳴る。

リックから聞こえる声はどことなく不満氣だ。

「リック？」

首を傾げて問うと、リックはもう一度カチャツとシンバルを鳴らした。

『イヴァンジエリン。おまえが口を出すことじやねえだろ?』

『何ですつて?』

途端、人形から鋭い怒氣が向かつてくる。

しかしリックはそれを軽くかわすと、今度はコーフェニアに意識を向けてきた。それはどこか怒つているようで、思わず身構えたコーフェニアは、口クリと息を飲み込んだ。

『おまえもな。こんな人形ごときに言われて何怖氣づいてんだよ?』

『……べ、別にそんなことは……』

決してイヴァンジエリンに言われたからではない。

だが、何故だか反論する言葉が浮かばなかつた。

『そんなんじや、あいつの婚約者なんてつとまらねえぞ? ただでさえ王宮は魑魅魍魎の住処だつて言われてんのに……。あ、ちなみに魑魅魍魎は俺たちのことじやねえぞ。生きた女だつて話だからな。こいつに負けるようじや、おまえぐらい簡単に頭から喰われちまつぞ』

カチャツとシンバルを鳴らすと、なぜだかリックは不機嫌そうに締めくくつた。

イヴァンジエリンも最初こそは金切り声を上げていたが、リック

のシンバルと共に急に静かになる。

彼の言つた魑魅魍魎とは、想像したくなかったが誰のことを指しているのか。ベレスフォード邸で王太子であるブライアンから聞いた話で容易に想像がついてしまった。

彼の母親パメラ王妃は、婚約中にその座を狙う女性たちから嫌がらせを受けたと言つ。

つまり。

ユーフェミアはディーン自身の口から彼が優良物件だと聞かされていたのだ。彼の肩書はとても魅力的で、人当たりの良さも相まってつまるところ、ジュリアの言葉を借りるなら、女性の扱いに慣れるほど女性に不自由はしていないと言うことだ。

ユーフェミアの頭にはディーンが自ら率先して遊んでいたとばかり思っていたのだが、実情は違うのかもしれない。いずれ手に入る侯爵夫人の肩書を狙う女性がそれだけ多いと言うことではないだろか。

もしかして王宮での第一関門は、身分云々もだが着いた瞬間、彼女たちに阻まれることもあり得ると言うことか？

考えた途端、血の気が引いた。

壁が高すぎる。

「はは……」

『笑つたつて何にもなんねえぞ』

ぼそりと呟かれた言葉に、ユーフェミアは完全に頭を垂れた。簡単にリックに言い負かされた。

だが。

『なりませんわ。あなたが貴族の小娘に負けるなど、わたくしが許しませんわ！』

ふいにイヴァンジエリンから今までにない闘志の滾りを感じ、ユーフェミアは顔を上げた。

穏やかな表情の彼女からはとても想像できないほどの霸気を感じる。

「イヴァンジエリン?」

『わたくしに考えがありますわ。猿に口を出すなどは、もう一度と言わせませんことよ?』

根本的に何かが違うと思いながらも、そう言つた彼女は高らかに笑つたのだった。

「だからってどうしてあなたがここで夕食を食べているのよ？」「いつぞやの食卓同様、テーブルの向かい合わせに座る男にゴーフェニアはすぐ尋ねた。

本日の夕食もほとんどがディーンのお手製だ。しかも何故だかお酒持参などころに計画的なものを感じる。ゴーフェニアも勧められるまま飲んでいるが、どうしてもこの成り行きに納得がいかなかつた。

「婚約者と少しでも長く一緒に過ごしたいからじゃないか」「さも当然という口ぶりで言つてのけるディーンは至極満足げだ。

『誰も認めとらんぞ！…』

すかさず飛んだナフムの否定の声にも彼はどこ吹く風と言つたよう人のいい笑みを浮かべ、その自信は一体どこから来ているのだろうと首を傾げくなる台詞を吐き出す。

「彼女を幸せに出来るのは私だけですよ？」

『ゴーフェニアが幸せかどうかを決めるのは、おまえさんじゃない。ゴーフェニア自身じゃ！』

いくらナフムが声高に正論をがざしても、ディーンには一向に堪えないらしく、軽くかわしている。

当然と言つよう大きく頷き、嘘くさい誠意をひけらかす。

「もちろん、私は彼女に対し努力を惜しむつもりはありませんよ」

『それはつまり、ゴーフェニアが認めたわけじゃなく、おまえさんが勝手に言つているだけなのじゃな？』

疑念たつぱりの応酬にも、ディーンは余裕で肩を竦めただけだ。

『いいえ？ そんなことはありませんよ』

そんな言い合いを先程から延々と続いているのだ。ゴーフェニア

の目の前で、当の本人を無視したまま。

最初こそ、一人の言い合いに気を揉んでいたが、互いになんやか

んやと言いながら、どこか会話を楽しんでいるように見えなくもない。一人とも頭と口の回転が早い分、その掛け合いも歯切れがいい。次第に口を挟むのも馬鹿らしくなって、コーエフュニアは黙々と食事を済ました。

ナフムには「ディーンとの婚約のことは人助けだと説明したのだが、詳しいことは話していない。ただ、全てが済んだら、いつもの生活に戻るつもりだと話してある。

大人げなくも本気になつて突つかかっているナフムにやれやれと思いつつ、食器を片づけにかかる。

昨夜、イヴァンジエリンに一つのことを言われたのだ。

一つは、コーエフュニアの心境をどのように解したのか、ナフムが出自を黙っていたことを決して責めない事。そして、正直に自分の生まれを知ったことを告げること。まだ、そのことは言えてもいいが、おそらく何かを感じていて。夕刻、ナフムが現れた時、どこか悲しげな顔をしていたが、ディーンの姿をみるとすぐに血相を変えて、いつもの祖父に戻つてしまつたので確認できていなが。もう一つはディーンに直接話すから、彼が来たら引き止めると言われたのだ。引き止めるまでもなく居座つたが。

一体、彼女は何を企んでいるのやら。

ぼんやりしながら冷たい流水で皿についた汚れを落としていた為、水の音でディーンが側に来たことに気づかなかつた。

「手伝おう」

横から伸びてきた手が、コーエフュニアの洗つていた皿を奪つ。どうやら考えに耽り過ぎていたらしい。

シャツの袖を捲り上げ、そこから伸びた意外と逞しい腕に心の奥が再びざわめく様な気がして、振り切るようにコーエフュニアは視線を上げた。

「ここはいいわ。イヴァンジエリンがあなたに話があるやつよ。先に聞いてきたら?」

台所は今まで一人で使つていた為、一人でいると意外と狭いこと

に気づく。その上、ディーンとの距離は思ったより近い。

追い払う意図を持つて告げた言葉は、どうやら彼にもお見通しのようだつた。

「別に片付けてからでも構わないだろつ。私は少しでもきみと一緒にいたいのに」

「どことなく拗ねたような口調に、消えたはずの胸の奥の熱がかすかにふり返すような気がした。

これは錯覚だ。

言い聞かせながら視線をそらすと、素つ氣なく告げる。

「はいはい。だつたら、あなたは洗いものをお願いね」

濡れた手を前掛けで拭いて、くるりと彼に背を向けた。

背後で、小さな溜息が聞こえたような気がした。

ゴーフミニアは突つ立つたまま、一の句が告げなかつた。絶句、とはこうこと、ことを言つのだろつ。息さえ飲み込み、瞬きも出来ずにただイヴァンジーリンを見つめる」としか出来なかつた。一方、ディーンはソファに座つて長い脚を優雅に組み、肘掛に片肘を乗せた姿勢で、彼女の言葉を思案する素振りを見せながら口の端を持ち上げた。

近くでカチャカチャというシンバルの音がするが、今はそれどころではない。

「何言つてるのよつ。どうして私がディーンの家で暮らせなければならぬのよ！」

つまり、イヴァンジーリン曰く、貴族の令嬢に対抗するためにはまず見た目から見下されないようになければならないらしい。

もちろん、服装、所作、その他話し方やマナー、当然会話をすればある程度の知識も求められるといつ。

ついでに現在着てゐるくたびれた服についても、物言いたげに溜息を吐かれた。

家に戻つてきつて以来、コーエミアは以前から着ていた服に戻してゐた。汚れても氣にならないし、むしろティーンに贈られたドレスは庶民が着るには実用的ではない。

しかし。

『あのね、コーエミア。あなたもお父様に会いたいのなら、それなりの礼儀^{マナー}を身につけるべきではなくつて？もちろん、あなたの為でもあるのよ。社交界で恥をかいて令わせる顔がなくなるのは嫌でしょ？』

至極まつとうな言葉に聞こえたが、裏を返せば彼女の意図は明白だ。

コーエミアがティーンの家で世話になると聞つことは、彼女たちの本来の目的であるコーエミアの監視も移動するということだ。ティーンの側にいたい彼女は、それを口実に彼の元に戻るつもりなのだ。

「だからついティーンの家に行かなくても、ここに出来ることだってあるでしょ？」

自分の感情が不安定な今、できることならティーンと距離を置きたつた。もつと冷静に、婚約者という立場を演じられるように。でなければどんな失敗を仕出かすか、その方が恐ろしい。

王宮に行つても、出来るだけ目立たないようにしていれば、それでも何とかなるのではないか？

イヴァンジエリンはそれを一笑に付した。

『まさか、あなた。マナーが一朝一夕で身につくとも思つてらつしゃるのではなくて？』

馬鹿にしたよつに鼻で笑われ、そのまさかですとも言えずに、口を噤む。

『大体、手を荒らす水仕事など厳禁ですわ。当然、指にタコを作つてゐる貴族令嬢なんてもつてのほか。職人としての仕事もしばらくは控えなさい』

『ちよつと、待つてよ… それじゃ、どうやって生活しろって言つ

のよ

それは聞き捨てならなかつた。
収入が無くなつてしまつては食べていいくとも出来ないではない
か。

『ですから、ディーン様のお屋敷に行くのでしょう。すべて使用
人がやつてくれますわ。あなたは朝から夜まで……いえ、夜から朝
までみつちりわたくしが鍛えて差し上げますわ』

ふふつと笑つたその笑みに、なぜだか背筋が凍る気がした。
だが、これは決定事項ではない。イヴァンジエリンが勝手に言つ
ているだけであつて、おしかける先の家主の許可がなければ話にな
らない。それに雇用主でもあるディーンから仕事があればやらなけ
ればならないのだ。仕事をしないなんて契約違反だろう。

「ディーンも迷惑でしょ? だから反対

「いや、妙案だな」

すかさず返された言葉に、ユーフェニアは思わず目を見開いてソ
ファに座る男を凝視した。

「早くもきみと同じ屋敷で生活できるなんて夢のよつだね
「は?」

思わず、何かの聞き間違いかと聞き返す。だが、向けられた眼差
しは逸らされることなく、ユーフェニアと視線が合つと今まで見た
こともないような甘さを含んだ。

内心たじろぎながらも、彼は恥ずかしげもなく更に言葉を紡ぐ。
「もちろん、必要なものはこちらで手配するから心配はいらない

「あの?」

何か勘違いしているよつな発言に、眉間に皺が寄る。

ずっとお世話になるつもりはないのだ。ほんの一時的な話なのだ
から、余計なお金は使わないでくれないだろうか。

妙な誤解を正そうと口を開こうとしたが、ディーンの方が一步早
かつた。

「そうか。ナフム殿に話をしておかないといけないな」

「……ちょっと?」

ソファから立ち上がり『ディーンは、コーフンニアの問いかけを無視して早速一階へと向かっている。

その行動の早さに、一瞬思考が追いつかない。

一体ナフムに何を話すと言つのか。いや、それよりもコーフンニアは承諾した覚えはないのだ。

「待つてよ。勝手にそんなこと決められても困るのよ!」

階段下でどうにか追いつくと、なんとか彼を引き止めた。

勝手に人の生活を乱さないで欲しい。やつとベレスフォード邸から帰ってきたばかりだと言つのに、これでは落ち着く間がないではないか。

不満を込めて見つめると、振り返った『ディーンはいつも通りの余裕ある笑みを浮かべ、逆に問いかけてきた。

「なぜ?」

「え、なぜって……」

問われ、その理由が思い浮かばないことに気づく。

それこそ、疲れているとかでは理由にならない気がするし、一度協力すると言つた以上、イヴアンジエリンの言つていることも理解できないわけではないのだ。せめてマナーぐらいは身につけておくべきなのかもしれない、ベレスフォード邸で食事をする度にいたたまれない思いをしたコーフンニアは、思い知つたばかりだった。言葉に詰まつて視線を下げるが、突然、目の前に垂れていた前髪を指ですくうようにして、耳にかけられた。

ハツとする程近くに『ディーンがいて、思わず一步下がる。

「……その警戒心も婚約者に対してどうかと思つけど……」

不満そうな声に、キツと視線を上げる。

傍から見れば確かに婚約者らしからぬ行動だらう。でも、仕方がないではないか。先日の温室での出来事がどうしても頭に過つてしまつたから。警戒せずにいられない。

それに勝手に『ディーンが婚約者だと言つているだけなのだ。おそ

らく公にも近いうちに婚約者という立場になるのだろうが、もとから破棄する予定なのだから、ティーンに對して心を許すつもりはない。だけ。

再び伸ばされた手に、思わず竦んで肩に力が入った。その一方で心臓が勝手に跳ね上がる。

しかし彼はコーフュニアの耳の　触れるか触れないかという体温だけを伝える距離でピタリと手を止めた。

「以前、きみの心を私に向けてみせると言つたが、その言葉でここまで怯えられるのはさすがに本意じゃないんだ」

「怯えてなんて」

いないと続けよつとして、今も硬直したように肩に力が入つてゐる事実に気づく。

ティーンに想いを告げられる前と変わりなく接しているつもりだったが、無意識のうちに避けていたのだろうか。いや、精神的に落ち着きたかつたから逃げていたことは認めるが。

「少なくとも私は傷つくし、きみに嫌われたとは思いたくない」

だから必要以上に逃げないで欲しいし、一応婚約者という立場である以上信用して欲しいと静かな聲音で告げられる。

その声はいつもの戯言を言う時の響きはなく、確かにじこか気落ちしたように聞こえた。

コーフュニアは小さく息を吐き出すと共に、ゆっくりと肩に入っていた力を抜いた。

信用、というのはともかくとして、本当にティーンが自分のことを想つてくれているのなら、自分の取つた「避ける」という行動は確かに彼を傷つけるものだ。もしも自分が想いを告げた相手に避けるような行動を取られたら、同じく嫌われたと思うかもしれない。きっと酷く打ちのめされるだろう。

「……ごめんなさい」

自分のことしか考えていなかつた事に気づき、知らず謝罪の言葉が口をついて出していた。自ずと視線も下がり、罪悪感まで込み上げ

てくる。

確かにこのままではいけないのかもしれない。婚約者という役目を引き受けたからには、ティーンに対する意識を入れ変えなければならぬのだろう。それは容易なことではないかもしれないが。

反省を込めてまんじりと想えていた為、耳の横にあつたはずの手が、いつの間にか移動したことに気づかなかつた。ポンッと頭の上に置かれ、驚いてティーンを見上げる。

どこか寂しげな表情を浮かべたティーンと目が合つと、彼はまるで子供をあやす様に頭を撫でる。先程耳に掛けたはずの前髪も再び眼前にぶら下がる。

「な、に？」

あまりにもらしからぬ態度に、目を瞬ぐ。

しかし。

「きみが素直だと少し寂しいな」

相変わらずなその返事に、どういつ意味よ、と問おうとして、ふと髪をかき乱すその手が、コーフェニアが落ち込んだ時によくナフムが取る行動である事に気づく。

今彼の手は、ただ、その温もりだけをコーフェニアに伝えていた。いくら望んでも、今では決して感じることのできない温もり。そのことにじわりと心の奥が疼く。

つまり、彼は自らの感情を押しつけ、強要するつもりはないと言いたいのだろうか。……好きにさせてみせると言つたのに。黙り込んでその判断に悩んでいると、やはり意外なほど呆気なく彼の手は離れていた。

不覚にもそれを寂しく思つてしまつた。同時に、たつたこれだけのことでの無償に与えられる愛情に飢えていたのかと、自覚してしまつた。

だから背を向けて一階に向かうティーンをそれ以上引き止めることはできなくて。もの欲しげに見つめている自分に気づかなかつた。だが後々になつて考へると、やはりこの時完全に言つくるめられ

ていたのだが、あの祭りで。一人で勝手に話を進める男を前に当然なす術もなく　誰一人として味方となってくれなかつたユーフエミアは数日後、ディーンの住む屋敷オールドリッジ邸での生活を開始することを余儀なくされてしまった。

バルフォアには子供から大人まで知っている怪奇譚がある。それは現在街一番の金持ちが住むといつていーン・ラムレイの屋敷にまつわる話である。

イヴァンジエリンが提案したコーフェミアの今後の課題は、その噂の屋敷オールドリッジ邸で居候をしながら特訓を受けることとなつたのだが、実はコーフェミアには一つだけ気がかりがあった。

「ねえ、本当に幽霊が出るの？」

先程までティーンが座っていたソファに腰を下ろし、膝の上にリックを置くと、ためらいつつ彼らに尋ねた。

ティーンはナフムをどうやって言いくるめたのか、晴れ晴れとした顔をして迎えの馬車に乗り込む直前、屋敷の準備が終わり次第すぐにも迎えたいから、いつでも来られるように準備をしていてくれと言つてきた。

なんだかその言い方は、まるで花嫁を迎える言葉のように聞こえなくもなかつたが、人通りの少ないこんな時間に、隣近所の誰かが聞いているかもしれないと思うと、無駄に長く反論してはそれこそ人目を引くことになりかねないと、すぐさま了承の意を伝え、とにかくティーンを馬車に押し込むことを優先した。

結局のところ、オールドリッジ邸に居候することが決まつてしまつた今では、その件はすでに諦めの心境だが、この瞳を持つ限り気になるのはやはり幽霊が出るか否かだ。

『今更、何をおっしゃつているの？』

『俺らのこと何だと思つてるんだ？』

口々に言われ、その中に否定の言葉が一つも含まれていないこと

に気づき、がくじと頭を垂れた。

本当は分かつていたのだが。

ふと頭の片隅に、身の毛がよだつような過去が甦る。

完全に思い出す前に頭を横に振つて記憶を隅に押しやると、調子よくシンバルを鳴らすぬいぐるみを見下ろした。

オールドリッジ邸の怪は、実はその背景に一つの事件が元となつていることも広く知られているのだ。

今から五十年ほど前。

街一番の金持ちとして名を馳せていたオールドリッジ卿は、その人望の厚さからも街の住民に広く慕われていた。

元来バルフォアは自治都市である。街は市制で動き、市議の一人でもあつた彼は、顔も広く、オールドリッジ邸はいつも人の出入りが激しかつた。

ある夜。

オールドリッジ邸から断末魔の「」とき悲鳴が響き渡つた。

それは一つではない。時を置き、一一つ、三つと また、ガラスの割れる音や何かを言い合つ声、荒々しい物音が近隣の家では聞かれていた。

通報により慌ただしく夜警が駆けつけると、時すでに遅く、磨き上げられた床には一面に広がつた血だまりと、壁や天井に飛び散つた夥しい血のあとが乾く間もないほど生々しく、蠟燭の灯りを受け、壁を伝つていたといつ。

一家もろとも使用人一同、息をしている者はいなかつた。
虚ろな瞳は何も映さず、犯人について語るものは誰一人としておらず。

後の調べで、金目のものを盗まれていたことから夜盗に入られたに違いないということで事件は幕を閉じた。

『ま、確かにいるな。『ごちや ごちや』と』

だからどうしたとでも言いたげな声に、我に返る。

思わず眉間に皺が寄ってしまったのは言うまでもない。

「『ごちや ごちやって、何よ！？ まさかオールドリッジ卿までいるとか言わないでよっ？』

リックを見下ろして、半ば冗談半分に言い放つ。オールドリッジ卿は五十年前に存在した人物とは言え、バルフォアでは口伝上の人物になりつつある。どれほど立派な人物であったか知らないが、そうは言つても手に力が入るのはやはり想像すると怖いからで。噂では、オールドリッジ邸に入つた夜盗は、かなりの悪行を働いたとのこと。

残されていた死体は、数を数えると人数分なのだが、どれがどの人物の部分であるのか判別が難しかったという。

それでもオールドリッジ卿は、頭と胴体が別れているだけで見つかつたらしいのだが。

『当然いらっしゃるわよ。とても氣のいい方ですわ』

イヴァンジエリンはうふふと笑い、しかし何を思ったのか、スッと身体全体に冷ややかな空気を纏わせると、まさか、と確認してきた。

『たかがあの屋敷の住人程度で、逃げ出すつもりではありませんわよね？』

ミアは言葉に詰まる。

『楽しい連中だぜ？』

リックが助け船を出してくれたが、幽霊が楽しいとはどうしても思えない。

『あり得ない！』

そんなところで生活をしているティーンは、やはり変人だ。

彼があの屋敷に住むようになつて、パーティでも開いているかのような賑わいもあつたとか、なかつたとか……。そう言えば、イヴ

アンジンは言つていなかつたか。夜から朝までみつちり鍛えてあげる、と。つまりそれだと彼らの生活時間と当然重なるということではないか。

ひやりとしたものが背筋を駆け上る。

イヴァンジンはコーエンニアの言葉に憤慨した様子を見せた。『あり得ないつて、あなたね。わたくしたちの存在 자체まで否定しないでくださいな』

その言葉に、リックまでがシンバルを鳴らして同意した。

『見えるからには、仕方ないだろ？』 謹めて、あいつのつて仲良くやつていけばいいんだよ』

つまり、ティーンは仲良くやつているのか。

なんだか眩暈がしてくる。

ただでさえ、考えなければならぬことが多いことこの上、どうしてこう次から次へと問題が出てくるのか。

コーエンニアは疲れた様に、ソファに突つ伏すと呟くひとのない溜息を長々と吐き出したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0002r/>

黄昏時の溜息

2011年10月10日11時15分発行